

# 20周年記念誌



日本財団聴覚障害者海外留学奨学金事業奨学生同窓会

Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION

# 目次

**01**

日本ASL協会 挨拶

**02**

日本財団 挨拶

**03**

序にかえて

**04**

座談会紹介

**05**

座談会：ろう者が専門職として活躍するためには

**12**

座談会：みんなの参加を保障する支援とは

**18**

座談会：ろう教育の現場～10年ほど前と今とで現場は大きく変わったのか

**25**

座談会：乳幼児支援の現場における課題とこれから

**32**

座談会：言語学がどう手話教授に役立つか

**40**

座談会：ろう者の身体感覚から生まれる可能性

# 目次

**48**

座談会：交差性：点から  
面へ

**57**

20周年記念式典で提示さ  
れたポスター

**74**

これまでの奨学生一覧

**76**

編集後記

# 日本財団聴覚障害者海外奨学金事業20周年の挨拶



**NPO法人日本ASL協会  
会長 武田太一**

「聴覚障害があるけど、海外で学びたい！」

子どもの頃はそんなことを漠然と思っていました。それを叶えてくれたのが、我が日本ASL協会が始めた日本財団聴覚障害者海外奨学金事業です。その事業も2004年の開始から20周年を迎えました。

日本ASL協会は過去に米国留学を経験した、あるいはASL(アメリカ手話言語)を学習した方々が集まって設立した団体です。1988年にスタートし、30年以上の活動実績を積み重ねてきました。これまでに海外から招聘講師を招いてASLクラスを開催したり、ここ近年は東京デフリンピック2025の開催に伴い国際手話クラスも増設したりしてきました。コロナ禍の間は受講生が思うように集まらず、苦しい思いもしましたが、なんとか皆様の支えのおかげで続いてきました。

そんな当協会の留学奨学金事業は2004年に第1期生を送り出してから、現在までに30名以上の留学奨学生がいます。私もその中のひとりです。学生の頃に日本ASL協会の存在を知り、ちょうどその頃に留学奨学金事業が開始しました。子どもの頃に思っていた海外で学べるチャンスがやってきたのは言うまでもありません。ろう・難聴者にとって英語やASLは第三・第四言語ともなりうる上に、これまで留学経験者の少なさから情報もそれほど多くはありませんでした。この事業がスタートしたことによって求めている支援を得られるというのは大きな意義があります。私はろう重複児・者の支援をテーマに米国留学を果たしましたが、他の奨学生たちもそれぞれ自分が決めたテーマで学識と経験を留学先で自分のものにしてきました。事業開始当初は米国限定でしたが、ここ数年は留学可能範囲が広がり、カナダ・韓国・イギリスに留学した奨学生もいます。

帰国後は留学奨学生同窓会及び日本ASL協会の理事、のちに会長としてこの事業を陰ながら応援してきました。この20年の間に日本もさまざまな整備が進められ、「障害者差別解消法」「手話言語施策推進法」などが制定されてきました。法が制定された後、私たちの生活が変わってきたのかなど留学奨学生たちが思っていることをまとめたのがこの記念誌だろうと思います。それぞれが留学地で学んだこと、また日本やアジアで活かしていきたいことを是非お読みいただけたらと思います。

この事業を20年もの間支援し続けてこられた日本財団には言葉では言い表せないほど感謝しています。私個人も留学奨学金事業のみならず他の分野でも日本財団にお世話になる機会が多く、このような手厚い支援をいただける数少ない団体とのご縁があったこと、心からお礼を申し上げます。私たち日本ASL協会役員及び留学奨学生一同、多大なる支援に対してのお返しとして日本及びアジア諸国でのろうコミュニティの発展に尽力を続けていくことを約束します。

# 日本財団聴覚障害者海外奨学金 20周年に寄せて



日本財団  
常務理事 佐藤英夫

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業20周年、誠におめでとうございます。

事業開始当時、日本の教育機関における情報補償等、聴覚障害のある学生に対する支援は、決して十分とは言えず、大学への進学率も低いのが実情でした。また、教育環境の整った海外での留学に挑戦するために十分な奨学金制度も無かったため、本事業に取り組むことにいたしました。

本事業は、より多くの意欲ある学生に海外で学ぶ機会を提供し、留学で得た経験や知識を活かして活躍いただくと共に、教育環境の改善や教育格差の解消など、社会に還元いただくことを目的とするものです。

事業を続ける中で、制度のブラッシュアップを重ね、留学対象国の拡大や、専門性を高めたい社会人を対象としたキャリアアップコースの開設に至りました。研究内容も言語学や教育学から、アートや多様性まで多岐に渡り、30名を超える奨学生が得た知見や経験は実にバリエーション豊かです。

奨学生がそれぞれのフィールドで活躍され、ロールモデルとなることで、聞こえない人はもちろん、様々な制約がある人々の背中を押すことができるものと考えています。

この20年の間、関係者のご努力により、聴覚障害者に対する理解も徐々に進み、2025年には、手話施策推進法が施行され、学校における手話による教育、大学における配慮が施策として明記され、今後、国内の教育環境も改善していくことが期待されます。

創設以来、奨学生自身の意識や能力の向上はもちろんのこと、本奨学金事業が日本やアジア諸国のろう者のコミュニティの発展を担う人材を輩出することで、日本のろう社会全体の底上げに繋がることと思います。

障害の有無、年齢、性別や国籍を超えて、誰もが対等な立場と機会を享受し、社会の一員として参画する共生社会の実現に向けて奨学生の皆さんの益々の活躍を大いに期待しています。

## 序にかえて

# 学びの20年 - 世界で学んだろう・難聴者が語る今後のろう社会とこれから

元号が平成だった2004年に始まった日本財団聴覚障害者海外奨学金事業は、令和となった2025年に20周年という節目を迎えました。この20年の間に、多くのろう・難聴者が日本から羽ばたき、世界各地で学び、それぞれの分野で専門性を磨いてきました。日本財団や日本ASL協会が丁寧に蒔いてきた一つ一つの種は、現在、社会のさまざまな領域で少しずつですが、芽を咲かせてきています。教育、福祉、心理、医療、言語、情報保障、ICT、芸術、政策など、その歩みは多様でありながら、日本のろう社会と広く市民社会全体に新しい視点と実践をもたらしつつあります。

しかし、この20年の蓄積の意味は、単に海外で専門知識を身につけた人材を育成したということだけにはとどまりません。本奨学金事業が生み出してきた最も重要な成果は、ろう・難聴者自身が「知の主体」として社会を捉え、物語を紡ぎ、そして水面を波打つようにろう者の生活向上に貢献する営みを育んできたことに尽きます。

これまで多くの社会制度や学問体系は、音声言語を前提とした枠組みの中で形成されてきました。その中で、ろう者はしばしば「支援を受ける存在」として語られ、当事者自身の経験や言語が知の源泉として扱われることは決して多くありませんでした。しかし、手話言語を第一言語とするろう者や手話を使う難聴者の視点は、社会の見え方そのものを変える力を持っています。米国をはじめとする世界各地のアカデミアやろう社会で学んだ奨学生たちは、その視点をもとに、ろう者の生活に関わる様々な領域に新しい問いを投げかけ続けています。

日本手話や日本語が通じない海外での学びは、単なる知識の獲得で形容できるものではありません。異なる文化や社会制度の中で、日本人としての自らの言語とアイデンティティを見つめ直し、ろう者として私たちが過ごしている現世界を理解する枠組みを再構築する経験とも言えるでしょう。その経験は、留学完了後の活動の中で、音声社会を中心とした社会に対する批判的視点や新しい実践として現れてきました。ろう教育のあり方を問い直す取り組み、手話の価値を再評価する研究、医療や福祉の現場における当事者視点の導入、情報保障のあり方の再検討、さらには芸術や文化の領域における表現の創出など、その実践は多岐にわたります。

本記念誌では、10周年記念誌のような個々の活動報告ではなく、「専門領域」という視点から、この20年の歩みを振り返ります。教育、言語、福祉、情報保障、アート、クロス領域など、多様な分野で活動する奨学生がテーマごとに集まり、座談会形式でそれぞれの現場から見える課題と可能性を語り合いました。そこには、ろう・難聴者が専門職として、一人の市民として社会と向き合いながら、今まさに、自らの経験と言語を基盤に知を生み出していく姿なのです。

ろう社会の未来は、誰かの手によって与えられるものではありません。それは、ろう・難聴者自身が語り、考え、実践する中で形づくられていくものです。本記念誌に収録された対話は、その営みの一端であり、同時にこれからの社会への問いでもあります。

この20年の歩みの先にあるのは、ろう・難聴者が社会の周縁に位置づけられる存在ではなく、言語と文化を基盤に知を創り出し、社会を構想する主体として生きる未来です。本記念誌が、その歩みを記録するとともに、次の世代が新たな知と実践を生み出していくための礎となることを願っています。

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業同窓会を代表して

20周年記念誌編集委員

鈴木美彩・高山亨太・福島愛未・牧谷陽平・皆川愛

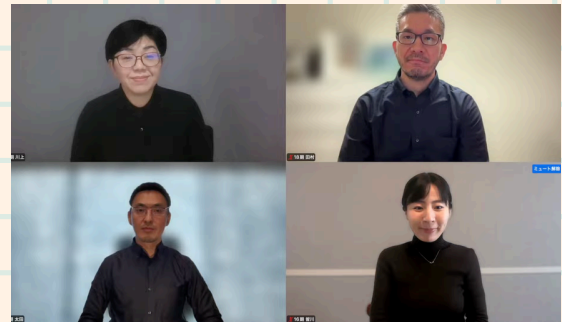
# 日本財団聴覚障害者奨学金事業奨学生同窓会



## 20周年記念座談会



1.福祉「ろう者が専門職として活躍するためには」



2.情報保障「地域で支える—情報保障と社会システム構築の現場から」



3.ろう教育「ろう教育の現場～10年ほど前と今とで現場は大きく変わったのか」



4.早期教育「小さな手のことば—乳幼児期の支援と家族の力」



5.手話言語学「ことばの科学—手話言語学と教育の未来」



6.ろう者の身体感覚から生まれる可能性



7.学際領域+クロストーク「交差性」



## 座談会：ろう者が専門職として活躍するためには

登壇者：池上真（1期） 高山亨太（2期） 福田桂（9期）

高山 お集まりいただき、ありがとうございます。高山亨太と申します。よろしくお願いいたします。この座談会のテーマは、地域福祉または精神というテーマです。日本財団の海外留学奨学金事業修了生として3人登壇いただいています。概ね30分から一時間程度、座談会を行う予定です。本日、私を含め3人で座談会を進めます。本日の登壇者を順に紹介します。まず、私から、高山亨太と申します。サインネームはこのように表します。留学奨学金事業の二期生です。留学先はアメリカのギャロデット大学大学院で、ソーシャルワークを学びました。日本に戻ってから、現場での仕事や活動を経て、2014年からギャロデット大学にてソーシャルワークの教鞭をとり10年以上になります。そして、2025年7月に日本に帰国をしました。今日は司会と座談会の参加者という役割です。では、順番に登壇者をご紹介しますと思います。一期生の池上さんお願いします。

池上 池上と申しますよろしくお願いいたします。一期生です。私も高山さんと同じくギャロデット大学に留学をしました。留学先で学んだ内容も高山さんと同じくソーシャルワーク、いわゆる社会福祉について学びました。留学後はアメリカのフィラデルフィア、ワシントンDCとニューヨークのちょうど真ん中にありますが、そこでソーシャルワークの仕事をしていました。その後、現在はアメリカ南部、アトランタにてソーシャルワークの仕事をしています。ですので、ずっとアメリカで暮らしていて、約20年になります。今日は色々アメリカでの経験や学んだ内容、それが今どのように生きているか、また逆に課題が何かということについて、お2人とお話できることを楽しみにしています。よろしくお願いいたします

高山 ありがとうございます。次は九期生の福田さん、よろしくお願いいたします。

福田 九期生の福田と申します。九期生です。私も2人と同じギャロデット大学に留学をしました。私の場合、専攻に属して学んでいたわけではなく、国際特別学生プログラムで一年間学んだ後、二ヶ月間、ワシントン州シアトルで、盲ろうに対する制度が充実しているのですが、そこでインターンシップを経験しました。その後、日本に戻り、改めて大学で学び直し、社会福祉の勉強をしました。現場で働いているのですが、まず介助施設、ろう重複障害の施設で一年ほど仕事をしながら、地域生活支援の仕事もしています。私の留学のテーマは盲ろうの支援ということで、盲ろう当事者として支援に関する研究をしていました。現在の仕事とは直接的に関係ないのですが、活動と仕事を両立しながら色々なことを学んでいます。

高山 ありがとうございました。補足説明ですが、私の場合、精神保健というテーマで留学に行きました。池上さんは法律や障害者差別をテーマに留学をしました。申し訳ありません。留学テーマに関して、具体的な説明が漏れていました。この座談会でのルールを説明したいと思います。もし、何か発言をしたいときは手を挙げていただければ、司会の方で当てますので、その後、名前を名乗っていただいて、話始める。途中で話の腰を折ったりせずに、話を終えるまで待機するという方法でご協力をお願いします。さて、本日は3つほど、論点があります。まずは、留学のきっかけについて。例えば日本で何かしらの課題を感じて、留学に繋がったのかなど、きっかけに関する点について。2点目は留学終了後、アメリカで働いている方もいますが、逆に課題が何か。というのは、今日登壇している3人はろう者当事者の専門職です。ろう者や盲ろう者で、かつ、専門職の立場で色々な仕事をしている3人です。ですので、まあこの3人でどういった課題があるのかという点、想像でもいいのでお話できるといいなと思います。

高山　そして最後に、今後10年または長期的に見て30年後に何が必要か、どういった取り組みが必要か、そういったことを最後にそれぞれからのメッセージとしてお話をさせていただきたいと思います。まず一期生の池上さんから、順番に話していただきたいと思うのですが、留学した時のきっかけについて当時の社会状況とも関連してお話していただけるとありがたいのですが、池上さんお願いできますか。

池上　留学のきっかけは、そうですね、もう私が留学したのは20年以上前の話ですので……。まあ長い人生で、何か新しいことをし、色々なことを変えたいと思っていました。私が大学生だった時、もう20年前ですが、あの20年前の状況で言うと、例えば講義にはなかなか通訳がつかなくなったり、自分から色々交渉したり、また就職に関しても、就職した後に様々な場面で通訳がつくのかどうかというように、なかなか難しい状況がありました。その時にアメリカでADA法が施行され、アメリカでの先進的な状況や取り組みがなされているということを耳にしました。学生のときに、色々で見学し、いろんな場面に通訳が付いて、聾者の専門職として、例えば弁護士やソーシャルワーカー、カウンセラー、教師、学校の校長、大学の先生や研究者など色々な立場の専門職があり、そこに手話通訳がついていました。大学でも、十分に手話通訳がつき、専門職としてろう者が採用されているという背景を目の当たりにしました。その背景に法律があるということも実感しました。日本に帰国後、引き続き勉強をして、大学を卒業したのですが、その後の進路等を考えていた時に、今、この日本の状況で、そのまま活動を続け、ろうあ協会等に入って活動していいのか、アメリカの状況を知りたい、やはり1週間の見学だけでは物足りないというふうに思いました。そのときに日本財団が新聞で留学生・奨学生の募集をしているということを目にして、最初は不合格でも構わないという気持ちで申し込んだら、幸いにも合格をいただきました。そのことがきっかけで、アメリカへ留学することになりました。

高山　ありがとうございます。色々な支援の状況に限界を感じていた、というところがきっかけで留学に繋がったということですね。私の場合は、きっかけは、福祉や精神、心理ということを専門に仕事をしたいと思っていたのですが、実際、仕事の環境は、聞こえる人ばかりで、手話ができる人が少なく、当事者が専門職として働くというのは少ない環境でした。こういった環境を変えてきたい、もっとろう当事者の専門職を増やしていきたい、そのための教育をしていきたい、というように思っていました。ただそのような環境は、日本では皆無でした。当時、ギャロデット大学の存在は知っていたので、ろう当事者の専門職のカリキュラムを知りたいと思い、留学を決意しました。次は九期生の福田さんいかがでしょうか。

福田　そうですね。きっかけの話は長くなりますが、まず、私はろう者ですけれども、アッシャー症候群が2歳の時に見つかりました。ですので、本来は盲ろうに近い状態ではありますが、実は私が成人するまで、全然気づかなかったんです。20年ぐらい前に、やっと盲ろうの世界に入ったというような状況です。盲ろうという言葉も知らなかった状態でしたし、ろう学校に入って、そのまま過ごし、その時に確かに「少し見えにくいなあ」というような感覚がありましたが、「まあ大丈夫だろう」と思い、ずっと学校生活を送ってきました。20歳ぐらいの時に、目の状態が悪化をし、その時もかなり苦しい思いをしたけれども、盲ろうというところから当事者の立場で、様々な支援活動をしたり、ガイドをしたりというのを5年ぐらい続けていました。活動のなかで、やはり盲ろう者のコミュニケーション方法というのは、人によって異なるということを感じました。本当に千差万別で、まあとりわけ、触手話や接近手話が主なコミュニケーションになります。私も通訳やガイドで同行し様々な支援を見る中で、支援の差やばらつきを感じるようになりました。支援者の聴覚障害の有無にかかわらず、支援にばらつきがある、そのことに違和感を感じていました。日本の盲ろう者は音声ベースの方が多く、手話ベースの方の場合、周りの状況を理解することに時間を要してしまいます。さらに当事者のリーダーシップもまだまだ弱く、どうしても受け身になってしまう。音声ベースの方は、積極的に行動される方もいらっしゃいます。ろう者でも実力のある方もいらっしゃいますし、対等になって欲しいと感じました。そのような時に日本財団の留学奨学生に申し込んだんですが、最初は不合格でした。そのとき、私は支援者としての立場を意識していたのですが、面接後に、「あなたは当事者ではない、アイデンティティが形成されていない」ということを言われました。私もそのとおりだと感じました。一度アメリカに行き、色々な人に出会い、そこで考え方を改めてから、当事者として改めて留学をするための目標を定め、再挑戦をし、合格しました。

高山 ありがとうございます。盲ろうの当事者になる過程ということで、アイデンティティのことも含めて話していただきました。ありがとうございます。少し質問していいでしょうか。池上さんにも同じ質問するかと思うのですが、福田さんは盲ろう当事者の立場ですよね。専門職、特に、福祉専門職として支援をする盲ろう当事者というのは多いのでしょうか、少ないのでしょうか。だいたいどれくらいいらっしゃるかご存知ですか。

福田 ご質問ありがとうございます。まず日本の盲ろう当事者の数というのは、1万4千人くらいいます。視覚障害が約30万を少し超えるくらい。聴覚障害も30万くらいです。その中に1万4千人の盲ろう者がいる。音声優位、手話優位等はあるのですが、身振りでコミュニケーションをとる方もいます。専門職の方というと、あまりいらっしゃらないですね。かつては、緘黙で資格を有している方がいらっしゃったんですが、盲ろう者として実際に現場でいろいろとお仕事されている方というのはあまり聞かないですね。今は変わっているかもしれませんが。

高山 次に池上さんにお伺いします。アメリカの方はどうでしょう。ろう当事者の専門職というのはたくさんいらっしゃるのですか？

池上 先ほどもお伝えしたとおり、やはりADA法があるので、大学でもろう学生が入学すれば、きちんと手話通訳が手配されますし、聞こえる人と同じように勉強でき、学位を取得することができます。日本と比較すると、確かに制度の違い等もありますが、確かにろう当事者の専門職は、日本と比べても多いかと思います。ただ、数は多いのですが、もっと必要かなと思います。ろう当事者だけでも、例えば盲ろうであったり、他の障害との重複持っている方、また精神との重複の方、母子家庭など、多様な専門分野があるので、ろう者だけのことを学ぶだけでは不十分で、深く多くの分野を勉強する必要があると思います。またはトレーニングの機会も増えてきていますが、さらなる開発が必要かなと思います。

高山 先ほどADA法の説明があったのですが、「障害を持つアメリカ人法」ですよね。差別禁止という概念ですね。日本の場合、障害者差別解消法というのがこれに似た法律になります。ご説明ありがとうございます。お2人の留学に至ったきっかけをお聞かせいただきました。我々、三人とも卒業後にも当事者として様々な活動をしているのですが、私の場合、現場で働いた後、大学に入りましたが、同時に難しさを感じました。理由としては、大学で専門的に学ぶことはできましたが、卒業後も専門職として学び続けなければなりません。ろう者や盲ろう者の場合、学べる場に限りがあります。手話で学び、議論ができる場というのがやはり少ない。その点は課題だと感じています。そのことを踏まえて、2つ目の話に進みたいと思います。現場で普段考えていることや専門職の立場で考えていることをお伺いしたいです。特に池上さんは、ミクロの視点でのカウンセリング等の対人援助に当たられていると思います。福田さんの場合は、地域における支援、コミュニティと繋ぐ色々な支援というのをされていると思います。どちらかというマクロ的な立場でお仕事をされていると思います。私は教育の立場です。まず、どうでしょう。池上さんから、いわゆるミクロの視点でのお話をお伺いしてもよろしいですか。

池上 ギャロデット大学でソーシャルワークの学位を取得した後、資格を取得するために、実務経験を2年から3年ほど積んで、「臨床」、手話ではこう表しますよね、臨床の現場経験、対人援助や家族支援、グループワーク、グループ支援などを学ぶ必要があり、その際、経験者の側で色々学ぶ機会があります。卒業後、たまたま運良くろう者の専門職に就くことができました。みなさん同じ状況だと思うのですが、資格取得後にアメリカでは、ろう者の専門職の学会、大会のようなものが二年おきに開催されます。そのような機会に参加し、専門職同士で様々な話を聞くことができます。やはり大学卒業まではできるのですが、就職した後、就職まではこぎつけられるんですが、上司、メンター、またスーパーバイザー、日本の場合は「現場の監督者」みたいな意味でしょうか、やはりスーパーバイザーとのやり取りが充分でないので、経験をなかなか積めないという人がいるというのは聞いたことがあります。これはやはり問題じゃないかと思っています。カウンセリング終了後に、次のサービスを提供できるろうの専門職がない状況になるわけです。

池上 そうなると、次の支援につながらず、また自分のところに戻ってくることになる。私個人の課題というよりも、ミクロ的な視点では問題ないが、システムとして課題があると感じています。ろう者に対する教育や地域、ミクロな支援を循環しながら、一緒に連携をしながら支援をしていく必要性を感じています。

高山 ありがとうございます。本人が対人援助のスキルや力は有していても、手話でスーパーバイザーをしてくれる方を探すのは本当に大変ですね。日本もやはり同じような状況ですね。メンターからの指導というのは不十分です。資格を取得する所までが限界というところは、似たような状況があるのかなと思います。では、次に福田さん。地域でのお立場で、普段感じていること、考えていることがあればお話しいただけますか。

福田 留学期間中は、アメリカの盲ろう者とたくさんお会いしました。やはりアメリカの場合、専門職として様々な分野で働いている人がたくさんいらっしゃることもあり、大きな影響を受けました。帰国後、改めて感じたことは、盲ろう者の支援に関わるというのが、非常に大きな意義があるのではないかなと思いました。日本でも良い制度というのはあります。例えば盲ろう支援通訳であったり、ガイドヘルプであったり、これらの制度は、日本独自なのですね。支援者は通訳とガイドヘルプの役割を担うわけですが、言葉や文化が違えば、意思を上手く伝えられない面もあります。当事者が関わることで「分かってもらえた」みたいな、場面が増えてきたように感じています。コミュニケーションのズレや気持ちのズレを修正する支援技術も必要になってきています。また、今まで私はずっと支援される側だったのですが、もちろんそのことも意味があるのですが、支援する側の立場に変わると、特に支援ということは特別なことではなく、自然な流れの中でお互い助け合いながら進めていくということが大事になるのではと思いました。当事者が現場に関わる上で、派遣される通訳者やガイドの人との連携も必要になりますし、本人がどうしたいか、また何がしたいのか、ということを紹介者に伝えるんですが、十分に伝えきれていないこともあります。そのニーズを直接専門職に伝えてもらい、橋渡しを行えるというのは、非常にいいことかなというふうに思っています。よりよい関係性が築けるのではないかなと思っています。近道になると思っています。課題で言うと、手話通訳の力量も色々ありますが、先ほど説明したとおり、日本の盲ろう者は音声ベースの方が圧倒的に多い状況です。そのため音声日本語優位で、例えば文書を渡されても手話がないことがあります。手話が必要だけれども、通訳者とのコミュニケーションのズレもあり、様々な問題が起こっています。通訳者だけでなく当事者に情報が伝わらないことが非常に困ります。色々な状況を見てみると、手話を使用する盲ろう者の場合、セミリンガル、このことは大学在学時に学ぶのですが、そのような状況が起こっています。難しい問題です。専門性を有する当事者が、情報の伝え方に対する理解を高め、良い関係を構築する必要があります。当事者の視点で、情報の伝え方を整理し、通訳ガイドと共に、現場の負担を軽減する方法を考える必要があります。そこを支え、通訳ガイドの負担を軽減することで、盲ろう者の自立を促していくことにつながっていくと思います。このような技術というのは、ろうの専門職だけではなく、盲ろうの専門職が必要だと思っていますし、私がやるべきことだと思っています。一方で、仕事自体は盲ろう関係ではあえません。日本の大学で学んでいた時に、現場経験も積みました。介護のスタッフとして仕事をしていましたが、もう一つ相談支援専門員という資格を取りました。これは聴覚障害がメインですが、計画相談ですね、地域で暮らさろう者の困りごとや、見えるニーズと見えないニーズというのをきちんと発見し、地域での支援につなげていくということを、今仕事としています。聴覚障害と言いましたが、実際は重複、例えばろうと知的障害、ろうと精神重複等の支援にあたっています。ここには盲ろうも含まれると思います。というのも、ろうと他の障害を併せ持っているからです。自己決定のための意思疎通支援とアドボケイト、例えば、知的障害の場合、思考がうまくまとまらないということがあります。言いたいことがあってもなかなか意思表示ができない場面があります。精神障害も同じようなところがあると思います。それを汲み取り言語化をして行政に相談をし、介護サービス等に繋ぐための提案を行うなど、そのような相談業務を行っています。盲ろう支援だけでなく、ろう重複の支援というところも必要だと思っています。留学時は盲ろう者支援を学び、今は状況変わっておりますが、大なことだと思っています。

高山 ありがとうございます。お2人からお話があったとおり、盲ろう当事者というのは、確かに支援を受ける立場ではあったかもしれませんが、逆に支援をする立場に変わった。当事者だから、意思疎通をしやすくなり、自分が抑圧された経験などから、相手の心理状態もわかる。当事者だからできる支援の方法もあります。もちろん聞こえる人の通訳を排除するというわけではありませんが、そのような人たちとも、一緒に色々できることがある。当事者だからできること、聞こえる人だからできること、というのがあると思います。今、大学で盲ろう学生の入学が増えてきていると聞いています。支援者になりたいという気持ちを持っているという話も聞きます。それは聞こえる・聞こえないに関係ないと思います。私としては、そこで難しさを感じるのが、例えばソーシャルワーク教えている中で、土台の基礎は基本的には共通しているのですが、この基礎の上に乗る専門性というところを、時間やカリキュラムの都合上なかなか教えることができません。ろうとか盲ろうの専門領域というのを、なかなか教えることができない、というのはいつも困っているところです。お二人にお聞きしたいのが、この上乘せされる専門性は、何が必要だと思いますか。もしご意見があれば、お願いしたいと思います。一般的な知識、一般論の上は何を磨くと良いのか、現場の立場でお伺いしたいです。

池上 福田さんからどうぞ。福田さんどうでしょうか。よろしいですか。

福田 質問の意図がよくわかりましたすみません。池上さんに対する質問なのかなと思ってしまいました。すみません。傍観していました。

高山 先ほどお伝えしたとおり、専門職養成をする時に、聞こえる・聞こえない関係なく、ろうや盲ろう関係の知識を教えるときに、すべてを教授することはできません。手話も、ろう者の手話から対应手話まで教えることが難しいですし、盲ろうに関することでも、どこからどこまでを教えるのか。「ろう者」といっても、児童や母子家庭、精神保健もありますし、法律のこと、アドボカシーに関する知識など、多様な知識を要します。そのなかで、特に大事な部分を、専門職を目指す若いう者や手話を学んでいる聞こえる人に対して、伝えたいことがあればお伺いしたい。

福田 難しいことですね。ろう当事者の専門職ではなく、盲ろう当事者の専門職となると、数は非常に少ないです。どこで、どう学べば良いのかというのは、確かに悩むところはあります。私の場合、アメリカで学びましたが、専門的に学んだというよりも、現場を見て、経験をつんでいきました。専門職の立場は脇に置いて、日本の盲ろう者の現状でうと、手話通訳技術についても日本よりアメリカの方が高いのですが、日本の場合、ガイドヘルプも兼ねるため、非常に大変な状況にあると思っています。日本の盲ろう社会の場合、支援者は技術よりも信頼関係が優先されるように感じる。専門的なスキルで支援をするよりも、相手と良い関係性を構築するということがいいのかな。答えになっているかわかりませんが。

高山 ありがとうございます。池上さんはどうですか？

池上 高山さんの意見に共感します。土台に一般論があり、その上に専門性を磨いていっていった時に、ろうに関する専門性というのは、かなり狭い領域ですよ。だから、かなり難しいと思います。お一人お一人、盲ろう者も個々によって状況が異なります。その人たちに合った学びというのは、なかなか難しいところがあります。留学後、この専門性っていうのを磨こうと思った時、現場や社会に出た時に、自分が持っている知識というのが、果たして正解なのかどうか、合っているのかどうか、という疑問を感じる時もあります。やはり個々によって状況は異なるので、カリキュラムがどのような形がいいのか、または自主学習的に柔軟に、学生の興味に合わせて、教えるのが良いのかなと思います。福田さんと同じような回答になるのですが、良い関係性を築くためには、私たちが何をすべきなのか、ろう者・盲ろう者の多くが抑圧された経験や、精神的なトラウマの経験をされていると思います。私たちが専門職として、支援をして行くのは非常に良いことだと思います。似たような経験を理解することもできます。ただその私たち自身も、精神的なトラウマを持ちながら、専門性を発揮して支援を行うということ、これは実はかなり大変なことだと思っています。

池上 ですので、この一般論の上に乗る専門性というのは、社会的に見れば、支援をする・されるというような関係性に加え、自身の安全を守るところにつながってくると思っています。

高山 ありがとうございます。つまり一人で抱え込まないように、定期的に支え合う仕組みが必要だということですね。また自分の生い立ちを知る機会も必要だということですね。ありがとうございます。そろそろ終了時間が迫ってきましたが3つ目のテーマについて話をし、最後に締めたいと思います。奨学金事業が始まって20年。次の30年までの10年間で、次の若い人たちが育っていきます。これからの10年に対して、何かメッセージなどがあれば、お一人ずつ簡潔にお話いただいでよろしいでしょうか。まず司会の高山から申し上げますが、夢といいますか、あの今後の10年間で是非やりたいと思っていることが、専門性を伸ばすということですね。アメリカではそのような取組があるんですが、日本では不十分です。養成に関するワークショップやカリキュラムやテキスト作成をしていきたい。例えば盲ろうのこと、ろうのこと、ろうと精神障害の重複というような、様々な現場にいろんな人がいらっしやるので、そのような知見を持ち寄って、カリキュラムを作っていく。若いうちがもっと力を発揮できる環境を作れるように支援をしていきたいと思っています。では、次は池上さんお願いできますか。

池上 若い世代、今後の世代の方たちへのメッセージということですが、やはり20年前10年前から社会の状況も大きく変わっています。20年前の自分、10年前の自分から今の状況なっているかというのは、当然想像はできなかったですね。今のこの状況、10年後20年後というのは、私自身想像しきれないところがあります。今後10年、いろいろな活動をしていく中で、私自身、好奇心が強いので、まだまだ未知の世界、知らないことがたくさんあると思っています。若い人たちから教わることもたくさんあります。他の障害の方から、教わることもたくさんあります。先ほど話があった上乘せの部分というのは、たくさん学び、知識を得る必要があります。カリキュラムや教科書など、文字化やデジタル化されたものを用いるなど色々な方法はあります。人として好奇心を常に持ち続ける、疑問を持ち、様々な人と交流をし、家族やコミュニティに参加する。高山さんも、まさにそのような活動されていると思います。様々な方と交流をし、質問をし、頭と心の幅を広げ、成長していく、そういった意味で好奇心を失うことなく、常に持ち続けて欲しいと思っています。

高山 ありがとうございます。好奇心を持ち続けるということですね。では、最後に福田さんお願いできますか。一言で結構ですので、メッセージがあればお願いします。

福田 お2人からお話があったとおり、ミクロ的な視点というのは、私は得意ではなくマクロにおける支援、困っている人に寄り添いながら支援をしていくという方法があると思っています。政治的に動くということは、私はあまり得意ではないと思っています。盲ろうに関して言うと、今もしていますが、いろいろなことに挑戦してほしいと思っています。今、支援のアクセスに差があり、その差を埋めて均等にアクセスできるようにしていきたい。様々なコミュニケーション方法がある中で、盲ろう者のコミュニケーションを尊重し、音声ベースと手話ベースが平等になれるようにしていきたいと思っています。手話関係者の方にもご協力いただくことが多いのですが、問題もいろいろあります。セミリングルに関する事など、そのような問題もあります。そのような状況で、盲ろう者、私も当事者ですが、盲ろう者として関わり、ほかの人との差というのを埋めていくことが非常に重要だと思っています。そして十年後ですが、まだまだ遠い先のように感じています。言いたいことはたくさんあるのですが、まずは整理をして行くことが大事だと思っています。盲ろう者が地域社会で安心して暮らせるように、いろいろな事にアクセスできる社会になってほしいと思っています。そのためには支援者と専門職の連携を密にし、支援される側だけでなく、立場を変えて、支援をする側になる、当事者の専門性というところをもって、対等に連携していく必要がある、そういうふうにならざるを得ないと思っています。十年後はまだすぐそこかもしれません、20年後30年後と少しずつ良い方向に進んで行けばいいと思います。専門職で通訳ガイドとどう対等に、盲ろう者と一緒にパートナー関係を築きながら、対等な立場で進んでいくことが大事だと思います。支援者でよくあるのが、「代わりにしてあげる」ということです。一緒に考え主体的に動いてもらうために、意思決定を促していく。そのようなことに対して一緒に考えていきたいと思っています。それが私の伝えたいことです。

福田 支援は受け身ではなく、一緒に作っていくもの、そういうふうを考えて欲しいと思っています。今、若い盲ろう者の数が少ないです。日本の場合は盲ろう者の割合というのは、高齢者の方が圧倒的に多いです。そのあたり気になるところですが、年齢は関係なく、盲ろう者が集まる機会を作っていきたいと思っています。昨年10月に全国盲ろう者大会が開催されました。以前から活動はされていたのですが、その大会の時に、たまたま組織を立ち上げるということになり、若い盲ろう者が必要だということで要望がありました。若い盲ろう者に伝えたいことは、自分の意思疎通やニーズ、またやりたいこと、できること、こういったことをきちんと考え提示していくことが大事です。無理だと諦めるのではなく、できることをきちんと表明して行く。そういったパワーが必要だと思っています。またリーダーシップを養っていく必要があります。私も今それを頑張っているところです。最後に私はろう重複関係の仕事をしていますが、地域と盲ろうの重なる部分がありますが、盲ろうの立場での専門職を目指したい人に対しては、まず現場に関わる、そして色々なことを見聞きした上で、現場経験を積んでいくことが良いと思います。小さなことでもかまいません。少しずつ経験を積み上げていくことが大事です。また専門技術を持つこと、信頼関係に結びつけてほしいというふうに思っています。

高山 ありがとうございます。皆さんお一人お一人だけでは難しいところも、仲間と一緒に頑張っていけば、いろいろなことを変えていけると思います。本日は皆さんご視聴いただきありがとうございました。お2人もありがとうございました。



## 座談会：みんなの参加を保障する支援とは

登壇者：太田琢磨（1期）川上恵（4期）  
皆川愛（16期）田村誠志（18期）

皆川 皆さんお集まりいただきありがとうございます。司会の16期生皆川と申します。よろしくお願ひします。今日のテーマは、情報保障について。それぞれの場で活動やされている皆様にお集まりいただき、ろう・難聴者の情報保障について考えていきたいと思ひます。まずは自己紹介から。1期生太田さんからお願いしてもいいですか？

太田 1期生の太田です。漢字は太い方の太田で琢磨と申します。よろしくお願ひいたします。現在、大学で情報保障の支援を行っております。この仕事に就いたきっかけですが、私が大学に入った頃は、情報保障の支援というのはほぼゼロの状態でした。どうやったらサポートを受けられるのか探したりお願ひをしたりというところからスタートした経緯から現在の仕事につながっております。その後、アメリカに留学をして、帰国した後は、大学の中で障害学生支援室での仕事をしています。よろしくお願ひします。

皆川 太田さん、アメリカはどちらに行かれて何を学ばれましたか？

太田 アメリカなのでギャロデット大学と思われている方が多いと思うんですが、私はロチェスター工科大学というところで、アメリカのニューヨーク州にある大学に行きました。そこはろう者がたくさん通う大学です。情報保障について、ろう者聴者とともに学ぶ大学ですが、情報保障のコーディネートや、派遣また養成について学びました。

皆川 ありがとうございます。続いて川上さんお願ひします。

川上 4期生の川上恵です。私はアメリカのギャローデッド大学に行きました。大学はろう者学、大学院では通訳学部で学びました。帰国後、現在は手話通訳の仕事を行っています。地域では医療関連、国際手話やASL通訳、手話通訳研修講師など、研修講師など様々な活動を行っています。加えて、国内だけではなく、最近ではアジアにもろう通訳に関する講演をしていただくこともあり、少しずつ活動の幅を広げているところです。

皆川 川上さんはWASLIの活動もされていらっしゃるんですね。

川上 世界手話通訳者協会、WASLI。手話ではこのように表現します。この組織としては、9つの地域があつて、アジア地域の中で聴者とペアでろう通訳の代表を務めています。今期2期目となっています。

皆川 ありがとうございます。続いて田村さんお願ひいたします。

田村 田村誠志です。サインネームはこのようにします。生まれは京都です。3歳までろう学校に通っていました。その後は、地域の学校に通い、筑波技術大学に入学しました。それまで手話は知らずに過ごしていましたが、あるろう者と出会って、その人の手話がとても魅力的で惹かれました。手話が言語的にどんな風に構成されているのかを知りたいと思ひ、言語学を専攻しました。アメリカのギャロデット大学で修士プログラムを学び、卒業後、現在は手話言語学の博士課程に通っております。手話の研究テーマは、基本的な手話、言語の文法、語彙、語順、意味、またはイメージから作られる手話などについて研究を行っています。アメリカだけではなく、日本または他の言語の論文を読んで比較をしたり、様々な研究活動を続けています。

皆川 ありがとうございます。手話言語学研究も情報保障に寄与することもあると思うのでよろしく願います。

皆川 川上さんに聞きそびれてしまったんですが、通訳の活動をしようと思ったきっかけについてお話しください。

川上 きっかけはいろいろあったのですが、手話通訳者たちと関わることが多い中で、本来は手話通訳の養成を目指していました。地域での養成を担当していたことや、自分自身の経験、そして通訳現場での経験をもとに、養成に関わりたいと思うようになりました。

皆川 皆さんそれぞれ大学や地域のコミュニティまたは研究者として活動されていますが、情報保障について、現状の問題点や発見などがあればお話ししていただきたいなと思います。いかがでしょうか。

太田 まず、大学の中での情報保障についてお話ししたいと思います。今日本の中で、小中学校での簡単な情報保障というと、UDトークのような音声認識を使うことが増えてきていると思います。そのまま高校大学と、同じ方法が踏襲されていて、情報保障は音声認識があればいいというような状況が見受けられます。川上さん、田村さんもお経験があるかと思うんですが、これまでの文字通訳というとノートテイクやパソコン通訳などがあったと思うんですが、今後はAIを使った新しい通訳の形になっていくかもしれません。そのように支援の形というものが変わりつつあるのかなと思います。選択肢が増えるということは大変うれしいことだと思います。先日のデフリンピックの時にも様々な問題があったと思います。誤変換のまま表示をされ続けてしまったということがありましたよね。それが本当に情報保障として認められるのかどうか。通訳としてみなされるのかどうかというところが問題です。できるだけ正しい情報を、その場で理解して、同じように参加できるというのが本来の目標であると思います。でも授業の時に、誤変換のままでは何が書いてあるのかわからない。それが本当に情報保障と言えるのかどうか。例えば、手話通訳の場合でしたら聞き取れなかったら通訳は一旦止まってしまう。音声認識は止まらず進んでしまう。それも踏まえて、通訳というものについて考えていく必要があると思います。大学の中でのきちんとした通訳の選択ができなくなってしまうという問題も起こってくるかもしれません。社会モデルから考えると、情報保障を選べるようになった、ということは非常にうれしく思っているんですけども、本当の意味での情報保障は何かと考えた場合、支援を提供する側がきちんと情報保障について見極めることができないという支援現場の人の問題もあると思います。一方で実際に情報保障を受ける立場、聴覚障害者も支援を使い慣れていないという問題も含まれています。UDトーク（音声認識）があればいい、それで十分なんだと思ってしまっている。という方が増えているということに問題があるのではないかなと思っています。課題自体も変わってきているなということは感じています。

皆川 ありがとうございます。手話通訳また研究者の立場からお二人いかがですか？

田村 田村です。情報保障といった場合、言語学者の立場からいうと、言語設計システムという見方から始まります。盲ろう者、ろう者、難聴者、聴者など様々な対象者がいます。盲ろう者の場合は、通常の手話では見えません。その場合、指点字だったり、トントンと背中を叩くPTと言われるものがあります。プロタクタイトルというのを取り入れて、コミュニケーションを取ったりしています。ろう者の場合は、手話を見て理解をする。その場合にズレが起こることがありますが、そのズレはなぜ起こったのか。文法的なのか、意味のズレなのか、これを研究として解決に導く。教育現場にそれを提供していくことによって情報保障の前進につながるのかなと思います。聴者の場合は、ろう者の手話を音声に変える。その音声を聴衆が聞く。それが本当に正しく伝わっているのかどうかということは、ろう者には判断ができません。そこに齟齬がないかを確認をする。手話の倫理または考え方が言語学者として、正しく理解できているのかどうかということも研究の中でも取り上げていくということが一番大切なのではないかと思っています。なので、情報保障というのはサービスということではなく、言語設計システムということがうまく構築できているのか、ズレがないか、理解ができているのか、文法がおかしくないか。

田村 意味は正しいのか、地方よっての言い方の違い。京都と東京では手話が違ったりすることがあります。同じ言葉でも、地方よっての表現の違いも踏まえて、研究分析というのから得られたものを教育現場に提供していくということが研究者の役割なのではないかと思います。

皆川 ありがとうございます。川上さんいかがでしょうか。

川上 2人のお話の補足ですが、これは個人の経験からお伝えします。情報保障がある環境とない環境、2つの環境を体験してきました。その中で感じたこととして、情報保障がない環境では十分に学びきれなかった、わからないまま授業が進んでしまうということもあります。アメリカに障害者法があり、環境が整えており、ギャロデット大学もそうでした。このような教育環境が整えていると、理解が深まり、学びを得ることができます。この情報保障によって、思考力や会話力があがり、自分を高めることができます。先ほどお話があったように、UDトークの誤変換の問題もそうです。情報保障は一見あるように見えますが、誤変換が生じると、その意味を改めて考えなければならない時間が発生します。誤変換が出てくるたびに「これはどういう意味だろうか」と考える必要が生じ、その結果、思考が滞ってしまいます。そのことを（社会）に知ってほしいと思います。例えば、手話通訳を準備した、文字情報を準備したからよしとするのではなく、それらの質が十分に担保されていれば、ろう・難聴者の（社会的）地位も上がっていきます。それをもっともっと社会に理解してもらう必要があると思っています。「情報保障」の言葉だけ見るのではなく、そのための環境を整えることが大切です。本当にろう難聴者といっても様々な方がいらっしゃいますさまざまな選択肢を広げ、自分に合った情報保障を選びながら、自分を高めていくことができる環境づくりが、今後の課題になっていくのではないかと思います。

太田 今はとにかく一方的に出す、というような状況になっていると思います。質というところまでは今まだ十分に考えて考えられていないというところで、現場でもどかしい思いをしております。質というところが大切になってくるので、見逃してはならないと思います。デフリンピックはいいきっかけになったのではないかなと思います。ここから現場として次のステップに進んでいけたらいいなと思っています。

川上 手話通訳についてもいろいろと広がってきています。手話通訳の仕事というのは情報を流すだけでいいのか、きちんと意味を掴んで伝えられているのか。文字も同様ですが、きちんとした技術が大切です。今まではとにかく通訳をつければよいという状況だったのですが、理解の受け方はそれぞれ違います。今後は質について、支援者だけではなく、当事者と共に考えていかなければならないと思っています。私たちろう者の経験をもとに一緒に解決できる場を、今後作っていかなければいけないということが課題になると思います。そのためには、まずはろう社会の中で集まれる場所を作ることが大切だと思っています。社会は少しずつ変わりつつありますが、どうやって学んでいくのか、どういう情報保障が必要なのか、今までの経験も踏まえて、十分に議論をなされた上で自分で選んでいく。そのためにも、ろう社会への情報提供も必要になってくると思います。手話通訳や要約筆記も同じですが、そのような情報を社会や聴者だけが知っているという状況ではなく、そうすると、ろう者の場合、情報が十分に得られず、判断に迷ってしまう方も多くいます。利用しなかったり、遠慮してしまったりするなど、誤った情報を持っている方もいらっしゃると思います。本当の意味での情報保障をというのは、ろう者の権利を守るため、ろうの社会にもきちんと教育の面など、情報を提供していく。その上で一緒に改善できたらいいなということを常々考えています。

太田 今の話に関連して、田村さんに質問です。アメリカではどのような取り組みをされているのでしょうか？現状を教えてくださいませんか？

田村 手話言語研究の中で、日本手話の文法についての研究を行っています。例えば誰かに電話をする。手話表現も様々な表現があります。例えば、男性が女性にメールをするといった場合でも、このように様々な表現方法があります。手話通訳の際にどの表現がわかりやすいのか。ろう者が見て情報を正しく等価に届けるためには、どの表現がいいのかと、というような考えのもとに研究を行っています。手話表現としては、どれも間違いではありません。情報保障をする場合、より多くの情報を届けた方がいいのか、わかりやすく情報を凝縮して届けた方がいいのか、手話の意味をつかんでよりわかりやすく伝えることができるのか、そのまま伝えた方がいいのか、言語学者としてはどちらでも問題ないのですが、通訳者が情報保障を提供する時に意識をしなければいけないところです。言語学者としては、持ち合わせているデータを提供する架け橋となる役割なのではないかなと思っています。

太田 現状日本の中では、まだそのあたりの研究、情報保障をする上で情報量の届け方のあたりについては、まだまだ研究がなされていない状況だと思います。研究の現場でも当事者が一緒になって活動していかなければならないのではと思います。質をどう担保していくのかということが課題になっているのではないかなと思っています。

田村 太田さんが先ほどおっしゃっていた情報保障について。音声で話された場合、ろう者は字幕を見て理解をしたり、または手話通訳を見らというろう難聴者もいます。2つの言語を選択するのは、我々ろう者です。対象者が見てわかりやすく、正しく心地よく受け取れるかどうか。そのために情報保障の質を高めていくということは大切だと思います。字幕の場合は感情までは読み取りきれません。手話通訳であれば、CLを使ったり表情を使ったりしてより細かな情報を届けることができます。例えば「山を自転車で登る」ときもどんな風に登ったのかというのは、表情一つで十分な情報を伝えることができます。ただ、それが文字になってしまうと、感情までは伝えきれません。あまり単語を増やしてしまうと、今度は読むのが大変になってしまって、どちらもプラスマイナス両面あるかと思うんですが、当事者がどちらがいいのかということも含めて一緒に相談をしながら解決をしていくという場所が大切だと思います。

太田 そうですね。文字通訳の限界というのがありますよね。大学の先生にもよくあることなんです、大切なところは強調して言う。でもそれは文字になってしまうと伝わらない。例えば試験に出やすいところは、声を強調して話しているらしいということ、聞こえる学生から聞きました。それは文字だけでは見えないんです。たまたま聴者の学生に聞いたとき。どうしてここがテストに出るってわかったと聞いたら、先生がいつもそこだけ強調して話してるって言うていたんですが、文字情報では伝えきれない。これをどうやって伝えていけばいいのか、これが漏れてしまうポイントで、文字だけでは表しきれない。手話ならば簡単に表されることも、できなくなってしまう。この文字情報の限界について、通訳者とろう者が一緒になって考えていくということが大切になってくると思います。これは大学だけの課題なのかもしれませんが。

川上 手話通訳も文字も同じだと思うのですが、支援する側の言語力も高めることが必要であり、これが基本的なことだと考えています。ろう者であっても、手話の基本は大切であり、支援する側と同様に重要だと考えています。日本語を聞いて意味をきちんとつかむためにも、手話をきちんと理解し、日本語でも正しく意味を捉えた上で、より合った表現に変換するためには、語彙を選ぶ力が必要だと思います。

そのため、単に情報を届けるだけでなく、通訳者の言語力も高めていかなければならないと考えています。私の家族は全員ろう者なので、手話は物心ついた頃からですが、今でもさまざまな手話表現を学ぶことが多くあります。また、いろいろな人と出会いながら学び続け、研鑽を重ねています。そうした積み重ねの中で、語彙選択につなげていくことが大切なのではないかと考えています。先ほど田村さんのお話の中で、手話表現を見て心地よく感じる。ということについて、心地よさときちんと理解できているのかというのはまた別の問題だと思うんですね。これは切り分けることが大切だと思います。意味をきちんと理解できると、次の行動につながるすることができます。心地よさだけではその場の満足だけで終わってしまう。そのあたりも支援する側にも考えていく必要があると思います。

川上 支援する側は、どちらかというと聴者が多く、ろう者の経験を体験したことがないので、どう対応したらよいか迷う方も多いと思います。その場合は、ただ伝えるだけでなく、どんなことが必要なのかを具体的に伝えて、それをもとに改善していくことが大切だと思います。

皆川 時間も迫ってまいりました。現状の様々な課題についていろいろお話ししていただきました。続いて今後の展望についてお願いいたします。

田村 情報保障の見方について、以前から思っているんですが、当然サービスというふうに使われていると思います。今後はそうではなくて、きちんと正しく配慮をしていくことだけではなく、学会や講演会など様々な場所で、情報保障がいつでもある。これが当たり前。というような考えになってほしいと思います。10年後の未来を見据えて、言語学者や通訳者とも協働しながらどんな環境を作っていけばいいのか、チームとして新しいデザインが構築できたらいいなと考えています。

皆川 お二人はいかがですか？

田村 手話言語条例などの法律がどんどんできてきていると思いますが、本当にそれで変化があるのでしょうか。今アメリカにいますので状況を把握しきれないんですけども。情報保障についてはどんな風になっているのか状況を教えていただけますか。

川上 この10年後を見据えてというご質問ですよね。2つあります。以前に比べると情報保障は確かに良くなってきています。昔は情報が十分でない中で暮らしてきた方もたくさんいらっしゃいます。取り入れられてきているので、10年後には、今より状況が良くなっているだろうことは簡単に想像できます。またろう者の学びの場や活動の場もさらに広がっていくと思います。でも大切なことは、ろう者がこれまでさまざまな活動してきた歴史があるということをぜひ忘れないでほしいということです。このような活動があったから、今があるのだと思います。ここからの10年後には、私たちの活動も何らかの形で貢献でき、状況が変わっていくのではないかと考えています。一人ひとりのろう者には、それぞれの人生があります。情報がなかったことで、壁にぶつかり、うまくいかない人もたくさんいたと思います。もし情報保障があれば、もっと可能性を發揮できた人たちが、たくさんいたはずです。そうしたことを踏まえて、10年後のろう社会のあり方や、情報保障につながる活動を続けていくことが大切だと感じます。

太田 10年後を考えると、もちろん今よりもっと良くなっていると思います。これが本当にいい意味で変わっていくのかどうかというのは、今の私たち次第なのかもしれません。先だつての東京オリンピックや、デフリンピックがあったことで、手話通訳がテレビにつく機会というのが格段に増えました。社会の中でも、手話通訳に対する認知、または通訳を目にする機会が増えてきました。これは大きな変化だと思います。今少しずつ変わり始めたばかりだと思いますが、ここでとどまることなく質をどんどん高めていく努力も続けなければいけないと思っております。そういう意味でも研究は大切になってきますし、質の担保、または教育現場での情報保障やニーズ、支援についてその必要性の違いというのは、研究の中では明らかにしていくことが大切なんじゃないかなと思います。聴覚障害と一重に言っても様々な方がいます。でも、権利を守るために、情報保障というのが大切になっていくと思います。

川上 今後は専門職として、これまで手話通訳や要約筆記というのはあまり専門職としては見られていない状況でした。少しずつ変わってきていますが、専門職としての保障をしっかりと整えていければと思います。その上で、ろう社会にも保障を作っていけると思います。私たちのように専門家が、10年先を見据えて、そうした環境を作っていくことも大切だと思います。田村さんがおっしゃったように、通訳があるのが当たり前というだけでなく、ろう者や誰かのためだけに情報保障をするのではなく、すべての人に開かれた形で情報保障が提供されることで、途中で聞こえなくなった人でも、この情報保障があれば助かる。

川上 誰にとっても当たり前に対応できる社会になればいいと思います。これを10年後に実現できたらと思います。そして、そんな環境が当たり前の暮らしになればいいと思います。

田村 もう一つ。一般企業で働くろう者たちも仕事上での会議などもあると思います。その場合もろう者のためにあるということではなくて、ろう者と一緒に相談をしながら問題解決をしていく。そのようなことが10年後の将来はできるような環境が構築できたらなと思います。

皆川 ありがとうございます。情報保障について改めて考えることができました。最後に何かありますか。

川上 川上です。日本財団でいろんな留学して学びをえて帰国して様々な場所で活動しているかたがいらっしやと思います。ろう者それぞれの専門性に特化した人たちが集まる場、今日このようにみんなが集って話せれば改めて自分をかえりみることもできましたので、このようないい機会、今後も増やしていただけたらなと思います。



## 座談会：ろう教育の現場～10年ほど前と今とで現場は大きく変わったのか

登壇者：武田太一（4期） 牧谷陽平（11期） 橋本重人（13期）

牧谷 今日はお集まりいただき、ありがとうございます。ろう教育について、内容は自己紹介、今やっていること、仕事など。そして留学のきっかけや理由、課題、ろう教育、ろう学校、ろうの共同体（コミュニティ）について思うこと。そしてろう教育に必要なこと、将来の展望などイメージして話していただければと思います。私は、司会を担当します。私がやるとは思っていませんが指名されてしぶしぶ引き受けました。牧谷と申します。手話ではこう表します。鳥と間違えられることがあります。アメリカに留学中、RITのクラスメイトなどに手を振って挨拶をしていたことから、このサインネームが付きました。11期生です。現在はろう学校で教えて7年目になります。次は武田さん。

武田 改めまして武田と申します。よろしくお願ひします。この留学奨学金事業の4期生です。2期と3期にも応募したのですが、落ちてしまいました。3度目の正直で応募し、選出されました。同期の2人は先に留学しており、私は1年遅れています。英語の勉強が不足しているのと、日本での大学院をまだ修了していないという事情で次の5期生の川俣さんと一緒に留学しました。オーロニ大学に入学し、英語とアメリカ手話を学びました。その後、ボストン大学に入学しました。入学のきっかけはろう教育について学びたかったからです。みんながギャロデット大学を選ぶ一方、私はギャロデット大学に応募し、落ちました。ギャロデット大学院は、学部でろう教育の専攻が必要だったことで落ちてしまいました。他の大学院を探している時に、日本の友人や先輩から「ボストン大学はどう？」と情報をいただきました。「ボストン？有名なところだし、無理だろう」と思っていたのですが、ろう教育修士課程があると分かったと出願し、合格しました。入学してみると、ろう教育修士課程は必修講義が多く、通常、修士課程は2年で修了しますが、ASLの講義も含めると2年半かかります。私はろう重複についても学びたいという思いがあったので、特別支援教育の講義も履修し、3年の在籍を経て修了しました。帰国して10年以上になります。帰国後は、留学前に働いていたところにアルバイトとして戻りました。今の制度で言う「児童発達支援」「放課後等デイサービス」の事業所で他の仕事も兼務しながら、子ども支援の現場で働いてきました。後々、児童発達支援管理責任者の資格を取るようと言われて取得すると、正職員となりさらに管理者になりました。子どもたちの支援はもちろん、保護者との面談なども担当しています。以前は名古屋で働いていました。愛知県にはろう学校が6校あり、それぞれに対応した事業所があります。名古屋、岡崎、豊橋にはありましたが、一宮はなかったため、設立することになりました。そこに私が着任することになり、4年が過ぎました。帰国してからの仕事は10年以上になります。

牧谷 ありがとうございます。次は橋本さんです。

橋本 13期生の橋本です。よろしくお願ひします。サインネーム、手話の名前はこう表します。日本にいる間、ろう学校教員として10年間働いていました。3校のろう学校を経験し、幼稚部、小学部、低学年を担当してきました。細かいところは後ほど話します。10年間ろう学校で勤務した後、アメリカに行きました。1年目はオーロニ大学で英語、アメリカ手話、ろう文化などの基礎を学び、その後ギャロデット大学でろう教育を専攻し、大学院で2年間学びました。その後、カリフォルニアで働いています。4年間、カリフォルニアろう学校フリーモント校で教えました。現在はリバーサイドに移り、2年目になります。今年度は小学部1年生を担当しています。子どもは6人で、学年全体では18人います。

牧谷 ありがとうございます。留学のきっかけや理由について話していきます。まず、例として僕から話します。大学卒業後、先生になりたいという夢がありました。教科は数学です。聾学校ではなく通常校に応募しましたが、教育委員会の面接で「聞こえないから聾学校へ行ってほしい」と言われました。赴任して数学を教える中で、手話が必要な子どもたちにとって、日本語が優先され、手話を学ぶことは重要ではない感じでした。また、他の先生との会話で「ろう学校は手話を学ぶ場所ではない」と言われ、その言葉に考え込んでしまいました。つまり、ろうの子どもたちにとって、手話を「学ぶ」とは何なのか。話していく中で、考え方の乖離があると感じました。たまたま友達から留学事業の話聞き、申し込んで合格し、留学したのが一つのきっかけです。もう一つは、留学前にろう協会で活動していたことです。手話、ろう者の存在、ろう者としての自分とは何かを知り、ろうの先輩たちの中に入り、ろう学校に関わる中で、「ろう者である自分は何者か」を考え始めたことがきっかけでした。それが、自分探しのきっかけにもなっています。以上です。次、武田さんをお願いします。

武田 もともと海外で学びたい気持ちがありました。大学に入ってから、先輩に誘われ、ろう重複の現場でボランティアとして支援に行きました。ろう重複の子どもたちは、ろう学校に通い、放課後にその場へ来ていましたが、学習の遅れや、コミュニケーションへのストレスから、怒りを表すことがありました。「なぜだろう」と思いました。ろう学校といえば、手話で丁寧にコミュニケーションをしているイメージでしたが、実際は違いました。特に重複学級では、手話ができない先生に担当をさせる体制に違和感を覚えました。ろう重複の子どもにも、学ぶ権利、経験する権利があるのに、それが十分に行われていない。「なぜだろう」と思いました。日本では期待できないと感じ、海外、特にアメリカではどうなのかと思ったのがきっかけです。留学事業の対象国はアメリカだったこともあり、ろう教育や重複支援は進んでいるだろうと考えました。

橋本 留学のきっかけですが、聾学校で教師をしていた頃、一般学級と重複学級がありました。一般学級は、ろうの子どもたちが学ぶクラスです。ろう重複は、他の障害も併せ持つ子どもたちです。私は一般学級を担当してきました。その中で、発達障害や軽度・中度の子どもたちが来ることがあり、指導に行き詰まりました。他の先生に方法を聞くと、「いいんだよ、見てるだけでいい」「その場に座っていればいい」と言われました。本当はできる可能性を持っているのに、それをつなげたい。でも、どうしたらいいのかわからない日々でした。また、東京で過ごしている間アメリカ手話を学びました。JASS（日本ASL協会）で、先生はアメリカ人でした。話しているうちに、手話は楽しい、もっと学びたいと思うようになりました。ギャロデット大学のサマークラスに行きたいと思い、外国人として登録し、留学しました。アメリカ手話のクラスで交流する中で、ギャロデット大学のろう学校生と出会う機会がありました。食事のとき、ある人が手話で「待って」と言い、薬を飲みました。理由を聞くと「ADHDだから薬が必要」と言いました。別の人も「私は固形状の薬ではないけれど、液状の薬を服薬しているんだよ。」と話していて、とてもオープンでした。自分を隠すことなく、きちんとさらけ出している光景に驚きました。発達障害は恥ずかしいことではなく、先生や親の支援があり、彼らの自己肯定感が高いと気づきました。その様子を見て、「アメリカはすごい」と思いました。どうしたらそうなれるのか、学びたいと思いました。聾学校での行き詰まり感と、アメリカでの前向きな雰囲気。この二つが留学のきっかけです。

牧谷 その話を踏まえて、聾教育に必要なことについてお聞きします。留学中に、課題への答えや解決の糸口が見つかったかどうか、少しでも「これだ」と思えたものがあつたかどうかを教えてください。課題があるのでアメリカで学びたい、持って帰りたいと思っていたことは学べたのか、現状の解決に向けた答えが見つかったのか、糸口が見つかったのかをお聞きしたいです。今思えば、私はろう教育専攻でしたが、言語学というかコミュニケーションに近いものを意識して学習する感じでした。以前ろう学校は「手話を学ぶ場ではない」と言われました。でも日本人は一般の学校で、日本語を学ぶのに、ろう学校は「手話を学ぶ場ではない」というように、言語の面で意識した部分はありました。ろう者としてアイデンティティを取り戻したい、と思いい、とにかく留学しようと決めました。面接の時「希望の留学先はどこですか？」と聞かれ、「ありません」と言いました。そのくらい漠然としていました。

牧谷 手さぐり状態でした。実際に留学し、アメリカのRITの大学院の履修科目の中に手話言語学の授業があり、手話と英語の2つについての言語学の授業がありました。その授業の中で「これだ!」と思うものがたくさんありました。正直言うとそれ以外の教科は興味が無かったんです。というよりも後からついてくると感じました。基本の基本であるろう教育をつきつめて考えるとろう者とは何か、デフ・スタディ（ろう者学）に近い感じかもしれませんが、日本に持ち帰ってきて、問題は日本のろう教育では（この学問が）知られていないためにどうすればよいのかということで、少しずつ進めている状態です。

橋本 日本にいる間、ろう教育の現場にいたという強みはありました。留学先の大学では、英語は第1言語ではないために、かなり苦しかったです。大学では（テキストの）講読が多く、机上での学びでは吸収しきれなかったかというところではありませんでした。むしろ授業より現地での経験から学び、吸収するタイプです。答えが見つかったといえば、アメリカと日本の教育システムが違います。日本の場合、特別支援学校の教員採用試験を受験し、ろう学校希望と伝えても、盲学校、知的障害の学校などがあり、自分の専攻してきたものと違う学校に赴任されることもあります。アメリカの場合は、ろう学校希望し、面接・筆記の試験が行われます。学校によるかもしれませんが、カリフォルニア州立ろう学校の場合はそうです。日本のシステムは、教員免許を取得した上で教員採用試験を受ける。ろう教育の場合は認定講習を受ける。カリフォルニア州の場合は、教員免許はなくてもいいんです。採用されてから3年間学んで取得すればいい。このシステムは日本と異なっていました。次に、スタッフの違いについてです。日本の場合は、1つの学級に先生が1名。もし、1人の生徒が問題行動をおこした時でも、先生はその生徒だけでなく他の生徒全員を見なければなりません。アメリカの場合は、スタッフそれぞれに役割があります。1人の生徒が問題行動をおこした時も、担任ではなく、カウンセラー、行動に関する専門家(スペシャリスト)などそれぞれに対応ができる役割分担があります。日本は全て1人の先生が担っています。このような違いがあります。留学前に3つの答えを探そうと決めていました。ろう発達障害についてです。1つめ、親はどのようにして子どもの発達障害を受け入れるのか、つまり障害受容です。2つめ、教員のみなさんがどのようにトレーニングをしているか。発達障害といっても、ADHDや学習障害、自閉スペクトラム症など先生はわからないわけです。その障害についての支援方法、特性についての学びのトレーニングについてです。3つめ、教員の子どもと関わる時の態度・気持ちなどです。この3つの答えを求めて留学をしました。留学はしましたが、この3つの答えはまだ模索中です。でもだいたいつかめたかなといった感じです。1つ目の親の支援ですが、やはり先生1人ではなくチームで関わるのが大切。親が苦しんでいる時に、それぞれのスタッフに関わり、「情報があるよ」や、親の気持ちに共感し会話をします。気持ちに寄りそうということが大事ということがわかりました。

2つ目は教員のトレーニングについてです。先生って日本と同じで忙しいです。カリキュラムや授業の準備など多忙です。トレーニングという時間はほとんどがオンラインでした。オンラインだと教材が英語で書かれているので、学ぶ意欲をなくす先生が出てきます。これでは厳しいなあと思いました。でも先生の中には、実際に自閉症を持つ親の立場から来てもらって話を聞くという機会も時々ありました。長くなりましたが、トレーニングがあるときもあり、ないときもあったという状況でした。3つ目、教員の態度、子どもが「できる」という自信を持つという気持ちは大事です。日本でも同じだと思います。モチベーションを保ちながら教え続けることが大事だと思います。

牧谷 ありがとうございます。武田さんお願いします。

武田 ほとんど橋本さんがおっしゃった内容と同じなのですがアメリカに留学して感じたことは、教育システムの違いです。日本の場合は特別支援学校など関係なく、異動があり、教育の専門性が薄いという課題があります。また特別支援教育という制度が変わってから、ろう・盲・身体障害の3障害が一本化されたため、どうなんだろうと思います。アメリカは、ろう学校で働きたい時はまず大学院修了が必要。教員全員が院の修了生です。教員免許は取得しなくても従事出来ることが多いです。マサチューセッツ州にいたのですが、教員免許がない場合はろう学校に勤め始めて3年か5年以内に取得する必要があります。

武田 それぐらい、柔軟なシステムだと思いました。とにかく最低限、大学院の修了が必要だったのです。院での勉強では、他のろう教育専攻はわかりませんがボストン大学の場合は、ろう教育の科目にASL1~6の履修が必要でした。また、ろう児の為の言語学の基礎、言語の発達・習得、アメリカ手話文学などもありました。アメリカ手話やろうの子ども達の心理などを学んだ上で現場に入り、ろう児に適した教育支援をしているわけです。日本はどう見ても教員に専門性がありません。「手話がわからない」「ろうって何?」という状態で着任するので聴覚障害児への指導がわからず、生徒が教員に手話を教えるケースも生じるわけです。そのような状況が今も続いています。基本的に教育体制の問題があります。アメリカの場合は、教員がたくさんいます。例えば先生と生徒が合わないと感じたら、方法を変えたり、先生やクラスを変えたりと工夫ができます。日本の場合、担任の先生が合わなくても1年間はずっと変わりません。生徒としても苦しいし親としてもどうしてよいものかとなってしまいます。いわゆる「先生ガチャ」ですね。誰が担任になるのかわからない怖さがある上に、先生たちもそのように言われて「ろう学校になんて、どうして来てしまったのか」という気持ちもあるかもしれません。それでも異動システム自体は変わらない。おかしいですよ。私が手出しする問題ではないので、なんとかしていただけたらと思います。アメリカでのいい面は、ろう重複支援のカリキュラムです。マサチューセッツ州では、通常の教科書を使用し、レベルに応じて使い分けています。最後にテストを受けて成績が決まりますが、ろう重複の子どもはテストを受けること自体が難しいため、ポートフォリオという方法があります。日本の方法に置き換えるとプリント課題になり、どの割合で達成できたかで成績を決めます。例えば「今、気温5度です。これは暑いか寒いかのどちらでしょうか」という問いに「暑い」と書くのか「寒い」と書くのか、または「暑い」と「寒い」のカードのどちらかを出すのかというように、文字が書ける子どもは書く、書けない場合は紙を切って貼るように生徒一人一人の能力に合わせたプリントに変えていくという方法です。テーマは同じですが答える方法を子どもに合わせて行うことで、一人ひとりの達成度が測れるようにしています。このような柔軟性があるわけです。日本の教育現場は私は詳しくはご存知ないのですが、大きく2つに分かれると思います。単一障害児向け、重複障害児向けのカリキュラムです。単一障害の場合は地域の小学校と同じようにドリルをこなすなどの学習をしますが、重複障害の場合はありません。でもその子どもたちの中に能力がグレーゾーンの子どもがいます。ドリルがこなせるレベルにも関わらず、カリキュラムにはないのでドリルは出さないのです。親としては複雑ですよ。極端に二分化されているのですが、双方ともグレーにあたる児童はいますよね。アメリカのように一人ひとりにあった教育支援が必要になるはずですよ。橋本さんもおっしゃっていましたがチームで支援することは良いことです。アメリカも担任がいてアシスタントがいます。その他にST・OT・PT・カウンセリング、日本語で何というかわかりませんが、behavior specialist、行動支援専門の人がいます。ろう重複の中には行動に問題のある子どももいます。その時はABA分析して、どのような支援が適切かを考える専門の人がいるわけです。例えば教室で怒って机をバンバン叩くような行動をする。これは迷惑になるので、このような行動を減らすためにはどうすれば良いか相談します。「机を叩くのはなぜか?」、机を叩く行為の理由になるものなどを分析します。その結果から、教室環境や対応を変えるなどの提案するという専門の方です。このような専門職が日本にはありません。そのため先生が自ら対応することになります。授業を進めるためだけでなく、授業中に起こりうるトラブルなどいろいろ考えながら教育支援をする必要があります。しかし、それができない先生が多いため、トラブルが起こってしまうわけです。しかたない面ではあると思いますが、あくまでも個人的な考えですが、アメリカにいたときに実習を受けたおかげでメンタル面は鍛えられた感じがします。特にろう重複の児童の中にはかなり大変な子がいました。授業中にハサミを投げたり、先生の髪の毛を掴むなどありました。その時にも毅然とした態度で教える力が必要です。怖がったり、無理だと言ったり、お手上げになるという先生には、何の為に先生になったのかと疑問を持ちます。私はこのような児童たちにもきちんと教育支援する経験を重ねてきたので信頼関係が築けてきました。私とはちゃんと話を聞くことができたり、課題もできたりします。他の先生ではできていません。こういった信頼関係の作り方もアメリカにいたおかげで身についたとも思っています。帰国した後も同様に、子どもたちとの関わりで、彼らは私を見てくれています。しかし悪い面でいうと、私がいる間はおとなしく過ごすことができるが、私が不在の時は好き勝手しているそうなので、私がいなくても落ち着いてくれる方法を考えているところです。以上です。

牧谷 ありがとうございます。私も2年前ろう教育の担当だった時、知的障害の重複の児童がいました。気持ちを強く持って関わり支援しました。チームでの支援はできなかったので、もう1人の先生と交代で関わりました。家庭環境や問題の背景などよく話をしました。重複だけではなく、ろうの子どもにも自分はダメなんだと劣等感を持つ子どもがいるので、対応は同じだと思います。

橋本 今担当している子どもは文化が違います。人種が違うためそれぞれの家庭でしつけも違います。生活スタイルも違います。信仰している宗教がある、ないもそうです。今、冬休みですが、日本ではクリスマスだけです。でも、こちらはクリスマスだけではなく他にも教える必要があります。例えばJewishユダヤ人の宗教のことや、黒人が祝う行事の綴りはKwanzaa（クワンザ）だったかな？ わからないけれど黒人のコミュニティがお祝いすることや、インドの文化も含まれますよね。Diwali（ディワリ）という、日本語がわかりませんが、こういったものが含まれるため、日本は「メリークリスマス」と言いますが、こちらでは「メリークリスマス」とは言いません。その代わりに「Happy Holidays（ハッピーホリデー）」というキャッチフレーズを使っていることが多いかと思います。

牧谷 Happy Holidays（ハッピーホリデー）ですか？

橋本 そうです。Happy Holidays（ハッピーホリデー）です。いろんな文化があり、1つだけではないのでホリデーと言うため、なるほどなと思いました。先ほど話されていたように、一般学級と重複学級があり、その両方とも、家庭でのつながりや親とのコミュニケーション、虐待、ネグレクト、言語はく奪があり、つまり家族が音声で話すなか取り残され、わからないまま育つ子どもたちがいるなど、本当に多様な状況があります。

牧谷 最後のテーマにいきます。これからにむけて、目標といいますかさきほど話してくれたまとめは後ですね。

橋本 これからに向けて、私が思いつくのは二つあります。1つ目は、大学で1つはジェネラリストとスペシャリストの2つがあるという概念を学びます。もう1つは大学の教員養成カリキュラムに、手話だけではなく、いろいろな指導方法、障害などが含まれており、それを学ぶことです。

牧谷 思い出しました。一昨年2月に久しぶりに知り合いと会いました。支援学校にうかがった時に名刺交換をしていた人です。その友人からメールがあり、知っている人が香川大学の先生で、防災士もあって、私に講演をしてほしいとのことでした。どんな内容でと聞くと「手話を勉強したい」と。「手話を勉強したい」という気持ちはわかるけど、もし災害がおこった時に、避難場所で手話があればそれで完璧だといえるのか、と思いました。手話だけを教えるのか、地震がおこった時に必要な手話のみを教えるのか。そもそも聞こえないことを手話でまとめるのではなくて、聞こえないことで困り事は何があるのかを話したうえで、手話もあるということをお話したのですが、防災士の方はあまり納得していない感じでした。

橋本 手話があればそれで全部解決するだろう、という思いこみがあります。そのような危惧はありますね。

牧谷 そうですね。手話があればOKだと思われてしまうと困ります。基本的に聞こえないことは何かということを知っていただかないと、何も変わらないと思います。社会全体で考えることです。そのことが難しいのかと感じます。そのことを行動に移すことができるろう者が増えることが必要だと言われますが、それはなかなか難しいですね。アメリカに留学した時、いろいろな人種がいっぱいいます。黒人差別もありました。また、リバーサイドの学校では保護者に案内を配布する時、英語、裏面にはスペイン語で書いてありました。環境の違いですね。

橋本 実際にいろんな要素が含まれています。一つにまとめるのは難しいですね。教育もそうだと思います。

牧谷 今後の事として、「答えを決めないこと」だと思います。これだと決めてしまうと、その事にこだわってしまう。いろんな答えがある。その方法をいくつか持っておくのもいいかと思います。決めつけはいけないと思います。

橋本 答えを求めるのではなく答えを探す気持ちです。どうしてという好奇心を持つことが大事かと思いません。

牧谷 そうですね。

橋本 これだと決めつけないことです。例えば、ここに3人いますが違いますよね。同じろう者ですが仕事、性格、教える方法も違うでしょう。手話だけでなく、書くこと、話すこと、キュードスピーチなども違います。

武田 私がアメリカから帰国したのが2013年で、今は2025年ですので、この12年の間に様々な経験をしてきました。今の職場に復帰して、ろう重複の子どもたちの支援をしています。デイサービスといえば子どもたちを預かって見守りすることが基本であり、学習支援はしていません。しかし、宿題など学習に問題を抱えているため、分かりやすいプリントを提供したりしています。また保護者と相談して、教科書を手話に翻訳したりするなど、アメリカで学んだことを活かしています。また私の同期の川上さんがろう通訳の養成を行なっているところに参加したり、ナヴォアさんもカウンセリングが専門なのでその話を聞いたりするなどもしてきました。これまでの経験を買われて、今厚生労働省の研究チームに入っています。ろうの赤ちゃんが産まれると聾学校で教育相談を受けることができますが、保護者に対する支援がまだ弱いです。保護者支援をどう進めていくか、この研究チームに途中から加わりました。この研究の一環で私がいたボストン大学の教員を招いて講演を開催したり、山田茉侑さんの協力ももらってテキサス聾学校に行き、デフメンターの取り組みについても視察してきました。来年3月にデフメンターの研修会を開催し、ロールプレイ実技など指導する予定です。今までに培ってきた経験を何かに還元するというをしているわけです。10年後の展望については、例えば聾学校で考えると、教科書の手話翻訳については手話研修センターが以前手話翻訳していますが、これは古くなっています。あれから教科書改訂が何度があるはずなので、手話翻訳も新しくなっているかどうかですよ。聾学校で作っているプリントに手話のイラストを載せたりしていると思いますが、これも昔作ったものを使い回していますよね。今では新しい言葉や手話が出ていますので昔のものは使いにくいはずですよ。これに対してプロジェクトチームを立ち上げて、手話翻訳や手話イラストなど新しく教材を作って聾学校に提供できたらと思います。また、ロールモデルも必要です。アメリカではろうの先生やアシスタントがたくさんいますが、日本では少ないですよ。ろうの先生が多い聾学校もありますが、愛知の場合は各校に1、2名と少数しかいません。また、ろうの先生が担任になってくれるかどうか。もしかしたらろうの先生に一度も担任になってもらうことなく卒業していくこともあります。ですので、ロールモデルを増やすにはろうの先生を増やしたい。そのためには、教員養成課程での勉強や、学校に雇用後の環境づくりなど課題があります。これらを少しずつ変えていく必要があるのではないかと思います。私たちが中心になって進めるか、誰かが立ち上げたものに私たちがサポートに回るか、あらゆる方法が考えられます。この10年間でゆっくり、いやゆっくりしていたらダメだと思いますが考えていきたいです。

橋本 最近おどろいたのは、プリントに写真や手話イラストをつける時にAIを使えばすぐにできることです。例えば視覚的な教材などは手間が省けるという意味で、AIの活用は必要なスキルだと思います。これからの10年間に教員にとって必要なスキルの一つになるかだと思います。「マジックスクール」というwebサイトがあります。このサイトに、文章を入れ込んでAIに「幼稚園児に向けた文章に変換して」と言うと、それに合わせた文章に変換してくれます。AIはすごいと思います。AIはダメだ、やらないと思わず、上手く活用し、教材に取り入れていくことで、子どもの理解が深まることが考えられます。

牧谷 橋本さんのおっしゃるように、アメリカでは学校の中に専門家が何人もいる状況ですね。自分たちも専門家として10年後に何かを始めるのがいいかと考えます。留学し帰国しましたが、ぶっちゃけて言うと、同窓会で会社を立ち上げてもいいぐらいだと思っています、本当にね(笑)。それぐらい、日本財団はこれまでにこの事業で奨学生に、合計一億、二億円の助成をしてきて、それだけあれば会社を作れるぐらいのお金なわけでしょう。1億だよ、1億ぐらい。

武田 (考えて) 億レベルだね。言われてみれば確かに億レベルだと思う。

牧谷 計算すると僕の場合で1400万円支援してもらっているんです。生活費を含めて全部で1400万から1500万円ぐらい、それが20名となると2億、3億でしょう。考えたら会社ができるレベルなのに設立してないからもったいないと思っています。そう考えたら会社を作ったら何かできるはずと思ったわけです。

武田 誰が代表になりますか？

橋本 確かにアメリカに留学した人たちは、みんな素晴らしいと思います。日本に帰って来てもその力を発揮する場所がなかなかないので大変ですね。

牧谷 今、20年になるので、これをきっかけに僕たちに何かプロジェクトを起こしてもいいのかと考えます。

武田 とにかく2月15日に一回集まるから、話すなかで何か生まれるかも。

牧谷 オッケー！ 座談会を終了いたします。

武田・橋本 お疲れさまでした。



## 座談会：乳幼児支援の現場における課題とこれから

登壇者：高山亨太（2期）福永梢（4期）  
山田茉侑（13期）鈴木美彩（18期）

福永 こんにちは。本座談会のテーマは「早期教育」です。こちらの4名は、アメリカや日本において、早期教育について学び、また現場での経験を積まれています。早期教育についての現状と課題、そして今後の展望についてお話しさせていただきたいと思います。まず、私は司会を務めます、福永梢と申します。よろしくお願いいたします。日本財団聴覚障害者海外奨学金事業の4期生として、アメリカに留学をし、スクールカウンセリングを専攻しました。帰国後は山口県の特別支援学校の小学部の教員をしております。早期教育について地方の厳しい現状を見てまいりました。本日さまざまなお話をうかがい、勉強をしたいと思っております。よろしくお願いいたします。他の皆さんもそれぞれ自己紹介をお願いいたします。

高山 では私から。私は第2期生としてギャロデット大学に留学しました。高山亨太と申します。よろしくお願いいたします。今は帰国してはいますが、仕事としてはギャロデット大学に在籍し、ろう学校の支援活動などをしています。皆様とお話できるのを楽しんでいます。よろしくお願いいたします。

山田 では次にわたしから。第13期生山田茉侑と申します。よろしくお願いいたします。私は親への支援、また乳幼児期の教育相談に関する内容を学ぶためアメリカに留学しました。本日はよろしくお願いいたします。

鈴木 18期生の鈴木美彩です。よろしくお願いいたします。私は言語学を学んでいます。以前から手話という言葉に関心があり、手話とはなにか、手話の規則や文法について学びたいと思い留学をいたしました。その後現在は、インターンをしており、バージニア州の高校でアメリカ手話を教えています。よろしくお願いいたします。

福永 よろしくお願いいたします。自己紹介をありがとうございました。今回の登壇者の情報がわかったと思います。それぞれ専門分野が少しずつ異なりますが、それぞれの立場から早期教育についてお話をうかがいたいと思います。

それでは、皆様に伺います。それぞれの専門分野を学ぼうと思われたきっかけはなんですか。こちらをうかがいたいと思います。よろしいですか。お願いします。

高山 私は実は専門は精神保健分野なんです。ですが、留学前に早期教育に関わる部分では、親の会の支援活動にボランティアですが参加していたことがあります。人工内耳の親の会ですとか、手話で育てる親の会などに関わっていました。そこで親への支援が大切なんだと気付かされました。ただ、留学先で勉強した内容は早期教育や親への支援ではないのですが、教育（授業）の中には早期教育がテーマとして入っていました。その後、帰国して6年ほど日本にいた間にスクールカウンセラーとして東京を中心に各学校へうかがったり、ろう学校でおこなっている乳幼児相談で親と関わるが多かったです。やはり親は心配なんですよね。そういう方のお話を伺ったり、アドバイスなどをしたり、できるだけサポートをしていました。親としては、子どものための効果的な方法や情報、良いろう者の例につなぐことなどをしていました。やはりそのようなことは大切だと思いました。

山田 私の専門は、ろう教育、早期教育です。留学のきっかけは、これまでさまざまなろう学校へ訪問する機会がありました。その時ろう児や難聴児からよく言われていたのは、「親と話が通じない」「コミュニケーションがうまく行かない」「気持ちが伝わらない」ということでした。また家族は聴者ばかりで、音声だけで話すので話の輪に入れず辛いという状況も多く見てきました。そのような子どもたちにどのような支援を届ければ良いのかたいへん悩んでおりました。そのような中で米国へ渡り、親への支援が非常に大切だと感じました。我が子にろう・難聴があると診断された両親が得るろうや難聴に関する情報の質はバラバラで、統一されていません。そのため親は我が子とどうやってコミュニケーションを取ったら良いのかわからないまま子育てをするというのが現状です。そのような状況を変えたいと思いました。アメリカはシステム化された親への支援があると聞き、それをぜひ学びたいと思いアメリカへの留学を決意しました。現在は、テキサスろう学校乳幼児相談の教員をしています。また、もう一つデフメンターとしての仕事もしています。このデフメンターは日本にはない新しいもので、業務内容は（ろう・難聴児のいる）家庭へ訪問し、アメリカ手話の指導や、乳幼児期のろう・難聴児に合ったコミュニケーション方法などを指導したりしています。また、ろう文化についての指導などもしています。

鈴木 先ほども少しお話しましたが、私は言語学を学ぶためにアメリカのギャロデット大学の大学院に進学しました。2022年から留学し、2年間（大学院で）学びました。きっかけは、もともと幼いときから手話に興味を持っていて、手話ってなんだろうと考えていたときに、手話にも文法があると本で読みました。これまで深く考えずに普段使っていた手話に、文法があるんだとその時知りました。ろう学校では日本語である国語を勉強し規則や文法を学びますが、手話にはそれがないんです。もっと知りたいと思ったのがきっかけとなり言語学などを勉強しています。大学生の時に、自分の興味のある講演などに参加をしたのもきっかけとなりました。私は日本社会事業大学におり、幸いなことに手話で授業が受けられる、教養大学というのがあり、そこで多くの先輩たち、実際にギャロデット大学に留学されたかたもいました。今登壇している高山さんもうらっしゃいました。他にもろう通訳をされている川上さんなどからも教わりました。その中でやはり言語学とは、手話とはということをもっと掘り下げたいと思いアメリカ留学を決意しました。これまで2年学んできて、日本でもアルバイトは経験しましたが、その中で0才から3才までの子どもの世話をするという仕事がありました。やはり親に対して手話の指導をする際にどうやって指導するか考えたり、また子どもの言語獲得の過程を見た経験もありましたが、改めて留学して言語学を学び、やはり研究者や研究対象等によって考え方や視点が異なり、それらのついでの情報もかなり多岐にわたるものがあると知りました。つまり、一つの面だけを見て、これだと結論を出すのではないということです。なので、更に深く学びたいと思っていたところ手話教授法という授業があると知り、留学を1年延長して勉強をすることにしました。ですから、学期間としては合計で3年となりました。その後、ギャロデット大学内の日本手話の授業で指導をしました。これまでは日本人の聴者に手話の指導をすることがほとんどでしたが、こちらではアメリカ手話をすでに習得した方への日本手話指導や異文化教育などをしましたが、これまでの指導方法とは全く異なるので方法を考えながら指導をしました。現在はバージニア州の一般高校の生徒にアメリカ手話を指導しています。当初、私がアメリカ手話を教えることについて自分のやりたいことに繋がらないのではと考えていましたが、実際に指導をしてみるととても視野が広がった感じがしました。というのも、私は日本人として第二言語を指導しているときと、第一言語を指導しているときの違いや困難さがわかったからです。第一言語を大切にしたいという気持ちはもちろんありますが、第二言語だから別の見方から指導ができるのです。このような感じで現在勉強をしています。よろしくをお願いします。

福永 ありがとうございます。私がアメリカ留学で、スクールカウンセリングを選んだきっかけは、私のまわりのろう者の友人たちはインテグレーションをしてる人が多くいました。同級生にも多くいました。なので、久しぶりに会ったときに経験談を聞いたり、以前のろう学校の担任の先生から相談を受けることができました。その時に気持的に壁にぶつかってしまうことが多いことや親との関係性に困難を感じているということを知りました。そこで、（そのような人たちに）支援をしたいと思いました。

福永 スクールカウンセリングは日本国内でも勉強できますが、一つの大学の中で専門の先生が一人だけで、さらに学生も少ない状況でした。なので、アメリカのギャロデット大学で、ろう者の専門の先生がたくさんいる、また専攻する学生も多く議論をすることができる場所で学びたいと思い決意しました。今は山口県の特別支援学校の小学部の教員をしています。ただ山口県が珍しく、全国でもここ1校だけなのは、5障害の子どもたちをこの学校で一手に引き受けられるようになったということです。だから、ろう児専門の教員ということはできず、聴者で他障害のある子どもも担当しました。地方の現状もあります。

先ほどデフメンター制度というお話を山田さんがされていましたが、非常にこのデフメンター制度に興味があります。詳しく聞いてもいいですか。

山田 デフメンターは、まずろう・難聴者で、アメリカ手話（の表出）がわかりやすく、堪能であること、3日間のトレーニングを修了した人がこのデフメンターになることができます。デフメンターの支援対象者は、0才から5才までのろう・難聴児を持つ家族です。支援方法は2つあって、その家庭を訪問するものとオンラインで実施するものです。支援の内容は、カリキュラムがあって、かなり分厚い内容のもので、アメリカ手話について。これは単語や文法、顔の動き（NM表現）やYes/No疑問文など細かく指導します。また早期視覚的コミュニケーション、つまりこれは子どもに合った手話表現、大人同士での会話で使われる手話の方法ではなく子どもに合った手話表現をどのようにするのか、顔の動きをはっきりしたり、手や体の動きを大きくしたりなどそのような内容です。最後がろう文化についての指導です。例えばろう者の偉人や会話をする際にはアイコンタクトを取ること、照明を点滅させて注目を集めるというような文化面についても指導をします。親とのコミュニケーションは基本的に手話で行います。その際、手話通訳はつけません。デフメンターと親が直接コミュニケーションを取ります。なぜかという、（手話通訳がいると）親が音声を頼りにしてしまうからです。やはり手話を見る、読み取る力をつけるためだからです。

福永 先日研修を受けました。福岡の久留米ろう学校で、早期教育の乳幼児相談の中でろうの子どもと親に手話を使って会話をして、日本語につなげていくという様子を撮影したものを、（子どもの）年齢に合わせて撮影されたものを見るというものでした。その時に、ロールモデルの提示などを、ろうの子どもたちに合わせて行う方法を見ました。聴者の両親に役立つ内容だと聞いていました。

鈴木 質問です。その動画は親たちがインターネットなどでどこからでも見られるように公開されていますか。またはその学校に通っている子どものいる親たちだけが見られるのでしょうか。

福永 おそらく学内だけだと思います。学校の中で定期的に親を集める機会を作って、その時に親子の実際の会話の様子を先生、ろうや聴者の先生が動画を見てアドバイスするんです。絵本を読み聞かせしたりなど、いろいろな活動の中で、研修の一部として、コミュニケーションや手話の表現方法や視線の合わせ方や視線が大事であることなども話していました。その例として実際に撮影した動画を提示して、百聞は一見にしかずといった感じで、すぐに理解できてそれに対していろんな意見も出されていました。東京ではどうなのでしょう。関東ではいかがですか。

高山 今、東京というか地方も含めて、ろう学校で乳幼児相談やコンサルなどは行われています。思うことはいくつかありますが、皆さんにコメントをいただきたいのですが、親の支援や乳幼児への支援が、週に1回1時間だけというところが多いですね。毎日受けることはできませんよね。また学校に来る必要がありますよね。先ほど山田さんがおっしゃったデフメンターは家庭を訪問して実施するんですね。（日本では）そうではなくて、学校に通わなければ受けられない。そのため、家庭の中での（親子の）自然な会話を見ることができません。

鈴木 状況がわからないですね。

高山 そうなんです。自然な環境で親子の会話を見て、分析して相談しながら適切な支援をするということができません。またろう学校でいつも思うのは、ろうの先生、実際にろう者の教員の採用は増えてはいますが、中等部や高等部の教員が多い印象です。早期教育に関わるろうの教員はそれほど多くはないと思います。また専門知識のある先生も少ないですね。そのあたりは頑張らないといけないなと思いました。なので、デフメンターはとてもいいなと思いました。制度としてきちんとシステムを作っていくのが大切だと思いました。

鈴木 また、ろう本人、先ほど福永さんがお話されたと思いますが、ろう本人も苦しさや困難さからくるモヤモヤの原因を、他の知っているろう者に話すまで自覚できていないという面があるので、先ほど山田さんが話していた、ろう文化とはなにか、例えば目を合わせるのが基本だとか、そのようなことが当たり前過ぎて、自覚できていない。だから、他の人に説明ができないということがたくさんあると思います。私自身も手話を指導する仕事についておかげで、さまざまな気づきを得て、それをきっかけに勉強をしてきた感じがあるので、これらをどうして行くのかを今後ろう者同士で情報共有したり、お互いに教え合ったりして気づくことができれば、聴者に説明ができるとそういうことも必要だと思いました。私自身の課題は教材づくりです。手話を指導するときに、アメリカではオンラインを希望する人が増えてきています。日本でもオンラインの手話教室が増えつつありますよね。

高山 増えたね。

鈴木 そうですよね。その時にZoomだけで指導するのではなく、カリキュラムというか、オンデマンド型、つまり動画を見て自分で学習してクイズに答えたりするようなそういうものが実際にあって、この方法ならろう者も勉強ができる。手話で話されているので、文章を読んで勉強するより視覚的な情報なので、共感しやすいしわかりやすいですね。乳幼児の場合も子どもに適したものの、大人に指導する場合との違いなどの情報が含まれる教材作成のリソースがもっとたくさん増やせると良いと思っています。

高山 そうですね。逆に福永さん、山口県という地方にいらっしゃいますが、状況はどうですか。うかがいたいです。

福永 早期教育についてですか。

高山 そうですね。東京の状況はわかりました、こんどは地方の状況に興味があります。

福永 山口県の場合ちょっと特別かもしれませんが。国内でも一つだけという状況です。ろう学校という形を廃止して、肢体不自由や知的障害、視覚障害者など5障害をすべて受け入れている状況になりました。なので、早期教育は一応幼稚部はありますが、(生徒の)数が減りました。今は子どもの数が減っているので、つまり配置できる先生の人数も減っています。そうなるとどの障害にも対応できる先生となり、やはりろう者よりも聴者の先生が配置される。電話対応をすることも多いので、日本語もできて電話もできて、さらに聴者の親に対応することができるようになるやはりそうなる。なので、聴者の先生が優勢という状況です。医療機関とのパイプも弱いのでそのあたりも今後の課題かなと思っています。テキサスのデフメンター制度の場合、医療機関とのつながりはありますか。

山田 どちらかという医療よりも早期介入グループというのがあります。日本にはないと思うのですが、早期介入グループというのがあって、将来の発達に懸念のある子ども、たとえばろう児や盲児、肢体障害等のある子どもたちが、将来の発達に遅れがでるおそれがあるような場合、その子どもの家族に対して早期介入グループが専門家とつなぐということを行います。例えば、言語聴覚士やろう学校の先生、作業療法士(OT)やPT(理学療法士)らを家族につなげるというグループがあります。基本的に支援に関する情報を家族に伝えるのはこの早期介入の担当者になります。

鈴木 担当者がいるんですね。

高山 親に付き添うんですね。

鈴木 そうです。

福永 早期介入グループは日本にもありますよ。福岡にもありますし、大阪、東京などにもあると思います。ただ、ろうのことを熟知している人かどうかと言うのは人によってばらつきがあると思います。

鈴木 その結果として、医療につなげて終わってしまうという感じなのでしょうか。ろう当事者につなげることができない状況になるということでしょうか。

福永 聴者側から見方になるというのは大きいかもしれませんね。口話や人工内耳につながる人が多いですね。実際に手話があるということを紹介する例は少ない、大都市でも市や町によって異なるということを知ります。

高山 そうですね。私の同級生にもろう学校で仕事をしている人が何人かいます。その友人たち言うには、医療機関で親たちに対して人工内耳を進められて、実際人工内耳を装着するとその後ろう学校には行かず、まったくつながりがないままになり、病院がすべて指導や支援を行って、インテグレーションにつながる人が多いため、ろう学校としては困ることがあるということを知りました。東京が良いか悪いかはさておき、東京は選択肢が多いですね。明晴学園があり、(公立の)ろう学校があり、また口話専門の学校もある。また人工内耳を選択することもできる。このように選択肢は多いと思います。一方で、選択肢の少ない地方もあるので、その場合はどうなるのかはわかりませんが。とにかく医療機関の姿勢ですね。ろう者とのつながりも重要だという考え方の医療機関の場合と、そんなつながりは不要だと考えるところとの差は大きいと思います。

鈴木 手話は難しいとか、手話を覚えると日本語の習得が遅れるというようなイメージを持っているところ、誤解をしているところもあると思います。そのような誤解を解いていく、手話を習得することで得ることが大きいということを伝えていく必要もありますね。

山田 そうですよ。今のお話を聞いて、さらにデフメンターを日本に導入したいと思いました。デフメンターは生きた情報を伝えられます。例えば、(ろう・難聴児を持つ)親が人工内耳に興味を持っている場合、デフメンターの中にも人工内耳装用者がいます。そういう人とつなげて経験者の情報を親に伝えることができます。やはりそう考えると必要だと思いました。デフメンターはもちろん成人です。(ろう・難聴児をもつ)親がデフメンターを見て将来自分の子どもが成長したときの姿を想像できます。デフメンターが希望になるんです。そのような意味でも重要だと思います。

高山 そうですね。

福永 デフメンター制度を作ったのは、地域のろう学校の考え方で、手話やろう文化などの価値観に対する考え方がまとまっていたのだと思います。皆が共通して信念を持って制度化を目指したという背景があるかと思っています。実際に福岡県内の活動で、久留米ろう学校の中で小中一貫教育で日本語を指導しています。やはり学校の中でまとまって目標を目指す姿勢があるから強いのだと思います。とにかくこれからの10年間の課題や目標のかなと思っています。先ほど高山さんがおっしゃった、ろう教員の数が増えてはいるけれど、中高への配置が多く、乳幼児相談や幼稚部、小学部には少ない、そこにもろう教員を増やせたらいいですね。今後を期待ですね。

高山 そうですね。やはり、ろう学校の土台、基礎は早期教育、乳幼児相談だと思います。その土台を固めないとその上に立つ小中高等部での良い教育は難しくなってしまいます。この土台にろうの教員、または専門知識のある先生が結集することが大切だと思います。

鈴木 もし、ろう学校と医療機関とがつながる事ができたら、ろう学校だけではなく、その先にあるろうコミュニティにもつながることができると思います。同窓会もそうですし、先ほどあった実際の人工内耳装用者などの成人のろう者につながることもできます。ろうコミュニティにもいろいろな人がいます。手話を使う人もさまざまです。少し聴力のある人、全く聞こえない人もいるというように本当に人それぞれです。だからこのろうコミュニティ繋がれたら、あとはいろいろな人が協力してくれるはずなのでそうなるといいと思います。

福永 その場合、放課後デイサービスも大きな力になると思います。今、共働きの家庭も増えました。先ほど鈴木さんが話したように、オンラインで指導を受けたいと申し込む親も増えているようですよね。そのような共働きの親に対して（手話学習の？）機会を提供する制度も必要可と思います。その際に放課後デイサービスの例としては、鹿児島県の例があります。ろう学校と放課後デイサービスが連携してお互いに子どもに関する情報交換しているそうです。放課後デイサービスの方にもろう者の職員が多くいて、ロールモデルを見る機会になっているそうです。

高山 もう一つ考えていることは、早期教育の中で私が見ている範囲ですが、もっと支援が必要なのは、父親だと思います。父親たちはなかなか家庭でもコミュニケーションが取りづらかったり、会話の輪に入れなかったりと孤独を感じている方がいます。また手話を覚えたくても、勉強する場がない。父親同士の情報交換の場もないといっています。これも今後の課題なのかなと思います。知識と経験があれば、さらに支援ができるといいと思いました。

福永 この前デフリンピックが開催された際にテレビで放送されたようですが、最近若い聴者の親が手話を使うろう者に関心を持ち始めているなと思います。ドラマの影響もあるかもしれませんが。

鈴木 SNSも、ですね。

福永 そうですね。親たちも情報が欲しい、機会が欲しいけれど、方法がわからない。医療機関や放課後デイサービス、ろう学校でさまざまな生きた情報を伝えられるように、生の人間として対面でお会いしたり、オンラインなどの方法を提供するのも良いのではないかと思います。

鈴木 以前、インスタグラムで、父親が一生懸命手話で話している動画を見ました。どうやら息子さんが4~5才くらいでまだ小さいようなのですが、一緒に指文字や手話を頑張っているのを見ました。友人が見つけて知らせてくれたものです。このような姿を見る機会が増えるといいなと思いました。

高山 一方で、山田さんに聞きたいというかアドバイスをもらいたいのですが、日本の早期教育はまだ遅れている面も確かにありますが、良い面、頑張っているというところもあると思います。早期教育というところかなり広範囲になってしまいますが、デフメンター制度はとても良いと思いますが、日本がデフメンター制度の一步を踏み出すには何をしたら良いと思いますか。なにかあれば案やアドバイスがほしいです。

山田 アメリカも日本もそうですが、親たちが自分で必要な情報を探し、書籍を読んだり、インターネットで検索をしたり人に相談したりと積極的に動く必要があります。もし、生まれた子どもがろう・難聴児だったら、支援チームが来てくれれば親の気持ちも楽になると思います。例えば医師、ろう学校の先生、言語聴覚士、成人ろう者などのチームが来て話をしてくれる、その情報はどこであっても同じもので、バイアスのない情報が提供される。きちんと研究に基づいた根拠のある情報が届けられる、そのような形が良いと思います。

高山 なるほどね。実際にそのチームと会う場が必要ということですね。会って疑問に答えてくれるということですね。

山田 そうです。実際に対話をするということです。また、成人ろう者の存在は本当に重要だと思います。もし近くにいない場合には、子どもが将来どうやって生きていくのか、どのように成長するのか、就職はできるのかなど全くわからないままになってしまいます。なので、実際に会って、知ることによって不安が解消されると思います。

高山 なるほどね。いつでも相談できる人がそばにいるということですね。

山田 そうですね。

福永 気軽に相談できる成人ろう者の存在が重要ですね。実際に久留米ろう学校では地域の成人ろう者を2人呼んで、親子と交流をするということをしています。その時、聴者の親が「ちょっとそれわからない!」とかツッコミを入れていたりとか、聞こえないことが当たり前というような話を明るい雰囲気の中でやり取りしていて、聴者の親たちも笑いながら見ているという、子育てに対して楽しい雰囲気づくりをしていました。

高山 楽しみながらですね。

福永 楽しさは大切ですね。その時なるほどと思ったのは、聴者の親が「リンゴの木とミカンの木」という例を話でした。聴者の親は、立派なリンゴの木を育てようと頑張るけれど、子どもたちはミカンの木なんだという。子どもたちはリンゴではなくミカンなんだから立派なミカンに育てるために一緒に頑張りましょうという話をしていて、すごくいいなと思いました。今回の座談会で、4人の登壇者集まって話した内容は、これから立派なミカンを育てることに繋がるといいなと思いました。

高山 そうですね。

鈴木 違うところを目指すのではなく、きちんと確認して同じ目標に向かうということですね。

福永 リンゴとミカンですね。それぞれ良いところがあります。ミカンも高級なものもあります。それを目指せばいいのだと思います。

高山 みんなが同じようになる必要はないんですよ。それぞれ違っていい。成人ろう者も多様です。ろうの子どもたちも多様です。

山田 そうですね。比べるのではなく、その子のあるがまを受け入れるですね。

福永 そのような雰囲気だと、聴者の親たちも安心して、子育てが楽しくなると思います。これからの10年間の目標としたいですね。

鈴木 本当にそうですね。今日は先輩方からいろいろなお話を伺えて、勉強になりました。まだアメリカで勉強をしている立場ですので、これからを考えるのに参考になりました。ありがとうございました。

高山 本当に。

福永 では時間になりましたので、本座談会はお開きとしたいと思います。ありがとうございました。



## 座談会：言語学がどう手話教授に役立つか

登壇者：川口聖（7期） 山本綾乃（10期） 鈴木美彩（18期）

鈴木 では、日本ASL協会 日本財団聴覚障害者海外奨学金事業 20周年を記念しての座談会です。ここのグループは言語学がテーマですが、専攻が違う皆さんが集まっているので、この機会に多くのことを学び合えればと。よろしくをお願いします。自己紹介からお願いしたいんですが、名前と何期生か、留学時の専攻と現在の活動についてお話しいただきたいです。川口さんからお願いできますか？

川口 分かりました。川口と申します。7期生です。専攻は言語学です。私は留学する前、長きにわたり手話の指導をしていました。指導は私一人ではなく聴者と一緒です。一緒に話し合いながら進めていましてが、思うように進まないこともありました。聴者とうろう者の考え方に違いがあり、意見がぶつかることもありました。なんと言いますか、聴者には、通訳の試験に合格したという自信があります。一方で、手話は日常会話の中で使われることがほとんどです。また、聴者は国語の授業を通して、正誤をはっきりつけることに慣れていますが、手話ではそうした判断が必ずしも成り立ちません。言い方は悪いのですが、どうにかして聴者を負かしたい。そのためにどうすればいいか？ 考えていました。なので、私は色々な場所で学んでみたものの、なかなか思うようにいきませんでした。米内山さんがご存命の時に開いていた手話寺子屋に通っていた時に、ある掲示物に目が留まりました。それが日本財団の留学生募集だったのです。米内山さんから、申し込んでみたら？ と言われましたが、私は年齢的に無理だと答えました。それでもいや大丈夫だ！ と言ってくれて、申し込んでみたところ採用していただきました。まずカリフォルニア州サンフランシスコにあるオーロニ大学で1年間英語とASLを学びました。その後ギャロテット大学に合格し、2年半言語学を学びました。卒業後しばらくして日本で仕事が決まったので帰国しました。関西学院手話言語研究センターに3年間在籍し、契約満了の国立民族学博物館に。その前に関西学院のころに科研費申請をして通ったため、研究者番号を獲得していました。なので研究の延長を希望しました。そこで国立民族学博物館を紹介され5年間在籍しました。そこも去年で契約満了となりました。その後は以前から行っていた大阪市の手話奉仕員養成講座。初級と中上級に分かれているのですが、私は中上級の指導を依頼されたのでそこで教えています。全国手話研修センターが龍谷大学に中に手話講座というコースを開いています。そこでの指導を依頼されたので、通訳養成のための指導をしています。他にも手話に関する講演の依頼もあり、色々な場所で講演をしています。このような活動ですね。

鈴木 色々活動されていますね。

川口 そうですね。色々、はい。

鈴木 すみません。その大学存じないのですが、龍谷大学という・・・？

川口 はい、京都にあります。龍谷大学です。これは龍谷大学が開いているのではなくて、厚生労働省のモデル事業によって若い人を対象に養成しています。全国で7カ所あります。

山本 龍谷大学はその一つなのですか？

川口 そうです。これは今年で終わります。モデル事業なので、決定すれば来年から本事業になって予算がおりると思いますが、まだわかりません。

鈴木 ありがとうございます。川口さんが色々な場所で活躍している様子がよくわかりました。次は山本さんをお願いします。

山本 私は第10期生の山本綾乃です。よろしくお願いします。ええと、まずは留学の・・

鈴木 はい、専攻やきっかけなどを簡潔にお話しくだされば。

山本 私の専攻はろう教育なので、なぜ言語学のグループなのだろうと思われるかもしれません。その点については、のちほど。ろう教育を希望した理由ですが、私は中・高と聾学校に通いました。小学校は地域の学校に通っていただきました。友達との会話はなんとかできていましたが、先生の話している内容が分からず、勉強についていけませんでした。そこで中学校からろう学校に入学し、手話に出会ったことで世界が広がりました。手話を使い始めてからは、友達や先生とのコミュニケーションがとても楽しくなりました。次第に学校の先生を目指すようになりました。群馬大学の中にある特別支援教育学を修了しました。ここは、色々な障害のことを広く浅く学びます。聴覚だけでなく、知的、発達、病弱など。ただ、私はもっとろう教育のことを深く学びたかったのです。日本財団の留学支援事ことは知っていました。中学か高校の時に高山こうたさんの講演があり、ギャロデット大学のことなど自身の経験を話してくれました。とても興味深く印象に残っていました。なので、大学を卒業した後に申し込んで採用をもらいました。川口さんと同じように、最初はオーロニ大学で1年間、英語、ASLを学び、その後ギャロデット大学でろう教育を学びました。

鈴木 そうなんですね。今はどのような活動をされていますか？

山本 帰国後は群馬大学で働いています。留学当時、いつ帰るの？と母校である群馬大学のゼミの先生が帰国楽しみにしてくださっていて、日本に戻ったら一緒に働かないかと声をかけていただきました。当時、群馬大学の中に日本財団助成事業の研究カリキュラムがスタートしていました。研究をしている先輩ろう者の補佐や、手話の講義も一緒に教えております。他には群馬にろうの児童クラブ、きらきらがあって、その児童指導員をしています。そこで、こども達と関わりながら活動しています。

鈴木 大学では年もバラバラですね。若い人から年配の方まで、大人に教えていらっしゃる。児童クラブでは手話を教えるというよりは子供達と手話でコミュニケーションを取る感じでしょうか。

山本 そうですね、手話で会話しながら。ろうのモデルとして、子ども達に関わることは大切だと思います。そういう環境は必要ですね。

鈴木 そうですね。素敵です。ありがとうございます。最後に私です。ごめんなさい、司会が先に自己紹介すべきでしたね。すみません。鈴木美彩です。18期生です。今もアメリカ在住です。初めてアメリカに来た時は日本財団の事業ではありません。日本社会事業大学に在学中、ギャロデット大学とつながりがありました。コイルという計画で、日本社会事業大学とギャロデット大学と一緒に社会福祉について学ぶというものです。その中に交換留学生という制度があり、私に声がかかりました。私は希望することを伝え英語の試験を経て選ばれました。1年間の留学予定でしたが、コロナ禍だったので行けるかどうか分からない状況で、初めは無理と言われました。4月か3月に決定し出発の夏休みまでの間どうなるのか不安でしたが、やはり無理と判断されました。日本との時差は13時間なので昼夜逆転でZOOMの画面を見る生活をしていたら1ヵ月くらいで苦しくなりました。その時、先輩の高山さんがアメリカにいて、DCは他の州に比べて安全だから来たかどうか？と聞いていただいたので、途中からでしたがアメリカへ行きました。その時は日本財団の事業ではなくISSPの特別学生として聾学校に入門しました。以前から興味があって学びたいと思っていました。川口さんも話していましたが、日本語の場合はきちんと教科書を使って学びます。手話は教科書がありません。ギャロデット大学には手話言語学というクラスがありました。

鈴木 とても面白くてひかれていきました。ZOOMでも面白かったのですが、もっと深く学びたいと思い、日本財団の事業に申し込みを決めました。1度日本に帰国し学位を取って、大学を卒業しました。最初の渡米は、日本財団の事業によるものではありませんでした。日本社会事業大学在学中に、ギャロデット大学と共同で行う「COIL」というプログラムができて、両大学が共同で社会福祉の学びを深めるというものでした。その中に交換留学制度があり、ぜひ参加したいと申し出たところ、英語の試験を経て採用していただきました。当初、留学は1年間の予定でしたが、コロナ禍で渡航が不確定な状況になりました。最初は渡航不可の判断が下され、4月または3月に最終決定がされる予定でした。でも8月の直前までなかなか決まらず、ついに渡航は困難との判断が下されました。日本での時差は13時間なので、昼夜が逆転した状態でZOOMによる授業を受けました。約1か月ほど続けたのですが、もう限界でしたね。その際、先輩である高山さんが米国にいたので、ワシントンDCは米国の中でも比較的マスク着用など予防対策が徹底されている地域であることを伺い、渡米したらどうかと助言をいただきました。そのため、途中からではありましたが渡航を決断し、アメリカへ行くこととなりました。このときは言語学ではなく、ISSP、特別学生として様々な授業を受けました。その中で言語学入門を受講しました。以前より関心があり、学びたいと考えていたためです。川口さんもお話されていたように、日本語の場合は、授業で教科書に則って学習します。しかし、手話はろう学校であっても言語として授業で教わることがない点にずっと疑問を感じていました。ギャロデット大学は手話言語学の起源地なので、是非と思い、受講したところとても魅力的でした。より深く学びたいと考え、日本財団の事業へ応募することを決めました。その後一度日本へ帰国し、学位を取得して大学を卒業しました。

山本 まだ卒業してなかったんですね。

鈴木 そうです。在学中でした。1年休学してアメリカに行ったので1度帰国して大学を卒業しました。川口さんと同じく2年間言語学を学びました。その後手話教育学部にも興味を持ち、手話教授法を学ぶ1年半くらいのコースなので、1年の延長を決意し、学費の半分を自己負担で受講しました。現在は修了しています。現在はインターシップ中でバージニア州、DCの隣の州ですね。一般の高校でアメリカ手話を指導中です。当初は、なぜアメリカ手話の指導を行うのか、自分の目標から逸れているように感じていました。しかし先生からは、さまざまな経験を積むことの重要性和、言語学と手話教育の両方の修士号を有している自分は、アメリカ手話講師としての需要が高いので、応募すれば採用されるはずだと助言を受けました。その言葉を受けて、インターシップに挑戦しようと思うようになりました。アメリカでは高校の授業にASLが取り入れられており、日本とは違うので、実際にどのようなものかを見てみたいと思いました。それからはや1年、あっという間ですね。以上です。どうぞよろしくお願いいたします。

川口・山本 よろしくお願ひします。

鈴木 本日のお話の中で共通しているのは、手話教授に携わっているという点です。手話の指導や研究を行う中で、困難や不足していると感じること、また必要性について考えることがあると思います。その点について、皆さんでお話しできれば。沢山あると思うのですが、いくつか選んでお話しできればと思います。まず、私がアメリカに行って最も驚いたのは、高校でASLの授業があることです。日本では考えられないことです。しかしそれだけ、ASLは人気が高いんです。現在、日本ではろう者がテレビに出演したり、手話を見る機会が増えていますが、アメリカでも同様に手話の露出が増えていきます。その結果、アメリカでは3~4年前から、手話が語学の選択科目の中で最も人気のある科目となり、全米で一位などトップの位置を占めています。大学や高校でASLを希望する生徒が多いというのは、驚くべきことですね。一方で、手話を学びたい聴者は多いものの、指導できるろう者は不足しており、ろう者の手話講師の需要に対して供給が追いついていない状況です。また、高校で教え始めて気づいたことは、アメリカと日本では文化の違いがあるということです。アメリカでは個性が重視されるため、学校のルールや常識を明確に教える必要があります。一方、日本では暗黙の了解で成り立つ場面が多く、高校生も比較的自立している印象です。

山本 上下関係という部分ですね。

鈴木 アメリカでは、教師と生徒の関係が比較的対等であり、15～17歳という年齢もあってか、反抗期のような態度を感じる事が少なくありませんでした。そのため、アメリカで手話を教える際には、手話そのものを教えることよりも、学校生活における常識やマナーなど、一般的なことを教える負担が大きいと感じることがありました。その結果、私は「ろう者として、どこまで文化の違いやアメリカとの違い、ろう者と聴者の違いを伝えるべきか」ということを常に考えるようになりました。また、私が就任する前のオンライン授業では、ろう者が指導することはなく、知識の提供に留まっていました。文化や歴史については学べても、実際に手話を使う機会が十分ではありませんでした。私が来た時、2年間手話を学んだという女子の生徒がいたため、手話で話しかけてみましたが、実際には手話を使うことができませんでした。2年間学んだにもかかわらず、です。この経験から、アメリカで手話の人気度とその実態や学習の質は、別問題だと学びました。日本でも大学で手話が学べる機会が増えていることは良いことですが、同時に懸念もあります。専門的に指導できるろう者の数は十分なのか、今後、高校でも導入されるのか、今はないかもしれませんが、その段階でどのように対応していくべきか・・・など。

山本 高校の授業のカリキュラムに手話が含まれるといいですね。英語かアメリカ手話かが選択できるというと思います。

鈴木 そうですね。その場合に考えなければいけないのは大学で教えるのと高校で教えるのは違うので区別が必要です。例えば大学生の場合はもう大人なので知識やタブーが分かります、例えば死にまつわることや性に関する話しは伝え方に注意が必要です。また、ろう者の抑圧の歴史に関することも。高校生の場合は未成人の子もいるのでどこまで教えるか。楽しく学ぶことだけでいいのか。きちんと方針を決めることが必要です。

山本 内容をきちんと考える必要がありますね。

鈴木 聞いた話しですが、埼玉では地域の小・中学校からろう者に講演に来てほしいという依頼がサークルや協会に多数きているようで、派遣するので忙しいそうです。小・中学校で話す場合についても考えてみるというかもしれません。

川口 実際、大阪でも同じです。小学校から手話の指導を依頼されることは多いです。

鈴木 あるんですね。

川口 ありますね。小学校・中学校・高校から協会に依頼がありますが、問題は指導できるろう者がいないことです。いないというか、指導内容を考えるのはほとんど聴者です。学校との打ち合わせも聴者だけで行くのでろう者は同行していません。全て終わってからろう者は呼ばれるので、お客様扱いです。

鈴木 その場に行って座っているという感じですね。

川口 そうです。呼ばれ時だけ出ていき手話をします。

山本 ろう者が呼ばれたのに内容は聴者が考えるのですか。

川口 そうです。挨拶や自己紹介など、簡単なもの。小学生が覚えられそうな内容を考えてきます。聴者がこれはどうしますか？と聞いた時に表現するだけのモデルです。言われた言葉を表現するだけです。それと大阪市は初級クラスを24区で開催しており、生徒の数は1年間で400人、500人になります。24区で開催するので。問題はろう者に教える力がないので聴者と一緒に指導します。

川口 そうすると聴者のほうが主導権を握ります。ろう者のほうが立場が弱くなり、聴者主導での指導になります。区としては講習会ではろう者も一緒に指導してほしいと希望しているので、ペアで行っている状況です。初級は24クラスで生徒は400～500人ですが、中・上級は10カ所位での開催なので生徒は200人位です。減りはしますが、それでも生徒の数は多いです。私は中・上級を担当していますが問題は年齢層が幅広いことです。若い人は20歳で80歳の方までいます。

山本 80歳の方もいるんですね。

川口 います。全部で20人か22人くらいです。

鈴木 幅広いですね。

川口 そうです。若い人達と年配の方達は受講の心構えが違います。言い方は変ですが、40代50代以上の人は手話サークルの通っている感じです。簡単に言うと、手話を教わっても出来ない場合は復習が大切です。私は講習会の中で前もって復習が必要だということは伝えてあります。でも年配の方は必要だと感じてないようで、何もせずに次の授業に参加して分からない時は忘れた、忘れたと言います。年配の方に教えるのは大変です。

山本 目的がないのでしょうか。手話でおしゃべりができて楽しいだけとか。

川口 ボランティアですね。

山本 ボランティアですか。

川口 あとは手話での会話を楽しんだり、何かあった時にろう者を助けてあげたいというくらい。通訳を目指しているのではなく、何か手伝えたらいいという感じです。手話という言語を学んでいる感覚もありません。若い人達はインターネットなどで情報を得て手話は言語であることを認識していますし、覚えるのも早いです。なので、年配の方と若い方は違いがあるので一緒に教えるのは大変です。

鈴木 受講生のバックグラウンドが色々だと教える時のバランスを調整するのが難しいですよ。

川口・山本 そうですね。

山本 今、大学の中で社会人を対象に手話を教えています。先ほど川口さんも言っていたように、参加者の年齢が幅広く、社会人の中でも20歳から70歳までの方がいます。手話の経験もある人と全くない人というバラバラです。そんな人達が一緒に学んでいくので、上達のスピードもそれぞれですが、みんな意欲的に手話を学んでいます。宿題や授業、予習、復習など、動画で確認して頑張っています。

鈴木 いいですね。

山本 手話の経験者はすでに身に付けたものがあります。これから改めて日本手話の文法や構成などを習得するのに時間が必要です。全く経験のない人はろう者の手話を見て、手の動きと目や眉の動きも身に付けるのが速いです。それぞれ課題が違います。

鈴木・川口 そうですね。

川口 地域の講習会と大学では違いがあります。地域の手話講習会では市からお金が出ているので受講するのは無料です。

山本 大学の場合は自分でお金を支払います。なので、受ける人は熱意があります。

川口 そうです。そこが違います。

山本 そうですね。

鈴木 手話を学ぶ時に、ろう者と話したいと思うか、手話は簡単に覚えられると思うか。この姿勢の違いで上達の速さが変わります。今、私が教えている生徒も同じです。去年からアメリカ手話の先生がくることになり、喜んで申し込んだ生徒もいます。でも中には本当に手話に興味がある人と、他の教科に興味がなく手話を選んだ人もいます。

山本 消去法ですね。

鈴木 実際にアメリカでの研究者で名前は忘れてしまいましたが、その方のデータによると高校の中に、先生とは別にソーシャルワーカーがいてサポートしてくれます。その人達は学習障害やADHDなどの人にアメリカ手話を勧めることが多いそうです。手話は視覚的に情報を得るので、そういったことが得意な人に手話を勧めることが多いとデータがあります。また、ディスレクシアと言って、文字も読み書きが難しい人は音声で理解しますが、ろう者は英語を書いてコミュニケーションとるので、難しいんです。文字を読んだり書いたりすることが苦手なので、板書も意味なくなるんですね。実際私の学生は音声アプリを使用してみると内容を理解して手話の表出ができるようになりました。他の語学のクラスと比べてASLのクラスはより様々なバックグラウンドの生徒が集まります。でも、手話をたくさんの方が学んでくれるのは嬉しいです。良い面で色んな生徒がいるので、コミュニケーションの取り方や相手との対話方法などが勉強になります。大変なのは一斉に技術指導をすることです。生徒によっては手話は簡単だと思っていたけど、難しかったとショックを受ける人もいます。でもそれこそがいい学びになるので、そこから手話を学ぶモチベーションにしていければいい。すぐに手話を習得して簡単な会話ならスムーズにとれる生徒もいれば、自己紹介程度で会話はまだまだという生徒もいます。生徒の中で習得のスピードに差があるので、学ぶ姿勢というのは影響があるとおもいます。

川口・山本 そうですね。

鈴木 指導のカリキュラムですが、先ほど川口さんが聴者とろう者のペアの場合、聴者が考えていると言っていましたね。やはり、ろう者の中で指導のカリキュラムの知識や研究についてもっと知識を増やすことが必要で、そこが課題だと思います。今、自分で行っていることや他のろう者との協働など何かあればお伺いできますか。

川口 もし、ろう者が指導する場合は手話とは何かを知らない人が多いと思うので、まずは手話について知ることが大事です。言語であることや文法があることなどを細かく伝えます。ただ、そのあたりを聴者に知ってもらうことが必要です。ただ、ろう者は自分たちが自然に使っているのもそのまま表出するだけになることも多いです。聴者は手話をみて、そのまま形を覚えている感じがします。これまでの流れもあるので仕方がない部分もありますが、これからの課題は、手話とは何か。を教えることだと思います。

鈴木 ろう者として手話だけを教えるのではなく、文法や意味、使い方も説明できる必要がある、例えばナチュラルアプローチのような教え方もありますよね。他の言語を介せず手話だけで教える方法もあれば、文法を説明するやり方もあるので、教え方はさまざまですね。ろう者も学びが必要ということですね。

川口 そうです。

鈴木 山本さんはどうですか？

山本 私の場合は大学で教えています。私だけでなく他にも手話言語を研究している人が2人いるので、その方達と一緒にです。指導方法は手話の文法を基にきちんとカリキュラムを作っています。それを基に私も一緒に進めています。生徒たちは流れ、文法、構成などは実際に手話を使って会話することで学びます。授業だけで終わるのではなく、文法のポイントだけ指導して、その後生徒が自由に考えます。テーマをあたえ生徒同士が手話が話しながら進め、最後に発表してもらったものを評価します。自分で考えて手話を表出する経験は必要だと思います。

鈴木 実践は大切ですね。手話を見ているだけでなく、手話と使うことが必要です。

山本 手だけでなく、目や眉の動き、口形の使い方や肩の動きなども必要です。手話は手の動きだけでなく身体全体の動きが大切ですね。ただ、聴者が身に付けるのは大変だと思うので繰り返し手話を表現することが大切です。

鈴木 他にろう者がいるのは相談ができるのでいいですね。自分の考えだけでは限界があります。

山本 確かにそうですね。群馬大学の場合は先生同士でサポートしています。他にもう1つ教えている大学がありますが、そこは自分で今までの経験を基に準備しています。

鈴木 私が今教えている高校の場合は、オンラインの教材を使っています。TWAというろう者が作ったものです。テキサスのろう者のグループです。今、需要が上がってきてるので。その教材は1-1、1-2のようになって全部で6章あります。ASL1は6章までだったかな。教材動画が豊富で。例えば、ろう者の文化は電気を消して知らせたり、相手の方をたたいて呼んだりという基本的な行動を説明するASLの動画もあれば、普通に会話しているものもあります。ASL1は日本の場合入門レベルですが、最初から手話が速いです。内容は簡単で、例えばお兄さんいる？ 子どもは？ といった簡単な会話です。でも、ろう者が普通に表現しています。どうして手話が速いのか？ これはろう者の自然な手話だから繰り返し見ていれば慣れて手話が身に付きやすいとのこと。私はその教材の中からいくつか選んで、授業で使用しています。普通、授業の時は教科書があってそれを教師が自分で考えながら使って指導します。それと同じ感覚です。やっぱりろう者の教材動画がたくさん必要だと思うので、このような教材があるのは良いと思います。日本でも本や動画がでていますが、これからもっと色々なものが増えたらいいと思います。

山本 今、手話の動画が増えていますが、日本手話か日本語対应手話なのかは手話を学習中の聴者は判断できないと思うので心配です。

鈴木 本当ですね。SNSの問題ですね。

山本 判断するにはどうしたらいいのか？ ろう者からの情報提供が必要かと思います。

鈴木 そうですね。TWAにもあったんですが、今ある教材以外にSNSやTikTokなどたくさんあるのでそれを見ることは経験になります。でも、まずは先生に確認すること。自分のASLの先生に確認してから学ぶようにしよう、と。でも例えば聴者のASL講師がTWAを使うこともできます。その場合の判断は果たして適切に下されるのだろうか。。という問題はありますが、今、教えている生徒から動画を見せられることはありますか？

山本 あります。何かの動画を見ているようですが、あまりお勧めできない動画の場合は他の教材を提供してみてもらってます。

鈴木 講師として、社会の様子にアンテナをはっておく必要がありますね。知っていれば情報提供もできます。

山本・川口 そうですね。

鈴木 では、そろそろ終わりの時間が近づいてきましたが、最後に何かお話ししたいことはありますか？

川口 1ついいですか？

鈴木・山本 はい。

川口 今までの話しにもう1つ、評価方法についてです。この部分は日本はまだまだです。今までの評価方法は日本語で評価していました。手話を手話で評価するのではなく、手話を日本語で評価することが多いです。これからの課題だと思いますが、手話を手話で評価する方法の議論はまだされていません。本当は大学できちんと言語学として評価についても議論することが必要ですがありません。難しいです。もし、きちんとした評価方法があればきちんとした指導にもつながると思います。評価方法を意識しながら指導ができると思います。

鈴木 やっぱり難しいですね。さっき言いましたが、ろう者としても知識が必要です。手話を教えるだけでなく、評価の意味や目的も学習が必要です。

川口 そうですね。

鈴木 手話教育過程で評価についても学んだのですが、目から鱗でした。手話教授に関する授業も興味深かったのですが、評価に関する知識はとても勉強になりました。手話を評価するためのルーブリック。例えば文法という項目があってそれを数字で評価する。文法がまったくない。少しある。ほぼ出来ているが少しない部分がある。よくできている。このような表を作れば講師としてAにしようかBにしようか迷った時に、評価がしやすくなる。あとで問題になることもないです。もし、自分の評価に不満がある生徒に対して説明もしやすく生徒も課題が解決しやすい。このような内容が必要ですね。

川口 そうですね。

鈴木 これで終わります。ご協力ありがとうございました。



## 座談会：ろう者の身体感覚から生まれる可能性

登壇者：管野奈津美（3期）西雄也（12期）福島愛未（12期）

福島 皆さん、こんにちは。今日は座談会を行います。テーマは、「ろう者の身体感覚から生まれる可能性」についてお話をしたいと思います。今日はお2人に来ていただいています。私は司会の福島愛未（めぐみ）、第12期生です。あとお二人のゲストに来ていただいています。名前と何期生か自己紹介をお願いします。

西 私は12期生の西雄也と申します。よろしくお願いします。

管野 3期生の管野奈津美です。よろしくお願いします。

福島 まず、留学した時のテーマを簡単に紹介していただきたいと思います。西さんお願いします。

西 私はアメリカに留学して、ギャロデッド大学の大学院でろう教育を専攻しました。その中で、インターンシップ、つまり教育実習をろう学校で行い、2ヶ月研鑽を積みました。またその後、デフアートの団体で、アメリカのさまざまな州のろう学校の美術の先生や、芸術活動をしている方などが集まっている中で、1週間デフアートのプログラムやワークショップ、講演を聞いたり美術館に行って意見を交わしたり、作品を作ったりといった活動を並行して行いました。

福島 ありがとうございます。管野さんはいかがですか？

管野 留学の目的は西さんと似ているのですが、デフアートの研究と、あと、美術館内のサービスの2点について勉強しました。デフアートは、同じギャロデッド大学の別のろう者学部の中の大学院2年間いました。基本はアメリカとヨーロッパのデフアーティストにインタビューして、その研究を元に論文を書きました。

福島 ありがとうございます。私の留学のテーマはデフスペースで、ろう者が心地よく過ごすための空間デザインのことです。その頃は、まだ日本ではそういった考え方が広まっていなかったもので、その発祥の地である、皆さんと同じギャロデッド大学で学びました。私は大学院や学部ではなく、ISSPという1年間留学生が好きな授業を取ることができるプログラムがあり、そこで学びながら、大学の中にインターンシップの事務所があり、デフスペースの調査、改善を行う事務所で学業と並行してインターンとして働きました。この3人の共通点は、デフアート関係が私たち3人の共通点かなと思います。意外にもこれまで3人で話をする機会はありませんでしたよね。この機会に皆さんにお聞きしたいと思います。まず留学のテーマをお話ししていただきましたが、帰国後の活動内容や仕事について伺えればと思います。どちらに先に伺いましょうか？

西 帰国後、今は明晴学園で働いており、美術の授業を担当しています。その中で美術を教えるときに、1年に1、2回、例えば中学部であれば中1で1回、中2で1、2回、中3で1回とプログラムを作って教えています。

福島 なるほど、ありがとうございます。管野さんはいかがですか？

管野 今行っている活動は3つあります。元をたどると...長くなるのでまとめてお話ししますね。一つ目は、今育休中なんですけれども、5005の運営をしています。2つ目はRe; Signing Project (リ・サイニングプロジェクト) という団体の代表をしています。3つ目は「めとてラボ」という団体に所属しています。簡単に帰国後の経緯を言いますと、もともとろう学校で7年ほど美術を教えていました。その時に「育成×手話×芸術プロジェクト」という団体があって、そこから声を掛けられて、美術部門で、...例えば聴者のアーティストやキュレーターと共に、ろう者と聴者が対話をしたり、ろう者のための美術鑑賞ワークショップなどを行ったりしました。その中で、ろうの芸術について話す機会がありました。その流れで自分で展覧会を開催しました。「～視覚で世界を捉えるひとびと」という展覧会をしました。それをきっかけに今の流れがあります。今主にやっているのは、美術館のろうナビゲーターの養成方法やプログラムを考えて一緒に...例えばアーツカウンシル東京と一緒にプログラムを開発しています。欧米では美術館にろうナビゲーターがいて、手話で作品の解説をしてくれますが、日本ではまだそういうことありません。ろう者が集まって絵画を鑑賞し語り合える場がないので、そういった場を設けたいと思って今頑張っているところです。

福島 私は帰国後まず大学院に入って、デフスペースについて日本に合うのはどういうものか、改めて研究を始めました。デフスペースの基本はろう文化やろう運動ですが、建築もあります。その点でアメリカと日本では違うのではないかと思ったのです。そこで日本に合うデフスペースと何かということを考え始め、デフスペースの研究を続けています。研究は個人での活動で、もう1つ管野さんと同じ「めとてラボ」でろうの家に着目しました。これまではレストランやカフェなど不特定多数の人が訪れる場所についての調査が多かったのですが、ろう者の家は住んでいる人が色々と工夫しているスペースがありますので、そこに興味を持ちまして、それも取材などしています。他に管野さんからご紹介いただいた5005、手話ではこのように表しますけれども、そこも日本で初めてデフスペースの概念を取り入れて作られています。その時にデフスペースアドバイザーとしてお招き頂きまして、皆で知恵を出し合って作りました。皆さんいろいろと精力的にご活躍されていると思いますが、私の場合、帰国してすぐにデフスペースを広めたいと思って頑張ったんですが、なかなかうまくいきませんでした。皆さんはいかがでしたか。帰国後、活動は順調だったか、それともいろいろと困難があったのか。まだ実際に活動してきた中で、浸透してきたとか、変化や効果があったというような経験があれば、ぜひお聞かせいただきたいと思います。では、西さんお願いします。

西 ちょっとズれるかもしれませんが、さっき福島さんがデフスペースを学んで帰国した後、アメリカのやり方をそのまま持ち込んでも合わないから、日本に合わせて変えていくという話がありました。それは身体感覚と結びついているものがあると思います。ろう者としての身体感覚と日本人としての身体感覚に合わせて変えていくことをやっていると思うんです。例えば学校の中でデフアートを教えていますが、アメリカの特徴は色彩がはっきりしていることと、アメリカは自己主張が強い文化があります。一方日本の生徒たちの絵を見ると、日本人としての身体感覚というか、文化の表現として、例えば富士山を背景に手話を表すとか、日本人の色はあまりはっきりしてなくて、淡い色を好むといったところもあります。また抽象的な絵があることに気づきました。もう一つ、日本で広まっているといえるかどうかはちょっとわかりませんが、これは私が活動した成果ではないのですが、国立にスターバックスがありますよね。そこにイラストレーターのコーダによるデフアートがあります。街中のお店で展示されていれば、ろう聴関係なく刺激になると思います。言語とかろうの世界とか、いろいろ頭に入ってくると思います。このように、実際に社会に発表しなければならない、学校で学生がデフアートを学び、作品を作って将来的に活動の中でデフアートを発表していく、それを後押ししています。種まきをしているようなもので、徐々に広まっていけばいいなと思っています。また明晴学園は見学者が多いので、校内に絵を展示して見てもらうことで、デフアートに興味を持ち、「不思議」とか「すごい」などの感想を言ってくれる人がいます。それを機にこういう世界があるということを知っている人が少しずつ増えることで、将来的に大きな変化につながるのかなと思います。

福島 ありがとうございます。実は私も、なんの機会だったか明晴学園に見学に行って、廊下にデフアートが展示されていたんです。それまで自分が通っていた学校では見たことがありませんでした。歩いていると作品が目に入り、自分の経験と重なるところがあって、それが伝わってきて感動したことを覚えています。ありがとうございます。管野さんいかがですか。

管野 私はお二人と比べると帰国が早く、3期生でしたからもう15年になります。早いですね。帰ってきた頃は、デフアートって何なんだろうという空気がありました。講演に招かれ講師を務めたこともありましたが、数としては少なかったです。本当に最近ここ5年ぐらい...あ、もともと先ほどお話ししたように学校で美術を教えていて、その最後の方に「育成×手話×芸術プロジェクト」でも聴者がやっと...その前は手話は福祉という偏ったイメージがありましたよね。障害者のもの、みたいなイメージがありました。今、そこが変わってきて、手話は言語である。つまり、言語としての手話に興味を持つ聴者が増えたように思います。それで聴者のアーティストやキュレーターからろう者の生活、文化といったものを知りたいという声があります。それで私の方から説明したりしました。例えば現代アートの場合、社会問題が大きなテーマだと思うんですけども、ろうもそこに含まれている。そこに興味を持って質問されて、そこにお答えしていくという動きが始まっています。2020年ぐらいからそういうことが増えてきました。ちょうど先日デフリンピックが終わりました。美術館も一緒に文化プログラム...例えば聴者のオリンピックは文化プログラムと一緒に開催することが多くて、東京都も都民と一緒にやっていたため、...例えば、美術館の中に手話通訳がつく動きがあり、最近は手話通訳付きプログラムが増えた感じがします。最近本当に最近変わりましたね。興味を持つ人が増えていると思います。

西 そうですね。デフリンピックが開催されることになり、管野さんと一緒にアーツカウンシルを通しての講演を行いました。その目的は、啓発や知ってもらうこともあります。そこでろう者の文化や芸術とは何か、意見を交わす機会がありました。それも社会に広める良い方法だと思います。ですよ。

管野 そうですね。

西 それをきっかけに講演だけではなくて。最近は、ろう者の活動の中でろう芸術祭とかが増えましたね。

福島 本当ですね。デフスペースも、皆さんと似ていると思いますが、帰国した時は、何年前か忘れましたが、6年...5、6年ぐらい前に帰国して、大学院で研究をしながらデフスペースが必要だと思って周囲に声を掛けて。実は22歳、大学生の頃からデフスペースが必要だと思って、一生懸命普及させようとしたんですが、なかなかうまくいかなくて帰国しても同じ。なかなか普及しなかったのです。例えば聴者の建築家とお会いする機会があって、デフスペースについて話したのですが、彼にろう者のための特別な空間デザインは必要じゃないって言われ、すごくショックでした。最近少しずつ聴者も興味を持ってくれ、面白いねって言うことが増えたように思います。特に5005ができてからは、それまでは話だけで実際に体験する場がなかったんですけども、5005ができた後は聴者が来て、触れて経験して、デフスペースはこういうものかと実感してもらえました。聴者とろう者では体の使いかたが違うということを体験してもらえた。そこから少しずつ浸透してきたという流れがあります。今、この3人は、やっと時代がきたみたいな感じですかね。少しずつ広まっていてと思います。次のテーマは、ろうの身体感覚。共通するものがあると思うんですけども、それについてお話をしたいと思います。今からろう者の身体感覚について。恐らく今ご覧になっている方々の中にはピンとこない人もいると思うので、改めて皆さんから色々な例でろう者の身体感覚というのはどういふものかについてお話をしてほしいと思います。

西 ろう者の身体感覚というのは、ろう者の経験、例えばろうという目で生きている。聞くのではなくて、視覚に注力をする。ろう者の経験があると思います。その感覚の蓄積がある。

西 例えば私がアメリカに行って、デフアートの話をしましたけれども、アメリカではデフアートとデビア、スペルはDeVIA、手話表現は定まっておらず、このように表す人もいますけれども、これはろう者の経験、アイデンティティの2つを表現する芸術に分かれています。デフアートは広くて、ろう者が作ったものを指します。デビアはろう者の経験、アイデンティティ、手話などをはっきりと打ち出す。自分の身体感覚をはっきり表す絵という感じです。例えば、手話の表現は聴者の感覚と違う。ろう者は感覚を表すのに加え、見る人が感覚的に受け取れる、伝わる感じです。あと例えばろう文化ではコミュニケーションするとき輪になって座りますよね。聴者は横に並んでいても話せるし、美術館などでも話しながら見ることができますけれども、ろう者は円形に座る。アメリカでそう絵に描いている人がいます。それも身体感覚に合っている感じがします。

福島 さっきデビアの話があったと思いますけれども、デビアについて、もう少し具体的に作品の例や雰囲気を見せていただけますか？

西 そうですね。例えば1つは手話の手の形を描いて、背景に、その手話に合った絵を描く。例えばさっき言った日本人の感覚で言う、富士山。日本の国旗を模した絵の背景に富士山が描かれている。あと経験でいうと、例えば聴者が声でおしゃべりしていて、ろう者が孤立している暗い雰囲気、苦しさを表す。一般的には美術館では戦争の苦しみや、その時代の苦しさ、例えばムンクの叫びなどの表現があるわけです。一方、ろう者の苦しみで言うと、例えば孤立。周りの人たちは談笑しているのに自分は一人黙って座っている状況を描いた絵や...、あるいは昔、歴史といえば口話の押し付けがあったと思います。その時にろう者の感覚としてはロボットというか、何かこう腹話術の人形として話をさせられているような絵があります。聴者は自然に耳から音が入ってくるので、そういった苦勞は経験がありませんよね。ろう者は腹話術のように感じたことを表した作品があります。

福島 ありがとうございます。他にもありますか？ ろう者の身体について

管野 はい。さっきもお話しましたがけれども、以前展覧会を行った時に、私が出展した作品は、3人の若いう者がカフェにやって来て、自然体でいつものようにおしゃべりする姿を撮影し、それを2つのスクリーンに上映したんです。そこで印象的だったのが、これまで成長する過程で自然と身につけたものがあるんですよね。例えば、集まって座るとき、お互いの手話が見えるかどうか確認して位置を調整して座ります。カフェでも自然と椅子の向きを変えてお互い手話が見えることを確認してからおしゃべりを始めますよね。あとは、飲み物や食べ物を頼んだあとも、例えばストローで飲み物を混ぜたり飲んだりしつつも視線は相手の手話を見ています。マナーがいいかどうかはともかく、ろう者は自然と飲んだり食べたりするときも相手から視線を外しませんよね。改めてその様子を撮影したものを上映し、見ることで自然と身に着いた共通するものがあるとわかります。例えば、ある人が話をしていて、他の人はその人を見るわけですが、その時に腕を組んだまま見ていることがありますよね。ほかにもいろいろあります。例えば座って、両手の指を組んでいることがあると思うんです。そこで片手をいったん上げてまた戻す。聴者だったら、「あっ」とか「あれ」みたいな声を出すような時、ろう者はちょっと手をあげる。でも、今は話が盛り上がっているから後にしておこうと手を戻すみたいなことがありますよね。そのような細かい点が、見ていると出てきて、何とか暗黙のルールじゃないけど、なんか自然と、ろう者が集まった時に自然と出てくるルールというのがある。その空間。ろう者の身体感覚と関わりがあると思います。見ていると面白いです。聴者もろう者も関係なく集まると、ろう者が自然とやっていることがあるとわかる。映像を見て改めて、「確かにあるある」と気づく。聴者が見ても、最初はわからないのですけれども、徐々にその空間全体で、障害者ではなく言語を持っている人たちが集まる、そういう空間なんだとわかってくる。聴者も手話がわからなくても、前にいわれたのが「懐かしい」と。見ていて心地よさがあると言われました。手話はわからないのだけれど、「やり取りを見ていて心地よい」と言われたことがあり、面白いと思いました。

西 飲み会で座っている時、聴者は誰かを呼ぶときに声で呼びますが、ろう者の場合は、肩をトントンするか、手を振って気づいてもらうなどしますね。それも含まれますよね。

福島 そうですね。さっき菅野さんがおっしゃっていた。腕を組む仕草をするろう者はすごく多いですよ。でも聴者の世界においてはそれは失礼な態度とされますよね。でもろう者の場合は話をきちんと聞いているということを示す自然な形として腕組をしているので、ろう者の体の使い方と聴者は違うなと思いました。私はデフスペースの観点で身体感覚について色々発見があって、振動の例をお話したいんですけども。私が育った家というのは、普通の古い日本の家です。壁がたくさんあるので視覚からの情報というのは得にくいのです。振動については特に気にしていませんでした。アメリカの家にホームステイをしていた時、それがろう者の家だったんです。ろう者用の家というわけではなくて、普通のアメリカの家だったんですけども、アメリカの家というのは地下室がある一般的なんです。それで、地下室があると1階の床が振動しやすいんですね。で、それでいいこともいろいろあって。例えばシャワー室にいと部屋の外の様子がわかりません。でも、例えばお父さんが帰ってきた時に、どしんどしんと歩く振動が感じられるんです。お母さんの場合はバタバタ歩く感じで、振動が違います。その家には2歳のコーダの子がいたんですが、ちょこちょこって歩く感じなんですね。シャワー室にいても誰が帰ってきたかわかるんです。アメリカでは私は勉強がすごく大変だったんですが、そんなときでも2歳の可愛いコーダの子が遊んでほしくてよく来ていました。来ると遊んであげなきゃいけないので、その前にドアを閉めなくては、なんていうこともありました。なんというか、家の中の気配というのか、振動があると、見えたり聞こえたり以外で誰かがいるというのが安心感がありました。もう1つろう者の特徴を紹介したいと思います。それは感覚の範囲の共有です。ギャロデット大学の研究で明らかになったことなのですが、例えばろう者が2人おしゃべりをしながら並んで歩いている時に、先程西さん、菅野さんもおっしゃったように、座って話をするときちょうど良い距離に調整するという話がありました。手話で話すときにちょうどいい距離っていうのがあるんですね。2人並んで歩いている時に、前方に柱があったとします。普通に考えれば、お互いを見ながら喋っているので、柱が目に入らず、ぶつかってしまうこともあります。そうなんですけども、実際にはそういうことにならないんです。その理由を研究したところ、おしゃべりつつも、柱があることに気がついた方が自然と避けるように歩きます。2人の距離は決まっているので、1人が少し避けて歩くと、もう1人もそれに引っ張られるように自然と柱を避け、同じ距離を保ったまま2人で歩いていきます。

つまり、お互い視覚情報を共有しているということ。またろう者が歩く時、「自転車が来るからよけて」とか「車が来るよ」など自然と助け合いながら歩いている。これは聴者と違う歩き方です。聴者とろう者が違うとわかって、とても面白く思いました。

菅野 今の話で。気がついたことが2つあります。1つは、3歳の息子がいるのですが、息子が帰ってきた時の足音がわかるんですね。マンションに住んでいるのですが、帰ってきたっていうのが分かって。大きな振動ではないんですけども、トコトコと歩いている感じで、帰ってきたことが分かるので、さっきの福島さんのお話と同じだなと思いました。見るだけではなくて、振動に対してもろう者は敏感じゃないかと思います。例えば、地震も気付くのが早いような気がします。少し揺れただけで、すぐ気づくことが多いです。もう1つは、さっき言っていた距離感の話。例えば友達と集まってお話している時に、例えば、皆の視線の邪魔にならないよう体を引くのって自然にやりますよね。ほかの人たちもそれに気がついて、自然と体の位置を調整してお互い見やすいようにすることもできますよね。誰か1人がちょっと体を動かすだけで、みんなもそれに反応して動く。それも距離感覚に含まれるのかなと思います。

福島 そうですね。

西 デフスペースについてなんですけども、明晴学園のデフスペースはまた違うところがあって、聴者の普通の教室の場合、ドアや壁がありますが、明晴学園はそれをなくして見通しを良くしてあります。外が気になって集中できないときはロールスクリーンを閉めます。身体感覚の違いと言えば、明晴学園にも聴者の先生がいます。誰か来たかどうか主に音で判断します。誰の足音が聞き分けられる人もいます。ろう者の場合には、ロールスクリーンのわずかな隙間から見えて、「いま誰々が通った」と言います。狭い隙間なんですけれども、ロールスクリーンが上がっていれば見てわかります。違うなと思います。聴者は話をしているとも聞こえてくる音で判断します。少しずれを感じるがあります。

福島 面白いですね。今、ろう者の身体感覚について、皆さんにいろんな例を出していただきました。皆さんイメージできると思いますが、日本に帰ってきてからいろいろと考えて、もしかすると、ろう者の身体感覚というのは、ろうであるけれども、同時に日本人としての感覚もその2つが混ざっているのではないかなと思うことが、時々ありました。お二人はいかがですか。

西 先ほどお話ししたように、絵の表現で、日本人の文化や日本の暮らしの中にあるものの影響があると思います。富士山であったりとか色の使い方であったり。日本らしさもあると思います。

管野 そうですね。日本人は何というか...アメリカのデフアートの場合、何か強さがあるように思います。なにか表現がすごく強いですよね。迫力があります。日本はどちらかと言えば、強さがないほうが好まれることが多い感じでしょうか。

西 落ち着いた絵が見られますね。逆にアメリカは落ち着いた絵は少ないのが面白いです。

福島 私の場合、建物になりますが、アメリカと日本では少し違いがあります。アメリカのギャロデット大学のドアは開き戸多いんですよね。開き戸でろう者あるあると言えば、よくドアにぶつかってしまう。窓がないドアの場合には、中の様子がわからないので、突然ドアが開いて中にいる人がぶつかってしまうことが多いです。廊下から奥まった位置にドアを設置してぶつかりにくくするという工夫がこらされています。日本文化の場合には、引き戸が多いですよ。引き戸。その方がろう者に合ってるんじゃないかなと思います。開き戸より引き戸のほうがいいのではないかと。例えば日本の場合、日本建築を見ると意外とろう者に合うところがいくつもあるのではないかと思います。例えば、障子なんですけれども、障子の場合には、少し透けています。和室で電気がついていると影が見えるので、誰かがいるということがわかります。このように、日本人の感覚とろう者の感覚というのは、混ざりあうことで、より活かすことができるのではないかと思います。今まではアメリカで教わったことがすごく新鮮でそれを日本に持って帰ることが多かったのですが、実は日本の中にもたくさんろう者の身体感覚を活かせるものが多々あるのではないかなと思っています。お二人はいかがですか。

管野 今おっしゃったことと繋がるんですけども、私がデフスタディズを教わっている時に、本、タイトル忘れちゃったんですけど、聴者の日本人とアメリカ人、あとドイツだったと思いますが、それぞれの空間の使い方の身体的な違いみたいな本があったんです。例えば、日本では、昼間、昔の和室は狭いので、ちゃぶ台を出してご飯を食べて、夜になればそれを片付けて布団を敷いて寝る。一つの部屋をいろいろな用途で使う。皆特に意識していないと思うのですが、狭い空間を工夫しながら使っていく。体の使いかたが違うんだという気づきがありました。アメリカは家が広いから違いますよね。それと日本的なろう者の体の使い方も...アメリカと日本とのろう者でも例えば、ろう者が集まっている空間は同じだと思うんですけども、空間や距離の使い方はちょっと違うのではないかなと思います。

福島 本当ですね。まだまだ何というか、ろう者の身体感覚について研究というか、深掘りがまだまだだと思います。やっといろいろな興味深い発見が出てきて注目され始めた感じですね。個人的には、もっとろう者の身体感覚について調べる必要があるではないかというふうに思いますが、いかがですか？

管野 そうですね。ろう者の身体感覚は聴者と違う理由のひとつは、手話があります。言語が違う。手話は視覚的な言語ですよ。その手話という言語があるので、体も聴者とろう者では違ってくる。言語と手話、言語と体、または文化、それらは関わりあっているんで、きちんと改めて...さっき福島さんがおっしゃった、アメリカで教わったことをそのまま持ち帰るだけではなくて、日本の裏にはいろいろ深みがある。なんていうか...研究がまだというよりも、素晴らしい、いい内容もたくさんあるのに、それをまだきちんと表に出せていない。それをもっと分析して、たくさん発見があると思います。ろう者が自然と身に着けたものがあります。皆無意識のうちにやっていることを改めて研究して分析することが必要だと考えます。

福島 そうですね。今までは「聞こえない」という点ばかりに注目されてきたようなイメージがあります。聞こえないから、情報保障が必要だ、とか手話が必要みたいな。でも最近はようやくろう者の身体感覚が面白いということで調べるというふうな。

西 身体感覚と言えば、デフスペースで、日本では引き戸が多く、アメリカにも引き戸はありますが、日本の方が多。ある女性が日本に来て、日本の文化について色々研究している中で『「縮み」志向の日本人』という本を書いている、おもしろかったです。例えば、扇子も日本人が考案しました。畳んで小さくできる。国土が狭いからコンパクトに生活しやすいよう工夫されていて、先ほどのドアの話も引き戸だと空間が狭いので、邪魔になりますよね。引き戸の方がスペースを使いやすいようになっている。それも関係あるかもしれませんね。

福島 本当ですね。実際にここ、5005も。日本人だから生まれたデフスペースっていう感じがあります。例えばアメリカはすごく広いので収納が必要ないんですけども、やっぱりここは狭いので。例えば机もたくさん並べたままにしておくのが邪魔で、企画などに合わせて壁際に寄せておくのが難しいので、例えば、花形テーブルというアイデアがあるんです。本当はろう者が集まる時に、楕円形に座れるといいですよ。でも丸いテーブルは収納場所がないので、テーブルの形を変えることを思いつきました。四角い天板に半円の天板をつけるのですが、それも日本人のろう者だから思いつくことができたと思います。そろそろ時間となりました。最後に一言ありますか。皆さんに伝えたいことありますか？

管野 今のお話、大事だと思います。日本人やろう者という身体感覚をみんなもっと話し合える場を作り、研究が進んだらいいと思います。

西 今、ろうコミュニティの中でデフスペースとかデフアートが少しずつ広まってきて、聴者でも知っている人がだんだん増えてきてはいますが、まだまだだと思いますので、日本の社会の聴者でろう者のことを知らない人や会ったことがないという人も多いので、そういうろう者の世界があるということを知る人が増えたらいいなと思います。

福島 そうですね。

管野 そうですね。そういったことに気づけたのはアメリカに行ったからだと思います。本当は日本にいいところがたくさんあるのですが、アメリカの方が進んでいると思って留学したけども、意外と日本もいいところもあると発見できた。アメリカに渡って文化の違いをいろいろ経験して改めて気づくことができました。

福島 日本人としてのアイデンティティは日本にいると考える機会がありませんが、アメリカや海外に行くと、あ、私日本人だったんだと改めて気がつくところありますよね。

西 違う国にいと、文化の違いからあれは日本の文化だったんだ、と気づいたり、アメリカにはあることが日本にはないとか、あるいは日本のいいところがアメリカにないなど、視野が広がり比較することができますね。

福島 今日3人集まって初めてお話してみて、いろいろと共通点や発見があり、違う点もありました。やはり集まって話をするというのは大事だなと思いました。次の機会に、もっとろう者の身体感覚についてお話しする場、研究する場を作っていきたいと思います。今日は皆さんご覧いただきまして、ありがとうございました。



## 座談会：交差性：点から面へ

登壇者：川俣郁美（5期）山本芙由美（11期）皆川愛（16期）

川俣 お集まりいただきありがとうございます。今回、日本財団海外留学奨学金事業20周年ということで、あつという間でしたね。そのなかで私たち3人が、それぞれ仕事や専門が異なる中で集まって、違いや同じであること、クロストークをしようということで、集まっていただきました。ありがとうございます。まず、自己紹介をしたいと思います。私は第5期、川俣郁美です。私は留学したのは2007年から2016年までの間でした。ソーシャルワークを学士で、大学院では国際開発と行政学を勉強し、帰国しました。今は日本財団で、アジアの障害者の支援、特にろう者が手話で教育を受けることができる環境整備の支援をしています。それから、ほかに日本財団のようなアジアの財団とのネットワークをつくり、アジアの課題を共に解決しようと続けてきました。会議を1年に一度開催しており、そちらも担当しています。

よろしく申し上げます。11期、山本芙由美さん。

山本 こんばんは。山本芙由美といいます。手話ではこう表します。漢字とは違いますが、このように表します。11期です。私は2015年、35歳のときに留学しました。2年間、オーロニ大学とギャロデット大学でろうLGBTQ+について学び、国際特別生として、現場支援の方法を学び、帰国しました。帰国後はろう児を中心とした放課後等デイサービスを6年前に設立し、今、管理者と児童発達支援の管理責任者を兼務し、ろうLGBTQ+の活動も並行して、ポチポチがんばっています。

川俣 お忙しいですね。次、16期の皆川愛さん。

皆川 皆川愛と申します。よろしく申し上げます。16期です。2019年から2021年までの2年間、留学しました。ギャロデット大学の大学院にてろう者学を専攻し、修了しました。

ろう者の医療関係の研究センターでの実習を経て、就職し、7月に帰国したばかりです。今は医療を中心とした様々な仕事に関わっているところです。

川俣 改めて、芙由美さん、愛さんそれぞれご専門性があると思いますが、何を専門とされているのか、また今のろう社会における課題についてのお考えをお話しいただきたいです。

まず、ふゆみさん。

山本 私が留学した目的は、2013年にろうLGBTの活動を始めた頃で、ちょうど12年がたちます。長いです。設立した当時は、ろうLGBTQ+のリーダーのロールモデルも含め、運動を進めるための知識がが足りない状態でした。そのようなこともあり、仕事を退職し、ろうLGBTQ+学が専門的に学べるギャロデット大学への留学を決意しました。学問だけでなく、現場での課題や支援方法など、日本にない部分を持ち帰ることができました。ろうLGBTQ+学には、セクシュアリティに関する手話単語や研究、分析があります。そのような知識に助けられ、帰国したときは、LGBTQ+の手話の作成に取り組み、普及してきました。日本には、日本特有の文化や背景があると思います。「言わない文化」「我慢する文化」があると思います。もちろん、それが良い方向になる時もありますが、自分のアイデンティティやそれぞれの多様性がなかなか可視化されにくい点があります。そこで、アメリカで学んだ、「自分を可視化する・主張する」、方法を日本にも少しずつ広めているところです。

川俣 先ほど、LGBTQ+に関する手話の分析があるというお話がありました。  
そのあたり、もう少し具体的にお話お願いできますか。日本の手話に関係するものもあれば、お願いします。

山本 日本の場合、性別二元論に基づいた手話表現が非常に多いです。諸外国から見ても珍しいと言われます。見た目で、「山本さん」の「さん」を女性もしくは男性で表したりとか、

川俣 (途中で反応) 確かにそうです

山本 「結婚」、「夫婦」、「尊敬」、「かわいい」もそうです。

川俣 (途中で反応) 夫婦ね

山本 .....そのような表現がそういうのが意外と多いです。

皆川 (途中で反応) そう

山本 「性別を分ける手話表現が多いため、ろうLGBTQ+当事者として違和感を感じてしまうのです。手話通訳を頼みづらいということも起きてきます。アメリカの場合、「結婚」(ASLで marry) は、性別を限定していません。また、「パートナー」も性別を分けることはあまりしません。そうした知見を得て、日本ではどうしようかと当事者で話し合いをしました。ジェンダーニュートラルな表現として、指差しを使う、相手を表す、人差し指で人を表すなどの方法がいいのではないかと話し合いました。ただ、手話通訳者の養成などでは、入門では最初から男女を分ける手話を教えるのですね。なので、受講者は刷り込まれてしまいます。家族構成の紹介でも、「お父さん」「お母さん」「子どもは娘、息子」と決まった表現があります。実際にはさまざまな形があり、パパがふたりであるとか、ママがふたり、結婚せずシングルを選ぶ人もいます。さまざまな形があることを、手話通訳者の養成の場に取り入れてほしいです。そのようなことも含めて、今、活動を進めています。全日本ろうあ連盟の「新しい手話」、いや違う、日本手話研究所で毎年発行されていますよね。2023年には、ようやくLGBTQ+関係の手話単語が掲載されました。少しずつです。

川俣 本当にそうですね。

山本 大きな変化があるわけではないですが、少しずつ、良いタイミングで変化ができればと思っています。

川俣 手話のような言語の中でも、無意識のうちに男女を区別する表現があり、知らず知らずのうちに誰かを傷つけてしまっていますね。この「傷つける」という手話に含まれる親指の表現(男性)もこれでいいのか、考えないといけませんね。

山本 本当ですね。

川俣 気づかせる、気づきをもたせることは大切な運動だと思います。

皆川 そうですね。(3人うなづき)

川俣 勉強になります.....。では次に、愛さん、何かありますか。お話どうぞ。

皆川 私のテーマは、ろう者の健康・医療・看護です。私は看護師の資格をもちますが、ろう者はこれらについて課題を抱えています。そのなかで重視すべき課題として思うのは、医療従事者がろう者のことを知る機会が少ないということです。聴覚障害ということだけはわかっているものの、実際にろう者に会ってコミュニケーションし、支援するというときには、ろう者の側が違和感を持つことが多いです。たとえば私は右利きで、筆談のときは右で書きます。右腕に点滴をされると、安静にしないといけないため、書く手段を失います。このことに医療者が気づくのが難しいということがよくあります。自分がろう者の経験があるからわかるけれども、医療者が意識化するにはどうしたらいいのか、ということを考えています。ふゆみさんがおっしゃった、ジェンダーの分離と同じように、「聞こえる人」「聞こえない人」という区分があります。実際にろう者との接触を経験しない、生活実態を見ないままだと、「聞こえない＝見えればOK、書けばOK」となるのですが、実際の生活は単純な理解で完結するのではなく、深いところでは違和感や困難があるということ、深部のズレに感じ取る必要があります。

「ろう」って何だろう。

ろうという言葉はあるけれども、意味は何だろうと、きちんと考える機会が、ろう者でもあまりないのですが、ギャロデット大学には、ろう者学があります。留学を通して行って学べば得るものがあるかと思いき、それがきっかけで留学しました。実際のろう者学は難しく、理論的枠組みもたくさんあります。聴覚障害という個人の属性だけではなく、ろう者を取り巻く社会的な構造や制度が、結局、ろう者にとって抑圧や差別を生産していることに改めて気づき、この認識が研究や教育にもつながっていきました。芙由美さんの言う二元論、社会構造に埋め込まれた課題一つ一つを解決していく必要があります。一度に取り組むことで、すべて改革できるというのは難しいと改めて思いました。だから、活動を固定化するのではなく、その時その時で、誰かが、必要なタイミングで働きかけていく必要があると思います。

川俣 なるほど。

皆川 郁美さんも、活動のなかで思うことがあると思います。いかがでしょう。

川俣 お二人の話を聞いていて、社会の中ではまだまだ、私たちにとって当たり前だと思込んでいることが、無意識のうちにやっていることが、LGBTQ+にとって、また、ろうにとって、合っていないことが残っているんだなと思いました。知らないあいだに抑圧し、格差を生じていることが、お二人の取り組みから伝わってきました。勉強になります。私は今、アジア、特にASEAN（アセアン）、ラオス、ベトナム、フィリピン、カンボジア、スリランカなどで、ろう聾の子どもが手話で教育を受けられるように支援する仕事をしています。特に、バイリンガルろう学校を設置する支援に携わっています。今、新しくインドネシアでプロジェクトが進行中です。アジアでは、日本も含みますが、まだまだ口話が強く、教員養成課程のなかでも、手話が必要という考えに至っていません。国連の障害者権利条約のなかでも、第24条で、インクルーシブ教育が大事だと明記されています。その中でも、ろう者は、その人のコミュニケーションのニーズに合った教育が必要だとあります。ですが、経済的にまだ厳しい国にとっては、統合が楽なのか、「インクルージョンがいいんだね」ということで、とにかく一緒に教室がいいんだね、というように、インクルーシブの意味を取り違えていることが多いです。また、学校ができて、ろう当事者リーダーが育ってきています。日本財団で支援してきた子どもたちがリーダーとなって、私も会う機会があります。るでも、ASEANの国々の教育省大臣のネットワークがあるのですが、そこで「聾学校より、通常校でのインクルージョンがいいんじゃないか」という話になるわけです。

川俣 今そういったインクルージョンの現場が地域全体で見受けられるようになり、やはり、ボトムアップとともにトップダウンへのアプローチも必要なんだと感じています。リーダーの育成のための教育は大切なことです。それだけではなく、政府や関係者と協働する必要があると感じている所です。

山本 なるほど、

皆川 そうですね。現場プラスですね。現場の取り組みを吸い上げられる組織、逆に言えば、上層部の現場に相応しいトップダウンがあれば、方針の浸透がスムーズな面もありますね。

川俣 そうです。

皆川 現場の取り組みを上層部が理解し、双方向型で共通した考え方をもとに方針が打ち出せる。本当に大切だと思います。

川俣 そうですね。

山本 そうですね。皆川さんのお話を聞いていて、LGBTQ+とは少し離れますが、運営している放課後等デイサービスを利用している子ども達のことです。最近、利用児者の中には地域の学校に通う子どもが増えたと思います。その子どもたちはほとんど手話を知りません。人工内耳の進歩によって口話でコミュニケーションがとれ、手話を覚える必要性がないというのです。まず、私がびっくりしたのは、ろう者は車の運転ができるの？と聞かれたことです。ろう者は車の運転はできないと思っていたというのです。この例のように聞こえない子どもたちの中で情報が足りず、その子たちの親御さんも情報を得られていないと思います。インクルーシブにより、聞こえる世界で暮らし、ろう者と出会うことのない環境で、聞こえない・聞こえない立場での暮らしのイメージが持ちにくい。放課後等デイサービスを利用することで、成人ろう者の大人と出会い、目指すことが出てくる。子ども達には第三の居場所、学校と家庭ともう一つの居場所が大切だと感じています。

皆川 本当ですね。

山本 子どもたちの中には「山本さん、補聴器付けないの？」と聞かれ、「付けなくても生活できる」と答えると、驚きの表情を見せることがありました。音声に頼らず暮らせることを知る。手話という言語で生活できる方法があると知り、接した子どもたちの知見が広がる。子どもたちに複数の選択肢があることが大切だと思います。そういう意味で、私の今の仕事は大切だと思います。

皆川 大切ですね。

川俣 本当に大切ですね。

山本 お二人の今までのお話に通じているかは分かりませんが・・・。

川俣 モデルの存在が大切ですね。自分の子どもの将来に親御さんもイメージが持てない時に、ロールモデルとの出会いで、将来像が持てる。積極的に活躍する先輩たちに接して、手話があることや、通訳がいればできる、工夫があれば自分にはできることがある。仕事に対するイメージも広がります。色んなモデルが存在することが大事で、多様性というところで、今言われたLGBTQ+はまだ数が少ないけれども、モデルがいるんだ、その存在に助けられる子ども達が多くいると思います。

山本 そうですね。留学中、アメリカの現場はとても先進的で多くの学びがありました。帰国後、逆カルチャーショックを感じるがありました。アメリカでの勉強も大変でしたが、帰国後、日本で活動を進める中で日本での活動の方がもっと大変だったなあと感じます。

同じ経験が皆さんにあると思います。お二人の乗り越えた経験というか、いかがですか？

皆川 芙由美さん達が発行されたサポートブックをいろんなところでお見掛けします。成長期にあるLGBTQ+の方々の存在は知っていても、本質を知る機会がない中で、ブックレットを読ませてもらって、改めて気づきがありました。ろう者のことが一律には語れないことと同じで、LGBTQ+の皆さんも皆一様ではなく、色々な方がおられる。見て知る機会がとても貴重ななと思っています。  
芙由美さん、素晴らしい、尊敬しています。

山本 ありがとうございます。このサポートブックですね。

川俣・皆川 そうです!!

山本 明晴学園にも送ったと思います。

皆川 そうです!

山本 ありがとうございます。

川俣 本当に自分の学生の頃はこういったサポートブックは学校に置いていませんでした。ゲイがいる、レズビアンがいる。LGBTQ+の人がいる。ということも知らなかった。でも、大学に入学すると当たり前のようにLGBTQ+の人達がいた。それが自然で当たり前のことだとわかっていれば、怖いだとか変だとかの思い込みも起きないと思う。普段から身近にそういったサポートブックがある、そして、実際にLGBTQ+の人たちを見る、と出会う。そうすると、お互い大差ないことが分かる。ろう者にも同じことが言えます。聞える人達から見て、ろう者と普段関わる機会がないためは見ためでわからないために、ろう者の暮らしぶりが想像できないですが、ろう者でも車の運転をしていたり、看護師もいること、存在を知ること、「なんだ! ろう者も私たちと同じ人間だったんだな」と感じてもらう。そういった情報の種を社会に撒いていきたいと思っています。

山本 それは大事なことです。

川俣 皆さんの活動そのものです。

山本 皆さん、本当に頑張っていますね。

川俣 そうですね。芙由美さんはサポートブックを発行しました。愛さんは特に手話動画配信ですね。文字だけではなく手話での発信を積極的に行っているようにお見受けします。そのことについて、思いはいかがですか?

皆川 そうですね。医療に関する情報や医療の手話表現もまだ少なく、私が大学で看護学を学び始めた頃は専門用語を学ぶ中で、日本語だけではイメージが膨らまず、理解に苦労しました。ただ、手話に変換すると、こういうことだったのかと、腑に落ちる瞬間が幾度ありました。病気や体の中で起こっている現象は目には見えません。例えば、「免疫」という言葉があります。手話で可視化することで理解に役立ちます。空間的な位置関係や動きを使って、抽象概念を具体的に表現するところは効果的に働くと思います。コロナやがんなどの情報発信は、私一人の力ではなく色々な団体の助成をいただき、専門家と協働しながら少しずつ進めている所です。今学校で働いているのですが、子供たちと話す中で、今まで言葉だけは知っていた概念が、その言葉の手話表現を見た時に更に理解が深まるという経験がありました。「ウイルス」という言葉、ウイルスは目には見えません。体内に侵入した瞬間に病気になるわけではありません。免疫が関わってきます。睡眠や規則正しい生活が送れていれば、免疫の働きが向上し、ウイルスの増殖を抑えることができる。そうした話をする子供たちがそれぞれの年齢なりに理解し、復唱というか、豊かな手話を見せてくれるのが楽しいです。

皆川 手話と医療。ろう者の中で継承されてきた素晴らしい手話を資源として発展させていけたらと思っています。芙由美さんの活動も川俣さんのろう教育を支援する活動もろう者社会の資源となっていると思います。それらとうまくつなげていけたらいいなと考えています。

山本 今のお話をお聞きして、手話通訳養成の中にも専門的な知識を積む機会があればいいと思います。LGBTQ+関連もそうです。医療分野においても言えるかもしれません。まだ進んでいません。専門知識を持つ手話通訳を養成する方法を少し話し合いたいと思います。ギャロデットで聞いたのは、4年課程の中で手話通訳を目指す学生は将来自分の得たい専門性、例えば医療分野、LGBTQ+領域など選択ができると聞いています。4年課程で専門知識を習得した通訳者が、通訳現場で働いている。日本の通訳は全領域を対象として業務を行うため、知識が浅く広くなります。どういった養成を行えばいいのか。そのあたりはどうお考えですか？

川俣 そうですね。手話通訳についてですね。愛さんいかがですか？

皆川 アメリカでは手話通訳養成は主に高等教育機関（大学等）が担っています。4年間を通して学びます。LGBTや医療、法律など、一般教養を幅広く学び、プラスして手話通訳技術や職業倫理を身に付けます。それらを4年間かけてやるのは大きいと思います。一方で、日本の場合は期間も短く、手話通訳養成は地域に託され、週一の講習会に通って、期間が終われば修了します。その期間は手話通訳技術が中心となっています。修了証後は、ワークショップや研修を受け、補完していくことが多いですが、アメリカの養成課程をそのまま日本に導入するのは難しいですね。

山本 そうですね。

川俣 そうですね。ろう者の活動の幅が広がっています。医療、LGBTQ+、アート、スポーツや大学での研究等、様々な分野でろう者が活躍しています。その中で手話通訳者をどのように育てていくかですね。現在、手話通訳士と手話通訳の2種類の資格があります。その2つでよいのか。アメリカの場合は基礎となる手話通訳専門技術の上に専門知識を載せる2階建ての構造です。医療、学校、法律専門等のように基礎の上に専門を積み重ねます。そのような方法もあります。今後は地域養成だけではなく、今の方法も大切にしながら、加えて大学や専門学校で専門分野に長けた手話通訳を育てる機会があればよいと思います。

山本 大きな話ですね。

皆川 地域の派遣通訳者の皆さんは研修で集まる機会に、病院に派遣された時に伝わらなかった経験から、医療分野の専門の勉強をしたいと声があがり、熱心に勉強をしている手話通訳者がたくさんいます。では、学びの機会をどう確保するか。それは通訳者・ろう者が、お互いに専門知や経験を持ち寄り、助け合いながら、継続的に学べる場が必要ですね。

山本 LGBTQ+もそうです。トランスジェンダーの方々はホルモン療法や適合手術を受ける時、手話通訳が難しいと感じることが多いと聞きます。その辺りを解決するために、将来的に専門知識のある通訳者が育って欲しいと思います。手話通訳者の皆さんは本当に熱心に個人の努力をなさっています。個人でお金を払って勉強している方はたくさんいます。学ぶ機会を提供するのは我々ろう者の役目というか。

皆川 そうですね。

山本 学ぶ機会が広がればいいですね。

川俣 コーディネーター業務は通訳依頼を受け、誰に依頼するのか、今は依頼が殺到していて、つなぐだけで精いっぱい。負担が大きいと聞きます。とにかく調整して繋ぐが、細かいところまで検証が難しい人もいると聞きます。コーディネーターも通訳者一人一人の専門性が分かる仕組みがあればなど、思いめぐらせるところがあります。

皆川 手話通訳で大切なことは言葉の意味をきちんと捉え、双方にリレーすることと、同時にろう者を傷つけない細やかさが大切です。LGBTの現場では、自認と違う手話表現の表出をされたら違和感を感じるでしょうし、今まで社会やろう同士の中で抑圧されてきて人にとって、通訳現場でもアイデンティティが適切に扱われないといったことが繰り返されることでトラウマを感じている方が多くいます。「またか」という思いを経験される。手話通訳場面だけではなく、ろう者同士でも細やかさや配慮をもった表現の研修が受けられる機会があればいいなと思います。

山本 アメリカで学び、知識を得て、日本に帰って感じたことはサポートというのか、人と人をつなげること。ハード面ソフト面で、身につけた知識を使える機会が必要だと思いました。日本に帰ってわかったのは1から自分で立ち上げる等頑張る人が多いように感じます。難しいですよ。

皆川 活動を長く続けられる人材と仕組みが必要なので、一人が背負う活動は長くは続けられませんね。多くの人が集まって、分担しながら活動を継続する続けるための、資金や場所の確保。日本財団はろう難聴者のための事業の支援はこうした基盤作りになっていると思います。

芙由美さんが助成を得て、ブックレットの発行をされたと思います。ろう者が活動金を得るテクニック、ろう者の申請スキルを高める必要があると考えています。

川俣 本当ですね。

山本 なるほど。

川俣 やはり立案申請承諾から、事業実施、決算報告のフローですね。プロジェクト管理ですね。そうですね、改めておふたりそれぞれの専門は違うけれど、ろう者のためにという意味で同じところを目指しています。お互い知らなかったことがあるかもしれません。集まって、一緒にできることはなんだろうみたいな、なかでできるといいですね。

山本 本当ですね。

皆川 川俣さんにお聞きしたいです。日本財団はこれまではリーダー育成の側面が大きかったと思います。今後の展望や課題など、少しお聞かせいただけますか。

川俣 日本財団が30年行ってきた障害者ろう者の支援を行ってきました。中でも特に教育面を中心に支援をしてきました。私は日本財団に入り、7年になります。いろんな現場に行きいろんな方とお会いし、以前日本財団に支援してもらいましたという声をたくさん聴きます。教育の機会の提供を行い、支援を受けた人が自然に自身の進みたい道を切り開く力を得て、学校の先生や研究者や自分の団体を立ち上げるなどリーダーがそだっていきます。日本財団もすべてを支援はできませんが、支援を終えたあとの現場で解消しきれない課題が残ったり、時代の変化と共に課題が形を変えて現れることもあります。当事者であるろう者が教育またはアイデンティティを育てる大切さを改めて感じます。なのでこれからもしっかりと教育支援を続けなくてはいけないと思っています。私も教育を受けて、留学の機会を得て知見が広がりました。知識、スキル、だけでなくネットワークから得た出会い、今もそれらに助けられていると感じます。教育の機会はとても大きいと思います。これかも教育の力によるリーダーの育成を頑張りたいと思っています。

川俣 これまではASEAN地域を中心に支援を行ってきましたが、これからはASEAN地全体で助け合えるような、点から面へというような中心を立ち上げ、そこから広がって行けばいいなと個人では考えています。ぜひ皆さんの協力をお願いしたいです。

山本 私は今神戸に住んでいますが、日本財団のマークを付けた車をよく見かけます。見るたびに留学時代を懐かしんでいます。

川俣 走る車をみるたびに、懐かしむ。そうですね。

皆川 そうですね。日本財団の付けた車、よく見ますね。

川俣 日本財団のマークを付けた船もありますよね。自分も支援してもらったなあ、何かやんなきゃいけないなあ、と思いますね。ぜひ事業のアイデアがあればいつでも立案申請をお願いします。

毎年10月に通常募集、年間通じた募集もあります。逆にお二人の今後の展望をお聞かせください。山本さんからお願いします。

山本 話が少しそれるかもしれませんが、1995年ろう文化宣言がありました。当時私は高校2年生でした。私にとって、宣言は衝撃的でした。あれから現在に至るまでろう者の暮らしもだいぶ変わりました。や若いろいろのリーダーが現れたり、ろう者のアートや演劇、LGBTQ+関連、若いろいろのリーダーたちが台頭しています。ろう者の大きな組織もありますが、良い意味で大きな傘の下を離れて、活動するのもありかなと思います。一つの団体だけに集まるのではなく、多様な生き方（進め方）がある。様々な活動のかたちがあれば私は面白くなると思います。プラスして、今までの私のLGBTQ+に関する活動はろう者の成人や手話通訳に対するものが中心でした。今後はろうの子ども達の知識教育をやりたいです。川俣さんのお話の中にも教育の機会という言葉がありました。ろう学校の中で「LGBTQ+かもしれない」と感じる子どもが増えています。教員 子どもに知識を教えてあげたいけど、方法が分からないという声が私のところに届いています。そういった方々の助けられるようにサポートブックを作成し、全国各地のろう学校に発送しました。役に立った、教えるやすくなったと聞いています。子どもと教員の良い関係づくり、その手立てに力を入れたいと思っています。

皆川 私も子供たちに健康教育を通して、医師とのやりとりができるスキルをや保健のことを身に付けて欲しいと思っています。親に連れられて病院に行くけれど、親と医師との話の内容が分からないのは当たり前という状況で、医療知識を得る機会がないまま成長し、その結果、病院への不信感や、手話通訳を利用しても、自分の状態を説明できないという経験を持つ方がたくさんおられるので、子供のうちから知識を得て、成人後、自分の健康をマネジメントできることは大事です。もう一方で、ろうの成人で病院に行くことを遠慮する方、苦手に思われる方は多くいます。どうすれば安心できる医療現場になりえるのか、医療現場のスタッフが気づきを持つこと。コミュニケーションの工夫や手話通訳の設置など、大きな改革はできないのですが、少しずつ対象や現場の実態に合わせて、少しずつ進められたらと思います。

川俣 アメリカで見聞を広め、アメリカにしながら、日本の話や研究があったと思います。実際日本に戻り、これから日本では現場レベルから政策レベルまで考える中で特に医療分野の課題は幅広いと思います。病気から心理、病院などです。ろうの赤ちゃんが生まれた時の告知など本当に幅広く、そして深いと思います。愛さんらしい方法で頑張り 続けて欲しいと思います。応援しています。改めて、私が嬉しく思っているのは留学を終えて日本に帰ってきたお二人がそれぞれの専門が違う中で今日のように考えを話し合えること、新しい気付き、知らなかった情報、知見や考え方に刺激を受けました。ぜひ今後もこのような機会をご一緒したいと思います。笑由美さんのデイサービスの様子を見学に行きたいです。

山本 どうぞどうぞ。やんちゃの子ども供達だけど、とても可愛いです。今まで本気でケンカできる相手がいなかったということでそのようなやりとりを面白がる子もいます。可愛いです。

川俣 その経験がいつか生きてくると思います。

山本 結局、自分はLGBTQ+の活動だけでなく、最近は子どもの人権についても考えています。

川俣 すごいですね。

山本 すごくないですよ。話をまとめるとそんな感じですよ。

皆川 テーマは人権

川俣 カッコいいです。

皆川 ワードが出ましたねいろんな場面で目にします。法律の整備は進みましたが、日常生活で人権を意識して実践していても目には見える形にはなりにくいものです。ひとりひとりの実践の裏付けにあるとしても見えないということが多いように思います。共有の場が必要です。聞こえる人たちの学会ではそういった場や機会がありますが、ろう者がそこに参加するには、情報保障の交渉等もあり、大変です。ろう者のテーマに関して深く話し合うのも難しいです。今日のように専門分野は違いますが、共通する思いや学びを共有すると日々のヒントになるので、ぜひ集まりたいですね。

山本 私は現在40代です。10年後には50代です。終活というのか安心して最期を迎えられる環境が良いと思います。ろう者が安心して、安らいで旅立てる環境があればいいなと思います。

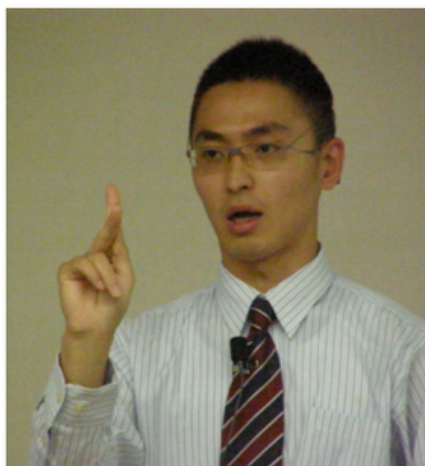
川俣 本当ですね

皆川 うんうん。

## 留学奨学金事業20周年記念式典で提示された奨学生ポスター記録

20周年記念式典の会場で展示された奨学生ポスターを掲載しました。ポスターでは、本奨学金事業を通して海外で学んだ奨学生が、それぞれの研究テーマや活動分野を紹介しています。教育、言語学、福祉、ICT、芸術など多様な領域に広がるテーマは、ろう・難聴者が専門職として社会に参画してきた歩みを示しています。各ポスターは、留学先で得た知識や経験をどのように日本の社会やろうコミュニティに還元してきたのかを示す記録でもあり、本事業の20年の成果と広がりを象徴するものとなっています。

氏名	期	留学先	留学テーマ	掲載ページ
太田 琢磨	第1期	ロチェスター工科大学／NTID	情報保障・障害学生支援	p.58
高山 亨太	第2期	ギャロデット大学	精神保健	p.59
菅野 奈津美	第3期	ギャロデット大学	デフアート/美術館	p.60
川上 恵	第4期	ギャロデット大学	手話通訳	p.61
福永 梢	藍4期	ギャロデット大学	スクールカウンセリング	p.62
武田 太一	藍4期	ボストン大学	ろう重複児・者へのサポート	p.63
川俣 郁美	第5期	ギャロデット大学	インターナショナルソーシャルワーク	p.64
山本 綾乃	第10期	ギャロデット大学	ろう教育/初等教育	p.65
牧谷 陽平	第11期	ロチェスター工科大学／NTID	ICT・教育	p.66
福島 愛未	第12期	ギャロデット大学	デフスペース	p.67
西 雄也	第12期	ギャロデット大学	デフアート・ろう教育	p.68
橋本 重人	第13期	ギャロデット大学	ろう発達障害	p.69
大西 啓人	第16期	ギャロデット大学	ろう生徒の英語教育・教材研究	p.70
皆川 愛	第16期	ギャロデット大学	ろう者の医療・看護ケア	p.71
鈴木 美彩	第18期	ギャロデット大学	手話教育と言語研究	p.72
菅原 鑑	第20期	スプロットショー・カレッジ	インクルーシブ教育	p.73



おおた たくま

## 第1期生 太田 琢磨

留学テーマ：情報保障・障害学生支援

留学先：アメリカ、ロチェスター工科大学(RIT)

国立聾工科大学(NTID)

留学時期：2006年02月～2007年08月

長野県出身。東海大学で情報通信工学、社会福祉を学び、アメリカの情報保障・障害学生支援について学ぶために留学。

帰国後、愛媛大学アクセシビリティ支援室で合理的配慮の提供を希望する学生の支援に従事している。



＜国立聾工科大学の前で＞



＜PEN-Internationalの皆さんと＞

RIT・NTIDにおける聴覚障害学生の支援や情報保障、支援技術、通訳派遣等について学び、アメリカにおける聴覚障害のある学生支援の多様性について学びました。また、アメリカ各地の大学でのインタビュー調査を行い、地域特性に応じた障害学生支援の多様性について学ぶ機会を得ました。結果、当時の日本の聴覚障害学生支援の取り組むべき課題について整理することができました。

この経験を糧にして、帰国後に日本の障害学生支援現場で役立てています。

## 現在の活動 & 仕事

現在、大学の障害学生支援室の職員として、聴覚障害を中心に障害のある学生に合理的配慮を提供する仕事を行っています。

聴覚障害学生へのエンパワーメント支援や、手話での相談対応・支援機材や補聴機器を使った対応等、幅広く対応しています。

また、支援に関わる支援者の養成や、スキルアップの講座などを行うほか、教職員に障害学生支援の理解を深めてもらうためのFD・SDや講演などを行っています。

今後も、障害のある学生が高等教育機関で安心して学んでいくことができる環境作りに取り組んでいきたいと考えています。



愛媛大学 職員  
太田琢磨さん(42)

聴導犬 ハンナ(5歳)

### 参加者の皆さまへ一言

聴導犬のハンナと一緒に暮らしています。ハンナは仕事ですので静かに見守りをお願いします。 <https://dogforlife.org>





たかやま こうた

## 第2期生 高山亨太

留学テーマ：精神保健

留学先：アメリカ、ギャローデット大学

留学時期：2006年8月～2009年5月

神奈川県出身。大学院でろう・難聴者の精神保健を学ぶため米国留学。2014年からギャローデット大学にて教育・研究に従事し、ろう者が生きやすい社会のあり方を実践的に探究。在アメリカ合衆国日本国大使館在外公館長表彰受賞。令和7年7月に帰国。



＜第二のDPN運動＞



＜テキサス州での臨床実習先で＞

米国留学では、座学だけではなく、臨床実習を通して精神保健やソーシャルワークの本場で理論と実践を深く学びました。ギャローデット大学で、ろう・難聴当事者である教授からろう・難聴者支援の専門教育を受け、医学・社会・文化モデルの視点から学問を統合的に理解。現場実習を通じて心理アセスメントやカウンセリングの技術を習得し、何よりもろうコミュニティの先達者から直接学び当事者主体の支援と研究のあり方を体得しました。この経験は、日本におけるろう者学と精神保健実践を結びつける視座の形成につながっています。

### 現在の活動&仕事

現在、大学教員として、ろう者学・障害学・精神保健を専門に、教育・研究・実践を横断しながら、現場と共に活動を行っています。また、米国での教育研究経験を基に、ろう者の社会参加や、災害・医療・精神保健分野に関する研究を展開 (<https://www.drtakayama.com/>)。日本に帰国後は、筑波技術大学客員研究員として研究に携わるとともに、日本同窓会支部代表として国内外の卒業生をつなぐ活動にも取り組んでいます。

最近では、日本人やアジアの若手ろう研究者やろう専門家育成に関心を持って取り組んでいます。今後も分野横断的な連携を重視し、実践と研究をつなげ、日本ろう者学の土台づくりに貢献していきたいと考えています。



### 参加者の皆さまへ一言

最近、ボストン大学でもう一度勉強し直しました。幾つになっても学問は未来を広げ、人と人、社会をつなぎます。今日の出会いや対話が、次の挑戦への一歩になることを願っています。留学相談は歓迎です！



かのの なつみ

## 第3期生 管野奈津美

留学テーマ：デフアート/美術館

留学先：アメリカ、ギャロデット大学大学院

留学時期：2007年8月～2010年8月

宮城県出身。大学で現代陶芸を専攻し、作品を制作する中で米国の「デフアート」という概念に関心を抱き、留学を決意。帰国後、都立ろう学校美術教諭などを経て、現在は言語や文化、身体性との関わりをテーマにプロジェクトや作品制作に取り組む。



＜大学院の教員・クラスメイトと＞

ギャロデット大学のアメリカ手話・ろう者学部（当時）の大学院にて、欧米のろう者アーティストへのインタビュー調査などを通してろう者による芸術活動の変遷やデフアートが各国のろう者コミュニティおよび社会に与えた影響などについて研究。また、2010年夏にカナダ・トロントのろう文化センター（Deaf Culture Centre）でインターンシップを経験。カナダ国内や世界中から集められたデフアートの芸術作品を展示するギャラリーの運営補助・ガイド業務などを担当。



＜カナダのろう文化センター＞

## 現在の活動&仕事

2019年～2022年、社会福祉法人トット基金「育成×手話×芸術プロジェクト」の美術部門事務局として企画運営に携わる。ろう者による芸術表現の新たな可能性を模索するアートプロジェクト

「Re; Signing Project」を立ち上げ、2023年5月に当事者の視点から身体や感覚を捉え直す「～視覚で世界を捉えるひとびと」展覧会を開催。現在は5005に勤める傍ら、美術館におけるろうガイド養成の取り組みも展開。今後もろう者がより豊かに芸術に触れられる環境づくりに取り組んでいきたい。

▶手話や視覚言語を起点としたワーキング・プレイス「5005」（東京・西日暮里）



▲「～視覚で世界を捉えるひとびと」展覧会



#5005PLACE

### 参加者の皆さまへ一言

5005では展覧会やイベントを開催していますので、ぜひお気軽にお立ち寄りください！



#RE\_SIGNING\_RJ



## 第4期生 <sup>かわかみ めぐみ</sup> 川上 恵

留学テーマ：ろう者学・手話通訳

留学先：アメリカ、オーロニ大学・ギャロデット大学

留学時期：2008年8月～2014年5月

沖縄県出身。ギャロデット大学ではろう者学を、大学院では通訳学を専攻しました。その後、全米手話通訳者登録協会認定のろう通訳士資格を取得。2014年の帰国後は、国際的な現場から地域の現場まで幅広く活動しています。近年は、東京デフリンピックにおいて、手話通訳コーディネーターとして携わりました。



<大学院通訳学部の教授・院生仲間と>



<お世話になった教授、Dr. Janis Coleと再会>

ギャロデット大学大学院通訳学修士課程（当時）にて、手話通訳研究・教育の第一線で活躍する教授陣に学びました。ASLを中心とする教育環境の中、ろう者・きこえる人の区別なく通訳を志す仲間と研鑽を積みました。大学院修了後は手話通訳派遣会社でインターンを行い、通訳の技術理論について実地的・体系的に学びました。これらの知見は、現在の通訳実践および専門的判断力、通訳者養成の基盤となっています。

### 現在の活動&仕事

米国での経験を基に、手話通訳の実践を積みながら、手話通訳者およびろう通訳者の養成・研修に携わっています。世界手話通訳者協会（WASLI）アジア地域ろう通訳者代表として、アジアにおけるろう通訳者育成にも取り組んでいます。

2025年末にロチェスター工科大学 / 国立聾工科大学国際手話通訳課程（資格コース）を修了。

今後は、通訳現場と養成の両面から、ろう者の社会参加の向上と手話通訳分野の発展を支えていきたいと考えています。



<インドネシアのろう通訳者養成講座の受講生と>

参加者の皆さまへ一言  
「信念を胸に、可能性を信じて  
一歩踏み出せば、  
未来は少しずつ広がります」



## 第4期生 ふくなが 福永 こすえ 梢

留学テーマ：スクールカウンセリング  
 留学先：アメリカ、ギャロデット大学  
 留学時期：2008年8月～2014年5月

山口県出身。ろう・難聴の子どもに特化した心理学を学ぶため、米国留学。帰国後は、地方でろう・難聴の子どもとその親を日常的にサポートできる職業として特別支援学校小学部正規教諭を選び、地元へ貢献。さらなるスキルアップを目指し、2026年4月から関西に拠点を移す。



<初めての現場実習にて>

<Dr. Wu & Dr. Beach、故JASS元会長留美子さんと>

「私たちはこれから意図してあなたたちの感情をゆさぶる。覚悟してほしい。」

スクールカウンセリング学科の入学オリエンテーションで言われた言葉です。当学科はろう・難聴の多様性に対応できるプロのカウンセラーを育成するべく、多文化カウンセリング学に力を入れていました。その言葉の通り、ジェンダーや人種、宗教、経済的地位などについて自分と向き合い続け、穏やかではいられないときも多々ありました。それぞれ冒頭の言葉が意味すること、あの日経験してよかったと現場に従事する今づくづ思います。臨床心理学とは別の独立した学問として学んだことを、今後も活かしていくつもりです。

### 現在の活動&仕事

#### ◆特別支援学校小学部教諭

山口県で初めて音声なしの手話言語を全面的に用いた教育・指導を行う

#### ◆NPO法人デフNetworkかごしま

児童発達支援事業DeafKids スーパーバイザー

絵本を用いた教育や支援について共に勉強中



#### ◆日本手話言語-日本語監訳ボランティア

ビジネスメールから学術誌寄稿文まで承っています



DeafKids 夏休み・冬休み特別企画で  
絵本の読み聞かせをベースに制作活動やスタッフ研修

#### 参加者の皆さまへ一言

オロニ大学よりOutstanding Alumni Awardを受賞した故野崎留美子さんが、同大第42回卒業式で送った言葉を送ります。

— 夢を叶えるために必要なものは、  
「時間」「場所」「人」である —





たけだ たいち

## 第4期生 武田 太一

留学テーマ：ろう重複障害児・者へのサポート

留学先：アメリカ、オーロニ大学&ボストン大学

留学時期：2009年7月～2013年8月

三重県出身。学生時代にろう重複児支援のアルバイトを通して、日本のろう教育に疑問をもち留学。帰国後は愛知県の聴覚・ろう重複センターにおける児童福祉事業で管理者として従事し、ろう・難聴・ろう重複児支援に携わる。



＜論文の打ち合わせ＞

ボストン大学のろう教育修士課程はバイリンガル教育の考えをモットーとしており、ろうの子どもたちはまず手話を第一言語とし、書記英語を第二言語としての教育アプローチ実践法を学んだ。その上で他の障害を併せもつ子どもたちへの支援のために特別支援教育修士課程の講義もいくつか履修した。教育実習でホーレスマン聾学校で中学部の重複クラス、聾ラーニングセンターで小学部の重複クラスを担当し、経験を積み重ねてきた。



＜ろう教育修士課程関係者と＞

## 現在の活動&仕事

愛知県名古屋市に本部をおく特定非営利活動法人つくしの傘下である聴覚・ろう重複センター藤にて児童発達支援・放課後等デイサービスの事業所の管理者として奮闘中。ろう・難聴・ろう重複児支援に役立つツールを考えたり、子どもたちが毎日楽しく過ごせる工夫を凝らしたりなど行っている。また聾学校との連携、保護者支援なども行う。

ろう重複児支援、早期支援、ろう通訳（アメリカ手話・国際手話）に関する活動もさまざまな立場の方々と協働しながら取り組む。日本ASL協会会長として協会運営にも関わる。



### 参加者の皆さまへ一言

だんだん年齢に抗えなくなってきました。皆さんが日々、あるいは定期的実践している健康法を教えてください。



かわまた いくみ

## 第5期生 川俣郁美

留学テーマ：インターナショナル ソーシャルワーク  
 留学先：アメリカ、オーロニ大学・ギャロデット大学  
 留学時期：2009年7月～2015年12月

栃木県出身。高校生の頃、偶然目にしたドキュメンタリー番組をきっかけに、発展途上国におけるろう者支援に関心を抱きギャロデット大学へ留学。同大学ソーシャルワーク学士課程、行政・国際開発修士課程修了。



＜2012年3月 国連NY本部での「ソーシャルワークデーにクラスメイト」と参加＞



＜2015年11月 アルバイトをしていた「学生多様性公平性推進室」で実施した研修での一コマ＞

米国には自費留学も含めて7年半滞在し、多くの方々に支援と温かい応援をいただきました。留学経験は今も大いに生きており、感謝の気持ちでいっぱいです。留学では、障害者、とりわけろう者に重点を置いた国際協力について学びました。「開発」とは経済やインフラの向上だけでなく、人権や教育、文化、ウェルビーイングなど多面的に捉える必要があること、また、外部の価値観を押し付けるのではなく、現地の人々が望む社会のあり方を主体的に選び、持続的な開発を当事者が中心となって実現していくことが重要だと学びました。ギャロデット大学では、世界各国から集まる留学生との交流を通して、各国のろう社会の生きた実情を学ぶことができたことも、大きな糧となっています。

## 現在の活動&仕事

日本財団にて、東南アジアを中心としたろう者支援事業のコーディネート等を担当しています。教育から就労まで切れ目のない支援を目指し、各国のろう当事者、支援団体、教育機関、行政関係者との皆さまと連携しながら、地域の実情や文化的背景を踏まえた持続可能な支援のあり方を模索する日々です。

また、宇都宮市聴覚障害者協会・栃木県聴覚障害者協会の理事として、地元でのろう運動にも関わっています。東京2025デフリンピックでは応援アンバサダーを務め、大会の意義や魅力のみならず、手話やろう文化の魅力を発信に努めました。



＜2025年8月 ラオスのバイリンガルろう学校＞

### 参加者の皆さまへ一言

東京2025デフリンピックへの温かいご声援、本当にありがとうございました！皆様の応援が大きな力になりました。デフリンピックで得た経験と学びを、今後は国際開発の現場にも生かしていきたいです！



やまもと あやの

## 第10期生 山本綾乃

留学テーマ：ろう教育／初等教育

留学先：アメリカ、オーロニ大学、ギャロデット大学

留学時期：2014年7月～2017年7月

埼玉県出身。群馬大学教育学部で障害児教育について学ぶ過程において、アメリカにおけるろう教育について関心が高まり、留学を決意。帰国後は、群馬県聴覚障害児児童クラブきらきらで児童指導員を経験。



＜院の同級生たちと＞

ギャロデット大学大学院では、ろう教育学部特別プログラムにて、ろう難聴児にとっての教育のあり方や理論、指導法など幅広く学び、学生同士でも議論を重ね、考える力を養いました。メリーランド州立ろう学校での教育実習や、ケンダルろう学校の放課後プログラムのスタッフでの経験はかけがえのない時間でした。卒業後は、オペアプログラムを利用し、デフファミリーの子どもたちの学習生活支援に二年間関わり、ろう学校の早期教育プログラムに保護者として参加し、経験を積むことができました。

## 現在の活動&仕事

群馬大学 非常勤講師

群馬大学共同教育学部附属リカレント教育センター手話言語教育部門の一員として、社会人の方々が手話及び手話通訳スキルの習得を目指せるよう、日本手話指導に関わっています。また将来ろう学校や難聴学級の教員を目指す大学生を対象に、アメリカ手話の指導にも関わっています。手話が数あるコミュニケーション手段の一つとして広がっていくことを願っています。



＜ケンダル聾学校のハロウィンイベント＞



### 参加者の皆さまへ一言

群馬県聴覚障害児児童クラブきらきらのインスタです。群馬のろう難聴の子どもたちの活動の様子をぜひご覧ください☆



まきたに ようへい

## 第11期生 牧谷陽平

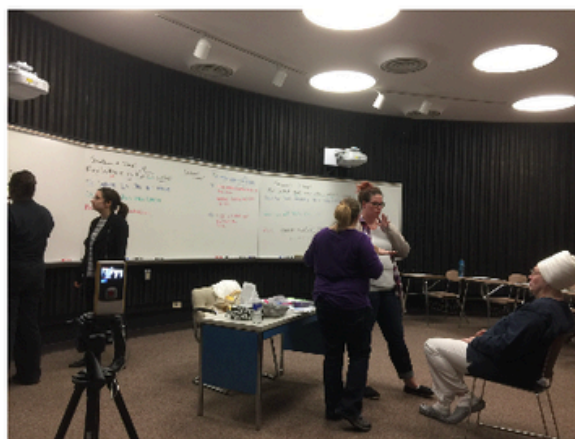
留学テーマ：教育・ICT関係

留学先：アメリカ、オーロニ大学、

ロチェスター工科大学(RIT)/国立聾工科大学

留学時期：2015年8月～2018年5月

香川生まれ育ち。中学生時代に教員を目指そうと決意。大学卒業後、地元の聾学校で働き、課題を目の当たりにし、渡米留学を決意。RITではMSSE(中等のろう教育専攻)を専攻。帰国後、地元の聾学校で再び教鞭をとる。



＜MSSEの同期とロチェスター-聾学校にて＞

＜いろいろな意味で衝撃を受けた言語学の授業＞

ろう教育でICTをどのように活かすか、また理想のろう教育とはどんなものであるかを探し求め渡米留学。最初は方向性も全く決まらず試行錯誤の日々。RITへ進学したあとはろう教育を専攻することになり、4つの柱(①教職に必要な知識の授業、②指導法、③言語学、④教育実習)の授業を2年かけて履修。バイリンガル教育の基盤を学習し、ろうであることに誇りを持ち、社会の一員として生きていくために必要な教育を学習。十数名のクラスメイトと励ましあい、助け合って卒業できた。

### 現在の活動&仕事

地元の香川県立聴覚支援学校(R4.4～名称変更)にて教諭として働く。帰国後は1年間、高齢者介護の施設で勤務。その後、香川県立聾学校に配属され、小学部、高等部へと経て、2026年1月現在、中学部で2名の子どもの学級を受け持つ。数学を教えているが、その傍ら、情報の授業や、重複障害の授業も受け持つ。オーロニ大学のトム先生の授業で学んだ「ろう文化入門」で、「ろう」であることは何かを念頭において、子どもたち自身がきこえにくさを受け入れられるよう、ロールモデルとしても勤務。

「きこえなくなってもいい。手話も日本語もほかの言語も使えるようになっていろいろな人と話せるようになれば人生は豊かになるんだよ」を日々、子どもたちに教えている。



香川県立聴覚支援学校のHPより

#### 参加者の皆さまへ一言

香川県立聴覚支援学校のHPも更新しているので、ご覧になってください!

<https://www.kagawa-edu.jp/rogaku02/>



ふくしま めぐみ

## 第12期生 福島愛未

留学テーマ：DeafSpace Design(デフスペースデザイン)

留学先：アメリカ、オーロ二大学・ギャロデット大学

留学時期：2016年08月～2019年04月（内7ヶ月休み）

大阪府出身。筑波技術大学で建築を学んだのちギャロデット大学でDeafSpace Designを学ぶ。帰国後、筑波技術大学大学院で日本のDeafSpaceを研究。卒業後、Frontrunnersでメディアを専攻し、欧州各国のデフスペースデザインを調査。



＜念願のギャロデット大学で＞



＜DeafSpace事務所でインターン＞

DeafSpace Designとは、ろう者の身体感覚や空間の感じ方を生かしたデザインのことです。2015年にギャロデット大学で考案されました。従来のバリアフリーやユニバーサルデザインが「音の情報を補うこと」に重きを置いていたのに対し、DeafSpaceは「ろう者が持つ感覚や能力を活かすこと」を目的としています。私はギャロデット大学でDeafSpaceを学ぶとともに、大学にあるDeafSpaceの事務所でインターンシップを行い、理論だけでなく実践的なデザインも学びました。

### 現在の活動&仕事

- ・国内外でDeafSpace Designの講演
- ・DeafSpace Designアドバイザー
- 日本で初めてDeafSpaceの概念を取り入れて改修した文化施設、5005（東京・西日暮里）
- ・一般社団法人000めとてラボ
- 国内のろう者が住む家のDeafSpaceを取材。詳しくはめとてラボのnoteから



＜2025年2月に行った展示会の様子＞



### 参加者の皆さまへ一言

WEB：<https://deafspace-library.com>  
↑日本を含む世界中のDeafSpaceが見れます。ぜひご覧ください。





## 第12期生 <sup>にし</sup> 西 <sup>ゆうや</sup> 雄也

留学テーマ：ろう教育/デフアート

留学先：アメリカ、オーロニ大学、ギャローデット大学大学院

留学時期：2016年8月～2019年5月

大阪府出身。

ギャローデット大学大学院ろう教育学部に在学し、バイリンガル教育や異文化教育の理論等を学ぶ。その傍らDe'VIAカリキュラムチームのメンバーとして参加し、デフアート(De'VIA)活動に携わる。



<メリーランドろう学校のアートクラス>



<De'VIAカリキュラムグループの仲間たちと>

米国留学中はギャローデット大学大学院での座学に加え、メリーランドろう学校にてバイリンガル教育のもとアートクラスを担当するインターンシップを経験。De'VIAカリキュラムグループに参加し、米国ろうアーティストやろう教員との交流、ワークショップや作品制作活動等に関わった。さらに米国各州やカナダのろう学校を訪問し、得た知見や経験を日本のろう教育実践に活かしている。

### 現在の活動&仕事

明晴学園教諭。

主に美術担当をし、バイリンガル・バイカルチュラル教育を基盤とした教育実践を行っている。

美術の授業ではデフアート (De'VIA) カリキュラムを取り入れ、ろう者のアイデンティティや言語的マイノリティの視点から自己表現を深める教育を展開している。

その他、いくつかの講演を行い、

- JASS主催のチャットサロン
  - アーツカウンシル東京主催「だれもが文化でつながるサマーセッション」
- などの場で、デフアート/De'VIAの意義や教育的可能性について発信してきた。



#### 参加者の皆さまへ一言

明晴学園のHPについてはこちらをご覧ください。  
<https://www.meiseigakuen.ed.jp>

※インスタもあります(右のQRコードより)



MEISEIGAKUEN FOR DEAF



はしもと しげひと  
**第13期生 橋本 重人**

留学テーマ：ろう発達障害

留学先：アメリカ：オーロニ大学、ギャロデット大学

留学時期：2017年8月～2020年5月

徳島県出身。愛媛大学大学院でろう学校教員免許状を取得。卒業後、3校のろう学校で勤務し、幼稚部・小学部・中学部にて指導を経験。発達障害を併せ持つろう児童生徒への支援に強い関心を持ち、専門性を高めるためにアメリカへの留学を決意。



＜ギャロデット大学の仲間たち＞



＜オーロニ大学にて 同期・山田と＞

アメリカのワシントンD.C.にあるギャロデット大学での自主研究では、複数の州で発達障害・重複障害のあるろう児童生徒に指導を行う教員へのインタビューを実施教員に求められるスキルについての調査を実施。結果、児童生徒の学校生活において教員の存在や姿勢が大きな影響を与えること、特に教員の前向きな態度が重要であることが示された。また、ろう教員としての視野を広げるため、ろう教育に加え、ろう者学やろうカウンセリング学等も履修した。

## 現在の活動&仕事

留学終了後、カリフォルニア州立ろう学校フリーモント校（北カリフォルニア）にて、高等部および小学部の特別支援学級を4年間担当した。自閉スペクトラム障害を併せ持つろう児童への教材研究・教育カリキュラムを、同じチームの教員と協力しながら行ってきた。

現在は、同校リバーサイド校（南カリフォルニア）において小学部の単一学級を担当し、一般学級の中で特別な支援を必要とする児童一人ひとりに寄り添いながら、日々工夫を重ねて指導にあたっている。

リバーサイド校のマスコットキャラクターは「Cubs（カブス）」（=子ぐま）。



### 参加者の皆さまへ一言

カリフォルニア州立ろう学校の各校のホームページをご覧ください。

フリーモント校



リバーサイド校





おおにしひろと

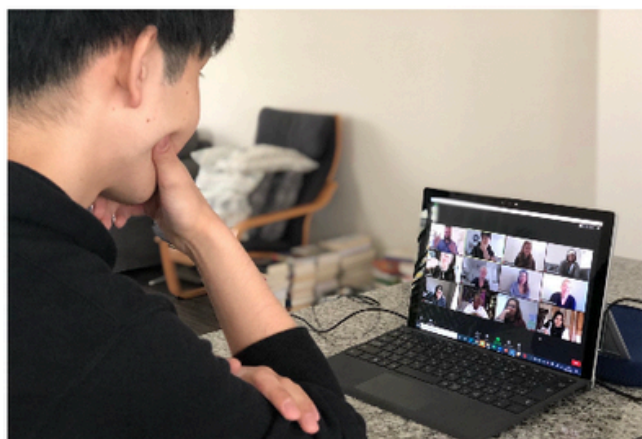
## 第16期生 大西啓人

留学テーマ：ろう生徒のための英語教育及び英語教材

留学先：アメリカ、ギャロデット大学

留学時期：2020年8月～2022年6月

奈良県出身。中学で英語の楽しさに出会い英語教師を志す。大学では英語教育を学び、院ではろう教育を学ぶため米国留学。卒業後は、ろう難聴の子どもたちが自分らしく生きられる社会を目指し、多様な学びの選択肢を広げる活動に取り組んでいる。



### ＜コロナ禍のため、オンライン授業＞

大学では英語教育を学んだが、ギャロデット大学ではろう教育を中心に学び、バイリンガル教育やリテラシー教育など基礎理論を修得した。実習で感じたろう学校での違和感を授業で言語化し、自身の成長と結びつけながら、教育知識をもとに多様な教育現場を説明できる自信を得た。その後は発達段階や第二言語習得理論など言語学分野にも関心を広げ、学びを深めるために自ら学習機会を作り、理論を学ぶ楽しさから多くの論文を読み込む日々を過ごした。知的探究心が高まった時期であった。



### ＜授業後、みんなで交流＞

## 現在の活動&仕事

現在、NPO法人Silent Voiceに所属し、教育事業「デフアカデミー」の運営に携わっている。学校や家庭以外にも学びの場がある社会を目指し、子どもたちにとっての「第三の場」を提供するため、さまざまな学習機会を企画・実施してきた。これまでにロールモデル講演会や大学進学相談会を行い、現在は自己決定理論に基づき、子どもたちの内発的動機を育てる教育のあり方を模索している。

あわせて、関西デフリースクール「しゅわっち」の代表として、「日本手話で学び、遊び、体験できる」を理念に活動を継続。近年は運動会を開催し、約100名の子どもが参加した。



### ＜しゅわっち運動会スタッフメンバー＞

#### 参加者の皆さまへ一言

関西デフリースクール「しゅわっち」も引き続き応援よろしくお願ひします。笑  
インスタ：syuwatti2000「しゅわっち」



## 第16期生 **皆川愛**

みなかわ あい

留学テーマ：ろう者への看護・医療支援

留学先：米国ギャロデット大学大学院ろう者学研究科

留学時期：2019年8月～2021年5月

東京都出身。聖路加国際大学卒業後、看護師として特別養護老人ホームやろう者向けの健康教育に携わる。ろう者の健康格差に関する研究方法と介入を学ぶため留学。修士課程でろう者学を修了し、公衆衛生・メンタルヘルス研究センターに勤務後、本帰国。



＜ろう者学修士課程の先生・同級生と＞



＜ろう健康公平センターのメンバーと＞

「ろうの問題を真の意味で解決するには、社会の本質を理解する必要がある」  
ろう文化研究の第一人者である Paddy Ladd の言葉です。ろう者が快適に医療を享受するためには、単なる手話やマニュアルの習得ではなく、一人ひとりが抱く「ろう」の意味を捉え直し、組織や制度の構造に働きかけること。ろう者が医療現場で感じるずれら、健康格差について個人の責任ではなく、言語剥奪や偶発的学習の不足といった社会構造の問題として俯瞰的に考えることができ、介入を考えるに役立っています。在学中および修了後には、ろう者の公衆衛生と精神保健を専門とする研究センターで、手話を前提とした健康格差研究や医療情報の翻訳に携わり、国内では希少な実践知を得ることができました。



＜Paddy Ladd氏と＞

## 現在の活動&仕事

昨夏に本帰国し、養護教諭としてろう児の健康を育む実践に携わるとともに、医療と命につながる通信インフラの研究調整や、手話による情報発信・ヘルスリテラシー研究に従事しています。今後は、国内の現場にもっと踏み入れながら、ろう者の健康格差を構造的に是正する取り組みを続けていきたいと思っています。

### 参加者の皆さまへ一言

留学は、世界と直接つながる力を身につけ、ろうコミュニティを牽引するリーダーと出会い、多くのヒントを得られる点に大きな魅力があります。ぜひ世界に羽ばたいてください 🇺🇸



◀医療者向けガイドラインや

がんや糖尿病などの手話動画を発信しています





すずき みさ  
**第18期生 鈴木美彩**

留学テーマ：L1L2 比較研究の手話教育への応用

留学先：アメリカ、ギャロデット大学

留学時期：2022年8月～2025年12月

埼玉県出身。日本社会事業大学在学時、交換留学の機会を得て、ギャロデット大学に2学期特別学生として留学。コロナ禍でオンライン履修のみだったが、手話言語学入門の授業の面白さに魅了され、院進学を決意。後に手話教授に特化したMASLEDも履修。



＜授業で班を組んだ仲間たちと＞



＜イベントにて手話の聞き取り調査中＞

言語学修士課程では、L1・L2研究にとどまらず、言語学の諸分野に幅広く触れた。助成金によるろう児向け認知科学の啓発活動、学内の世界の言語と文化学部における日本手話クラスの指導、コカ・コーラ社のブランドサイン開発、学会参加など授業外の実践にも携わった。MASLED（手話教育修士課程）では教育哲学や評価の理論に加え、指導案作成や映像教材制作を通して、手話教授の理論と実践を結びつけて学んだ。

## 現在の活動&仕事

卒業後は学生ビザのインターン制度を利用し、日本手話クラスの指導や研究補助員としてELANを用いた手話アノテーションに携わった。あわせてバージニア州にある公立高校で新設されたASL対面プログラムの立ち上げと授業を担当。2年間のインターン修了後、令和8年度から新たな進路へ進む。今後もしばらくは翻訳・通訳や研究補助の仕事の続け、培ってきた知識と経験を生かし、創造力をもって多様な資源づくりに取り組んでいきたい。L1とL2の学習に役立つ資源を開発することで、1人でも多くの方の役に立ちたい。

＜課題のポスターを他の学生に説明中＞



笑いは日々を明るく彩ってくれます！クスッと笑える動画や留学当時の学んだことを真面目に話す動画など色々投稿してます。よかったら見てみてください！これからのモチベーションになります😊





すがわら かん  
第20期生 菅原 鑑

留学テーマ：ろう重複生徒のインクルーシブ教育の比較

留学先：カナダ、Sprott Show College

留学時期：2024年12月～2025年11月

東京都出身。東京理科大学で数学を専攻し、その過程で教育の道を選択する。特別支援教員の免許を取得するために、東京学芸大学に改めて入学。修了後、約10年間、千葉県の特設支援学校で教師として勤務。



＜同じコースの学校の同期達と共に＞



＜実習中の授業風景＞

これまで日本で教員として勤務する中で、「一斉指導では支援が届きにくい子どもたち」の存在に強い課題意識をもつようになりました。より実践的なインクルーシブ教育を学ぶために、カナダへ渡航し、Sprott Shaw Collegeに入学しました。現場実習では、主にろう重複のある生徒とペアに関わり、学習面・生活面・情緒面のサポートを行いました。カナダでは、障がいの有無に関わらず児童・生徒一人ひとりの特性や強みを尊重した支援が日常的に行われており、特にろう重複の生徒の支援方法、資格的支援、構造化された環境づくりについて深く学ぶことができました。

## 現在の活動 & 仕事

現在は都内にある小学校の特設支援学級の先生として復帰し、それと並行して放課後等デイサービスや以前アルバイトで関わっていた塾講師としてお手伝いをさせてもらいながら、より多くの子ども達と関わりをもつ時間を増やしています。

将来的にはこれまでの経験や学びを活かして、聞こえにくさのある児童・生徒が通常学級で困難なく学べたり周りとのコミュニケーションがスムーズに取れたりする環境を整える橋渡しができればと考えています。



## 参加者の皆さまへ一言

一人ひとりの「できる」を大切にする教育を、国や文化の違いを越えて考え続けています。皆さんの考えも聴くことができたら嬉しいです！

## これまでの奨学金同窓生および奨学生 第1期生から第20期生まで

	年度	氏名	留学先	研究テーマ
第20期	2023	菅原 鑑	スプロットショーカレッジ	カナダと日本におけるインクルーシブ教育の比較
第20期	2023	森本 恵実	崇実大学	ろう者への第二言語としての日本語習得支援
第19期	2022	金本 小夜	リーズ大学大学院	現代聾文学における日英比較
第18期	2021	鈴木 美彩	ギャロデット大学大学院	第一言語と第二言語の比較研究による手話教育
第18期	2021	田村 誠志	ギャロデット大学大学院	手話言語を書記言語に変換する書記法の開発
第16期	2019	大西 啓人	ギャロデット大学大学院	ろう生徒の英語教育・教材研究
第16期	2019	皆川 愛	ギャロデット大学大学院	ろう者への医療・看護ケア
第13期	2016	橋本 重人	ギャロデット大学大学院	ろう教育／発達障害
第13期	2016	山田 茉侑	ボストン大学大学院	乳幼児教育相談・親支援
第12期	2015	西 雄也	ギャロデット大学大学院	デフアート・ろう教育
第12期	2015	福島 愛未	ギャロデット大学	デフスペース
第11期	2014	牧谷 陽平	ロチェスター工科大学／NTID大学院	ICT・教育
第11期	2014	山本 芙由美	ギャロデット大学	ろうLGBT支援
第10期	2013	辻 功一	カリフォルニア州立大学チコ校	IT・経営学
第10期	2013	山本 綾乃	ギャロデット大学大学院	ろう教育・初等教育
第9期	2012	瀧澤 泉	ギャロデット大学大学院	ろう児向け絵本制作
第9期	2012	福田 桂	ギャロデット大学	盲ろう者支援

## これまでの奨学金同窓生および奨学生 第1期生から第20期生まで

	年度	氏名	留学先	研究テーマ
第7期	2010	川口 聖	ギャロデット大学大学院	言語学
第7期	2010	中川 美幸	ギャロデット大学大学院	ろう・難聴児と人工内耳児の早期教育
第5期	2008	川俣 郁美	ギャロデット大学大学院	スクールソーシャルワーク
第4期	2007	川上 恵	ギャロデット大学大学院	ろう学・手話通訳システム
第4期	2007	武田 太一	ボストン大学大学院	ろう重複障害支援
第4期	2007	福永 梢	ギャロデット大学大学院	学校カウンセリング
第3期	2006	岡田 孝和	サンタクララ大学大学院	高等教育機関運営
第3期	2006	管野 奈津美	ギャロデット大学大学院	美術館コンサルタント・アート
第3期	2006	富田 望	ギャロデット大学大学院	ろう教育・英語教育
第2期	2005	春日 幸三	ギャロデット大学	手話通訳養成・労働
第2期	2005	高山 亨太	ギャロデット大学大学院	精神保健
第2期	2005	谷口 恵美	ギャロデット大学	ろう者の英語教育
第1期	2004	池上 真	ギャロデット大学大学院	法律
第1期	2004	太田 琢磨	ロチェスター工科大学／ NTID	情報保障

## 編集後記

# 20年の歩みを語る — 奨学生たちの経験から見えるろう社会の広がり

本記念誌の制作は、日本財団聴覚障害者海外奨学金事業の20周年を迎えるにあたり、「これまでの歩みをどのような形で残すべきか」という議論から始まりました。10周年記念誌では、奨学生一人ひとりの活動を紹介する形でしたが、今回は少し違う形を模索することになりました。そこで浮かび上がったのが、「専門領域ごとに集まり、対話を通して20年を振り返る」という座談会形式の記念誌構想でした。

実際に座談会を企画してみると、同じ奨学金事業の修了生であっても、互いの専門分野や活動について深く語り合う機会はこれまでそれほど多くなかったことに気づかされました。言語、ろう教育、福祉、医療、情報保障、アートなど、それぞれが異なる領域で活動しているからこそ、同じ場に集まったときに見えてくる共通点や新しい視点がありました。

ある座談会では、海外で学んだデフアートの経験が、日本の教育現場の中でどのように形を変えて根付いていったのかという話がありました。また別の場では、医療や福祉の現場で、ろう者の生活経験から見えてくる課題が語られました。情報保障の議論では、技術の進歩によって支援の形が変化していく中で、「本当の意味での情報保障とは何か」という問いが投げかけられました。さらに、手話や言語学をめぐる対話では、手話を通して世界を理解することの意味が改めて共有されました。印象的だったのは、多くの登壇者が「海外で学んだことをそのまま日本に持ち帰るのではなく、日本の社会や文化の中でどのように活かしていくか」という点について語っていたことです。ある参加者は、アメリカで学んだ考え方を日本の現場に持ち帰ったとき、思うように伝わらず試行錯誤を重ねた経験を語っていました。また別の参加者は、長い時間をかけて少しずつ理解が広がってきた変化を振り返り、「最初は種のようなものだった」と表現していました。その言葉は、本事業が20年をかけて積み重ねてきた歩みそのものを象徴しているように感じられました。

このように本奨学金事業は2004年に第1期生を送り出して以来、2023年度の第20期までに、計31名の奨学生を海外へ送り出してきました。人数として見れば決して多くはないかもしれませんが、それぞれが異なる分野で学び、それぞれの場所で問いを生み出しながら活動してきた歩みは、日本のろう社会の知の広がりを確実に形づくってきました。

今回の記念誌では、もう一つ大きな試みを行いました。それは、手話による語りを中心に据えた記録の形です。座談会の内容は、まず手話動画として記録され、その語りをもとに、本誌のように文字による記録を作成するという流れでした。つまり、本誌に掲載されている文章は、手話による対話を翻訳する形でまとめられたものです。これは、ろう者の言語である手話を知の表現の中心に位置づけるという、本奨学金事業の理念とも深く関わる試みでした。

編集作業を進める中で、こうした対話の一つ一つが、日本のろう社会がどのように変化してきたのかを静かに物語っていることにも気づかされました。かつては海外で専門的に学ぶろう者の姿はまだ珍しいものでした。しかし今では、教育、研究、福祉、芸術など多くの分野で、ろう・難聴者が専門職として活躍する姿が見られるようになっていきます。本記念誌に収められた語りは、その変化の過程を記録する小さな証言・エピソードでもあります。

## 編集後記

最後に、本記念誌の制作にあたり、ご多忙の中で座談会に参加して下さった奨学生の皆様、そして本事業を長年支えて下さった日本財団、日本ASL協会をはじめとする関係者の皆様に、そして、本海外奨学金事業を応援して下さったろう社会の皆様に、心より感謝申し上げます。

20年という時間は決して短いものではありません。しかし同時に、ろう社会の未来という長い歴史の中では、まだ一つの節目に過ぎないのかもしれませんが。本記念誌に収められた対話が、これまでの歩みを振り返る記録であると同時に、次の世代が新しい問いを生み出し、新しい社会を構想していくための出発点となることを願っています。末筆になりますが、本記念誌が、手話という言語による知の記録の一つの試みとして、これからのろう社会における記録・物語記述のあり方を考える小さな一歩となれば幸いです。

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業同窓会を代表して

20周年記念誌編集委員

鈴木美彩・高山亨太・福島愛未・牧谷陽平・皆川愛

# 日本財団聴覚障害者 海外留学奨学金事業 20周年記念報告誌

2026年3月15日発行

編集

「日本財団聴覚障害者海外奨学金事業」留学奨学生同窓会

20周年記念誌編集委員

鈴木美彩・高山亨太・福島愛未・牧谷陽平・皆川愛

発行

特定非営利活動法人 日本ASL協会



日本ASL協会  
Japanese ASL Signers Society



協会Website

<http://www.npojass.org>



留学ブログWebsite

<https://blog.canpan.info/deaf-ryugaku/>



E-mail (代表)

[office@npojass.org](mailto:office@npojass.org)



E-mail (留学事業専用)

[ryugaku@npojass.org](mailto:ryugaku@npojass.org)



FAX

03-3264-8977



Address 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-3-11 飯田橋ばんらいビル701